東方神猫伝

メリィさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方神猫伝

【Ｎコード】
Ｎ１５３９Ｖ

【作者名】
メリィさん

【あらすじ】
見知らぬ土地、見知らぬ植物、挙句の果てには妖怪だと？何故か気付いた時には遥か昔に飛ばされていた主人公。しかし自分は人の姿ではなく、猫の姿になっていた！これは東方の世界に飛ばされながらも、チートな能力を使ってなんとか生きていく。これは今では有り触れた東方世界への転生最強主人公のお話である。処女作になります。見苦しい所もあるかと思いますが、頑張って行くので宜しくお願いします。

始　「気付いたら猫」（前書き）

この駄文は『上海アリス幻樂団』様による弾幕ＳＴＧ『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』シリーズの二次創作・幻想入り物に御座い。

色んな転生物の幻想入りを見て書きたくなって始めました。

後悔はしていない。

始　「気付いたら猫」

やぁ皆さんこんにちは。
突然で悪いが、俺は今ひじょぉぉぉに困ってる。

何故かと言うと……

一、視線が超低い。

二、周りは自然でいっぱい。

三、記憶が無い（主に名前）

というなんとも言えない素晴らしい状況に陥っている。
それに加えてもう一つ。
とてつもなく重要且つ、否定したい事実がある。

なんというか、最初のでなんとなく分かるだろう。

「……なんでぬこなん？」

知らん人が見たら気が狂ってると思うだろう。
俺も出来れば全面否定したい。
しかし水面下に映る自分の姿は紛れも無くあの哺乳類の可愛いあん畜生な訳で……

「でもだからってなんでぬこなん？」

少々気落ち気味に言葉を吐き出す。
尻尾が垂れ下がったのが自分でもなんとなく分かる。

……どうしてこうなった。

俺は今までの事を思い出す。

確か俺は極一般的な家庭に生まれた平凡な”人間”だった。
性別は男。
俺は可もなく不可もなく、別段裕福って訳でもなかったが幸せに育ってたと思う。
そんな俺は必死に勉強し、大学に上がって二人の友人に会った。
確か……れんこんと羊さん。

あれ？　なんか違う。

まぁいいや。
二人とも女だったが、話も合い、大学入って初めての友人となった。
後にその内の一人が結成したサークルに入った。
世界の怪奇怪談伝承伝説を辿り、現地に赴いてあわよくばその幻想を目撃して書き留める。
殆ど旅行部だった気もするが、気にしない方向で行こうと思う。

確か『秘封倶楽部（ひふうくらぶ）』って命名してたな。
これには色んな意味があってと説明されたが、大半は聞き流していたので覚えてない。
しかし部活の目的からしても合ってるし、
変わった名前が却って好印象だったので文句も言わなかった。

色々と歩き回って、飛び回って。
この上なく楽しかったのを覚えている。
旅のお供が女性ってのも今思えば変だが、その疑問すら吹っ飛んでいた。
……目当ての幻想には出会えなかったが。

そんな日々を巡り、旅から帰ったとある日。
俺が何処かの店にあったカフェでブレイクタイムを堪能していると、
どんどん眠くなってきたんだったか……？
その後からの記憶は無い。
強いて言えば今こうして猫になったのを嘆いているというくらいか。

俺はもう一度水面を覗く。
毛色は白に若干の青味が掛かった白銀って奴だ。
目は金色。
身長……こういう場合は体長か？
普通目に見てもそれは小さく、もしかしなくても子猫だろうと思わせる。

俺はそれを確認して溜息を吐くと、もう一度呟く。

「……なんでぬこなんだろ」

いやぁ確かに一度だけ常識に縛られない変わった体験がしたいと思った事があったよ？
それは否定しない。
でもそれはそれこそあの痛々しい厨二時代に思った事な訳で……

そこまで思い詰めて改めてある事に気付いた。
なんで今まで気付かなかったんだ？
それを考えてまた一言。

「なんで喋れるん？」

はいこれぇぇぇ！
ここ今一番、出来立てほやほやで新鮮な疑問だよぉぉぉ！？

いやこれほんとまじでなぜなにゆえ喋れる！？
猫よ？　私猫よ？　英語で言うとキャット。
と冗談咬ましてる場合じゃなくて……

文字通り冗談抜きで何故？
いくら人間からなったとしても猫が喋るってのは普通ありえん。
もしかしたら自分にだけそう聞こえているだけで、傍から見たら「にゃー」としか
言ってないかもしれないが。

俺はとりあえずじっと考える。
訳も分からず猫になってしまったが、どうやって生きるか、だ。
こうなるんなら猫の普段食べてる食物とか知っとくんだった……
俺お魚さんしか知らないんです。
後はキャットフード。

「……あんま深く考えても仕方ないか」

気楽に行こう。
こういうのは諦めが肝心だって友人とのやりとりで思い知らされた。
それに猫は元々気まぐれな生き物だ。
そんな行き当たりばったりな生活も案外面白いかもしれない。
俺は考えるだけ考えてその湖を後にした。
とりあえず動こう。

自分の元同族――人間を探す為に。

だが彼は知らない。

この時代に人間が”自分の知っている”形で生活をしていないという事実に……

始　「気付いたら猫」（後書き）

私メリィさん、初投稿なの。

という事で初めまして、メリィです。
やりたいなぁやりたいなぁと煮詰めてて遂に投稿に踏み切りました。
……実は間違えて短編で投稿しちゃった事がありますが、そちらは無かった事に（
未熟者ですが、頑張って楽しめる物にしたいなぁと思って頑張りますので
生暖かい目で見守って頂けると助かります。
警告タグは拙いなと思ったら付けるかもしれません。

勿論指摘・助言は歓迎ですので、ドシドシ送って下さいな～。
ではではノ

其の一　「歴史の相違？」（前書き）

ちょいと早い気もしますが、うｐ。
多分、これからペースはどんどん落ちていく……

其の一　「歴史の相違？」

東方神猫伝　其の一　「歴史の相違？」

俺は呆然としていた。

信じられなかった。

こんな事態に陥るなんて思ってもみなかった。

出来るなら「夢だ」と全て否定してしまいたい。

だって……だって！――――

「人が裸で歩いてるってどういう事おおぉぉぉ！！？」

あ、こっち向いた。
いやん！　恥ずかしい！

……じゃなくて。

俺はさっさと姿を晦まし、丁度あった物陰から集落を観察する。
さて、安全な場所を見つけたって所で現状報告。
つってもさっき彷徨き始めたばっかだけど。

あの自問自答の後、俺は人間がいるであろう町か都市を目指して歩いていたが、
なにぶん背が低い所為か、森の木に阻まれてビルとかが見えなかった。
だからとりあえずひたすら歩いたのだが……

歩いている内に何やら葦（？）で覆われた何かが姿を現した。
よく見てみると、屋根の様な形をしており、俺はそれがようやく家

であると認識した。
誰だこんなとこに秘密基地建てた奴は。
そんな事を思っていたが、それがとんでもない間違いだと気付く。
それを観察している内に誰かが歩いているのが分かった。

ようやく人か！

そう思って早く安心する為に、足音がしたであろう場所へ走った。
そして見つけたのが「裸の人間」である。
民族衣装とかそんな物は無かった。
ただひたすらに裸だった。
しかも一番最初に見てしまったのが女性の裸な訳で……

まぁそれで冒頭に入る、と。
俺はその場に伏せ、続けて集落を観察する。

（これってよく見りゃ竪穴式住居じゃね？）

観察を続けた結果、俺はその建造物が竪穴住居だと気付いた。
竪穴式住居というのは梁や垂木を繋ぎ合わせて家の骨組みを作り、
その上から土や葦等の植物で屋根を葺いた”大昔の建物”である。

「うひょー、すげー……実際に使ってる所なんて初めて見たぜ」

確か竪穴式はそれ位昔の建造物だと文献にあったはずだ。
俺は大学で考古学・歴史研究専攻だったから間違いない。

一体これはなんのイベントだろうか。
歴史再現のイベントなんて予告は無かったはずだが……
俺は集落を再現したと思われる場所を隠れながら移動する。
こういうイベントはペット持ち込み禁止だったりするからな、見つからない様にせねば。

「んおっ？　ありゃ鹿肉か？」

俺は獲れ立てと思われる鹿肉らしきものが吊るしてあるのを見つけた。
これは明らかに生だ。
大丈夫なのか？
展示用ならともかく本物使ってたら真っ先に腐っちまうぞ？

そうやってまじまじと見詰めていると、何処からか人が歩いてきた。
俺は拙いと思って素早く身を隠すと、その場から様子を窺う。

するとやってきたのは毛むくじゃらの……いや、髭の濃いダンディなおっさんが
鹿肉っぽいのをを担いで歩いてきた。
それもダンディな猿……じゃなくておっさんが複数人、鹿肉っぽいのを担いでいる。
あれか？　狩りの帰りかなんかか？
国内の鹿は獲れんから、外国の輸入品かね？

（ん～でも可笑しいな……）

何が可笑しいか。
そりゃ俺の真上が青空だからさ。
初めはドーム内のホログラフィティで青空を再現してると思ったが、普通に暑い。
人口とは思えない風だって偶に吹いているし鳥だって飛んでる。
種類は知らんが……
それにさっきの男達だってメイクとは思えない程猿顔だった。
最近のメイクは確かに凄いが、それでも何処かメイクだと分かる代物だ。
加えて一般客がいない。
イベントなら少なからずいても可笑しくないのにな。

第一外でやるにも、その様なイベント会場が作られるなんて話聞いた事が無い。
これ程広い敷地を使うなら、何かしらネットで情報を掴める筈だ。

無断でこんな自然を切り開いたらそれこそ問題だ。
唯でさえ最近は砂漠化とか、緑が少なくなってきている～なんて問題になってるってのに……

（だがこれがリアルだとすると更に可笑しいな）

だってリアルだったら俺は単独でタイムスリップした事になるからな。
そんな大業、唯の一学生がこなせる訳が無い。
出来るとしたらあの極論唱えた最年少天才教授くらいかね。
あれの論文は理に適ってたし、本当にあるのなら凄い発見だ。
今のエネルギー事情だって大分違ってくるはずだしな。

っとと、題がずれたな。
確かに最近その手の事件があったな。
突然人が消えて、いくら探しても見付からないって事件。

【神隠し事件】

サークルの連中が騒いでたのを覚えている。
これはいつかの事件の再来かっ！　てな。
実は神隠し事件は一世紀前にもあったのだ。
どれもこれも文献に載っていた事だが、百年前くらいだ。

立て続けに何人もの人間が行方不明になるという事件が記録されていたのだ。
帰ってくる者もいたらしいが、その殆どの人が口を噤み、結局の所犯人は分からなかったらしい。

仮定として俺がそれに巻き込まれてるとする、現在進行形で。
それが切っ掛けで過去に飛ばされたとすると、果たして戻る方法はあるのか？　いや無い。
だって最近の神隠しは未だ帰還者ゼロなんだ。
帰る手段は無いと見てもいい。
仮に前と同じだとしても、俺がその”帰れる人間”に入っているのかは分からない。
文明レベルがこれじゃ、科学の力なんて宛にならん。
……だが明らかに可笑しい点もある。

「……綺麗な女性だなぁ」

ほんと、俺が人間なら真っ先に声掛けてたな。
え？　お前の友人はどうなんだって？
確かに美人だが、女として見るかとは話が別だ。
最初は少し気に掛けたが、あいつらに遠慮は不要だった。
寧ろ遠慮してるとこっちが危険だ。

さて、俺が話した可笑しな点というのは女性が美しい事。

当たり前とか言っちゃいけない。
今の時代で不細工と呼ばれてる女性でも、昔の女性よりは綺麗なものだ。
この時代の人間は旧人類の部類に入る。
この世代の人間はどちらかと言うと骨格の特徴が猿に近い。
それは人が猿人から進化して間もない時期だからだ。

しかし俺の見た女性は若干の土汚れとかはあったものの、その端正な顔立ちは
”美女”と呼んでも差支えなかった。
物差し抜きにしても今の世代でも充分美女に該当する容姿だった。

だがそれは可笑しい。

遺跡にて奇跡的に残っていた旧文明人の遺骨等を調べた結果、やはりと言うべきか、
この時代の人間は少なからず「猿」の面影が僅かに残っていた。
しかし今目の前を歩いたりしてる女性にそれは無い。
男の方は確かに復元図と酷似しているというのに……

更にこれ位の時代だと文化レベルも低く、石を物理的に加工した石器が用いられていたはずだ。

しかしどうだろう？
ここは明らかに「土器」であろう食器を使っている。

それだと正史とも研究結果とも素晴らしい食い違いが生じる。
そしてもう一度言うが、少なくともこの時代の人間は俺が知る限りお世辞にも”美しい”とは言えない。

（俺の知ってる正史と違う……この状況で考えられる説は二つ）

俺は少しばかり仮説を立ててみる。

まず一つはただ単に考古学者達が間違って解釈していた。
正確な年数や文明が分かるようになったと言ったな、あれは嘘だ。
つまりはそういう事。

二つ目は平行世界説。
ここは俺がいた世界と違って歴史の歩み方が違う。
次元跳躍なんて大それた事を遣って退けるなんて流石俺。
まぁ実証できる人間はいないけどさ。

とにかくもう少し様子を見ないと分からない。
もしかするとこの時代の歴史だけ学者が間違えたという可能性もある。
と言っても猫の寿命じゃ確認なんざ出来やしないが……

（ははっ、実に残念だねぇ）

少なくとも生きてる間はちょこちょこ様子を見るとしよう。
俺はそう思って余生を楽しむ事にした。

……

……

……

……

あれから十年。
え？　展開が速いって？
それは……世界の摂理かなんかに触れるんじゃないかな。
要するに気にしちゃいかん。

とにかくいきなり疑問を一つ打ち立てるとしよう。

「なんで子猫のままなん？」

前にも似たような事を言った気がするが、そんな事は無かったＺＥ☆
そう、体が全然成長しないのだ。
しかも体は衰えるどころか、以前より元気になっていた。
具体的に言えば……

高さ凡そ７ｍの木の枝に飛び移る事が出来たり、
走ったら１００ｍはあるであろう距離を十秒で走破。

（俺って実は猫じゃないとか？）

その程度しか思い付かない俺がなんか腹立つ。
まだ年齢的におじさんレベルだというのに……
そういやサークルでもそんな感じだった。
他の二人はその類に詳しいし、すぐに思い浮かぶ位だった。
俺も勉強したんだけどなぁ。

いやまて……

サークルの活動内容は何だった？
よくよく考えればそれ専門じゃないか。

怪奇怪談伝承伝説。
魑魅魍魎百鬼夜行。
それらを調べて願わくば拝んでやろうというのが秘封倶楽部の主な活動。
完璧に忘れていた。

俺は眠っていた知識をなんとか掘り返す。
猫で妖怪や神様や幽霊といったものは確か……

（あった。猫の妖怪）

俺は答えを見つけた。

猫又。

猫が年老いて化けたと云われる妖怪。
尾が二又に分かれており、人を惑わし喰らう化生。
名の由来は前述の通り、尾が二又に割れているというのが由来。
芸者の格好をしている姿が文献で見られるが、それは芸者がかつて、
猫と呼ばれた事に起因している為事実かどうかは分からない。

しかし俺の尾は、その特徴的な二又に分かれていない。
他に考えられるのは

化猫。

火車。

仙狸。

猫の幻想って色々とあるんだなぁ、と改めて思う。
まぁそれよか俺の正体だ。
考えられるのは化猫か仙狸。

火車は正体が猫又という説もあるので、割れてると仮定して除外した。

確かめる上で一番良いのは妖力か神通力か見極める事。
化猫は妖怪だが、仙狸は神通力を持った年老いた山猫だ。
その力を見極められればどちらか分かるかもしれない。

「思い立ったら即行動！　さっさと調べて白黒付けようじゃないか」

そう考えてふと思う。
そういや人里ってどうなったかな？
元々は観察してみようってのが俺の目標でもある。

俺は少し気になり、人里へと行ってみる事にした。

猫移動中……

（なん……だと？）

俺はその光景を見て愕然とする。
これは誰だって驚くだろう。
だって……

（弥生時代にジョブチェンジ？）

目の前に広がる水田。
木で組まれた見張り台。
掘立柱の建築物。

それは明らかに自分の知っている弥生の風景。
少しばかり違う所もある事にはあるが、崖の上からでも分かる。
でも十年で時代背景が一変するのはおかしいだろう。
加えて俺はここに何度か寄っている。
最後に見に行ったのは二年前だが、たかだか二年でここまで進歩する物なのだろうか？

（少なくとも俺の知ってる人類は違うな）

たった二年でこれ程風景が変わるのは普通じゃない。
俺がいた所なら精々組み掛けの建物が建つ程度だ。
それも技術が進歩したあの時代でもだ。

（こりゃ本格的に平行世界説の信憑性が高まったか？）

俺は十年前に立てた仮説を思い返す。
考えてみればあの時点からもうおかしかったのだ。
今更否定したって意味は無い。
これはもう歴史が間違ってるというレベルじゃない。
もう俺の”常識”では図れないのだ。
ちなみに時代逆行した件については考えるだけ無駄である。もう諦めた。

そこまで来ると、少しばかり集落の方が騒がしくなった。
何事かと目を凝らして見てみる。
すると集落で何者かが一人暴れていた。
人間も青銅製の剣を振り回して戦っていたが、抵抗空しく宙を舞っているのが見える。

「ほぉ……あれぞ一騎当千。これ程の武勇を間近で見られるとは興味深い」

集落の人間相手に一人で立ち回ってるのは恐らく男だと思われる。
遠方からでは姿形は見難いが、動作の節々から男らしさが窺える。
最もあくまで目測。
それは実際に見ないと正確には測れない訳で……

「うし、行ってみるか」

俺は行ってみる事にした。
戦い方を目に焼き付ける、唯それだけの為に。
俺は即決して集落へと歩を進めるのだった。
それが面倒事に巻き込まれる前兆とも知らずに……

「くそっ！　早く殺してしまえ！」

「無理だ！　あんな化け物！！」

「俺、この戦いで生き残ったら隣人の彼女と契りを結ぶんだ……」

「なら儀式には俺らも誘えよ？」

「勿論良い酒を用意しろよな！」

「うるせぇ！　お前らなんか誘ったら婚姻の儀が汚れちまうだろっ！」

想定通り、集落の中は混沌としていた。

……混ざった物は気にしない様にしようか。

どうやら近くで暴れてるらしく、喧騒と破壊音が聞こえてくる。
故に俺の歩みも自然とそちらに向いていった。
これ程の人数を相手に無双する人物。
これは気になるし、何より生き残る上でその動きは為になるかもしれない。

角を曲がると暴れている奴の姿が見えた。
それこそ正に鬼神の如き戦いぶりと言った所か。
向かってくる敵を千切っては投げ、千切っては投げ……
俺は飛んでくる人間を避けながら少しずつ近付くと、何かその人物に違和感を感じた。
注意深く見ると、その頭からは通常無いであろう物が生えていたのだ。

（角……！？）

ボサボサで手入れのされていない黒髪。
鍛え上げられた肉体の上には白い陣羽織を着込み、下には紺の袴を履いた男。
その額には若干湾曲しながらも力強く立つ立派な角があった。
男は此方に気付いて動きを止める。
その様子をおかしいと感じたのか、人間側も動くのをやめた。

「おい、貴様。一体何の用だ？」

その声と共に他の人間も俺に注目する。
俺は予想だにしない出来事に少し動揺するが、顔には出さない。
焦れば己に隙を作る。
俺が生きて積んだ経験から学んだ教訓。
とりあえず慌てた所で良い事は無いので、冷静に対処して返答を返した。

「にゃー」

巫山戯ていない、断じて。
いや、だって俺って猫じゃん？
それが普通に喋ったら絶対おかしいと思って。
しかしその人外は俺を見据えて一言。

「巫山戯るな。気付かんと思ったか」

おっと、逆効果の様だ。
なるべく神経を逆撫でしない様にするには猫の振りが一番だと踏んでいたのだが……
俺はなるべく言葉を選びながら口を動かした。

「いやいや、一介の獣が喋ってはおかしいと思ってね」

俺の言葉に顔を顰める。
あら？　もしかしてやらかしたか？

俺が先程の発言に何か失言が無いか考えていると
彼はかなり衝撃的な言葉を発した。

「貴様の様な獣、見た事も聞いた事も無い」

……えっ？

俺は彼の言葉に呆然とする。
見た事が無い……？

え、だって猫ですよ？
探せば普通にいる様な獣ですよ？
確かに森とかで見るのは中々難しいけど。

人間の方へと向く。
俺が見た人間も、まるで珍しい物を見る様な目で見ていた。
しかも首を傾げる輩もいる始末。
という事はつまり……

（猫を見た事が無い、と……）

俺は少し信じられなかった。
元いた世界では猫なんて愛玩動物として飼われている位で、
都市でもよく見掛けたのに……

とは言っても内心思う所はある。
猫が縄張り意識を持つ生き物であっても、ここ十年間で一匹とて
出会わないのはよく考えればおかしかった。
木の実や花、その他動物もだが、見覚えのある生物は存在するものの
見た事の無い種類が殆どだった。

するといよいよもって平行世界説が有力なのだろうか？
歴史的な流れもなんか違うし。
俺が尚も思考を続けていると、鬼がまた動き出した。

「まぁいい、貴様が何だろうと、目の前に立ち塞がるなら爆砕するのみ！」

『何か』を噴出して威圧する男。
俺はその只ならぬ気配に思わず体が強張る。
周りの人間は怖気づき、一部の者はコケながらも全速力で逃げ出していった。
それを待っていたかの様に、彼は名乗りを上げる。

「我が名は鬼神、炎剋（えんこく）！　いざ尋常に勝負！！」

「するかアホゥ！！」

俺はとりあえず目の前の馬鹿に、つっこみを入れるしかなかった……

其の一　「歴史の相違？」（後書き）

私メリィさん、今体が異様にダルイの。

おはこんばんちは（久し振りに使った）
メリィです。便利ですよね、おはこんばんちは。

今回でいきなり時代発展（キングクリムゾン）、及び鬼さん登場。
名前に捻りなんて無いです、はい。
会話が成立してるかすら怪しいですね。
さて、主人公は何故か子猫のまま。
一体自分は何になってしまっているのか？
少しずつバラしていきますかね……
ではでは

其の二　「鬼神ＶＳ猫」（前書き）

頑張った……今回は頑張ったと思うんだ私……

其の二　「鬼神ＶＳ猫」

鬼神。

その単語で真っ先に浮かぶのはやはり鬼子母神であろう。
仏教を守護するとされる女神で、仏法の護法善神。
子授け、安産、子育ての神として日本でも祀られているとか聞いた事がある。
だがその一方で五百もの子を持ちながら、他人の子を食べてしまう夜叉としても知られている。
夜叉とはインド神話に出てくる鬼神の総称を事を指す事から、鬼の母とも言われる事がある。

しかしもう一つ、恐ろしく荒々しい神の事や、
そのまま化け物という意味でそう呼ぶ事もある。

これらの意味合いから目の前の鬼を示すとなれば、それは後者の意味だろう。
鬼子母神は女神であるからして、目の前の鬼神にそれは当て嵌まらない。
何故ならこの鬼は男なのだ。

「貴様、早く名を名乗れ」

鬼はこちらに高圧的な態度で言う。
俺は内心ビビってたりするが、それを悟らせない様に返した。

「不肖ながら、わたしゃ名乗る程の名を持ち合わせておりませぬ故種族名の『猫』とでも名乗らせて頂きましょう」

なんか変な感じになったが、多分大丈夫。
ちなみに名乗りたくない訳ではない。
名乗れないのだ。
前世の名前でも名乗っておけば良いと考えていたが、どういう事か思い出せない。
作ろう、と言い出した所で即席の名前では後に支障が出る可能性がある。
それに名前は一生物なのだから、どうせなら凝った名前を付けたい

というもの。

故に名乗らず。
その返答に納得がいかないのか顔を顰める鬼神。
だが彼は表情を戻したかと思うと、此方を鼻で笑う。
何コイツむかつく。

「まぁいい。貴様程度の小妖怪風情が鬼である俺様に敵う訳がないからな」

俺を見下した様な口調で言い放った。
”様な”というか完璧に見下してますね、はい。
もしかしてプライドが高いタイプだったりするのか？

しかし反論してじゃれ合い（殺し合い）になるのも面白くない。
というか鬼と猫のガチンコなんて絶対嫌だ。
俺は挑発を受け流してフラグを折るべく説得する。

「そうそう。こんな小さな獣相手に鬼が喧嘩してたらそれこそ情けない。
放っておいてどうぞ、続きでもなんでもしていって下され」

俺はそのまま「それでは」と残して立ち去――――

「待て」

――る前に呼び止められる。

俺は若干の苛立ちを感じながら振り向いた。

今度は何の様だ？

くだらない用事だったらそのボサボサヘアーをストレートにしてやる。

そんな出来る訳も無い脅迫を考えていると鬼神は真剣な表情で

「何故これ程の妖気を体に受けてなんともないのだ？」

……あー。

俺は鬼の言わんとしている事に気付き、思わず溜息を吐く。

あの鬼神が発していたのは妖気。

簡単に言えば妖怪の発する力の源。
それも年月が経てば経つ程、その力は強くなっていく。
恐らく鬼神と言う位だ、余程妖力量に自信があったのだろう。
それをどこぞの獣が受けてケロッとしてたら、いくら頭の作りがお粗末な鬼でも流石に感付く。
……あれっ？　何で頭が悪いって分かるんだ？

（ま、いっか。それよりこんな単純な事に気付かんとはねぇ……）

俺は突如現れた疑問をスルーしておく。
とりあえず先程も言ったように長く生きれば力も強くなる。
妖力が強ければそれは力の誇示にもなり、長く生きればその分自分の格も上がる。
強者の証明であり、己の齢を現す力でもあるのだ。
加えて相手は鬼神と呼ばれる程の強力な鬼な訳で……

「ククッ、よもやここで俺様以外の強敵に出会えるとはな……」

その前に平気で立っているのは「私強いです」と言ってる様なものである。
だって普通そんな奴の前に立ったら震え上がるもん。
怪しまれない様にそれを堪えたのがまさか逆効果になろうとは……

炎剋は妖力を噴出させて臨戦態勢を取る。
やばいやばい！　このままでは鬼ＶＳ猫が実現してしまう！
俺はなんとか避けようと説得するが……

「ちょっと待て、落ち着け、私はそんな事望んでいｎ

「いざ勝負！！」

話を聞けえええぇぇぇぇぇーッ！！！！！」

残念、相手は鬼だった！

炎剋の拳を避けると、俺はそのまま森へと全力で逃亡した。
彼もそれを追って走ってくる。

（冗談じゃない！　意地でも逃げ切ってやる！！）

地味にフラグを立てながらも、俺は茂みに突っ込んでいった。

「あれは一体何だったのだ……？」

「助けてくれたのか？」

「あれは神様じゃ！　神様が我等に救いの手を差し伸べて下さったのじゃ！」

「神様ッ！？」

こんな厄介な誤解をされてると知らずに……

＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜

@Ｓｉｄｅ猫

「待てぃ！　逃げるな！！」

「待てと言われて待つ奴がいるかッ！」

「じゃぁ逃げろッ！！」

「バカだこいつぅぅ！！」

ははは、やぁ、猫だよ。
突然で済まないね。
今、俺は鬼と追いかけっこしてるんだ。
それがまぁしぶとくてしぶとくて未だに振り切れないでいるんだ。
真っ先に森に走ったは良いが、中々活路を見出せないでいる。
こっちの体が小さいからか、それとも相手が単純に速いからか……
振り切ろうにも振り切れない。

幸いな事にまだ一撃も貰ってないのと、猫の体のお陰で攻撃も当たらない。
しかし何時まで保つか……

隙あらば飛んでくる拳を避けながら、俺は森の中を疾走する。
炎剋も負けじと喰らい付き、攻撃を繰り返した。
あー、もうしつこいね、いい加減。
そんな事を思っていると、突然目の前の風景が一変する。

「おわッ！？」

眼前に現れたのは切り立つ崖。
俺は自分の足に急ブレーキを掛け、余った勢いはその岩の壁に着地する様に殺した。

「ッつぅ！！？」

それなりの速度で衝突した所為か、衝撃で足がびりびりと痺れる。
その痛みに思わず声を上げてしまうが、それだけで大した事は無かった。
それ位で済むこの体にも感謝しなきゃな。

俺がそのまま三角跳びの要領で崖を蹴ると、同時に拳が叩き込まれる。

――チッ！　追い付かれたか！

天然の石壁に衝突した拳は、意図も容易くその場所を抉り取る。
そして爆炎を上げて破片を撒き散らした。

「くそっ！　爆発しおった！」

着地した俺は飛び散る破片を避ける。
おかしいだろ。
いくら力が強いっつっても爆発するなんて！

炎剋はこちらを向いてニヤリと笑う。
この力を見ても戦いたくないのか？　とでも言っているみたいだ。
多分実際そうなんだろう。
だが生憎俺は鬼(あんたら)みたいな戦闘狂じゃない。
俺は自他共に認める超☆絶チキン野郎なのだ！

……自分で言ってて悲しくなってきた。

とりあえず俺としては戦いたくない。
死ぬし。絶対死ぬし。
だけどなんとかしないと後々厄介だよな～。

それになんか諦め悪いそうだし……
俺はそれとなく最後にお願いしてみる。

「諦める気、無い？」

「あぁ。俺様は貴様を打ち負かして妖の頂点に君臨する」

どうやら本気（マジ）らしい。
寝込み襲われたらやだし、そもそも付き纏われるなんて勘弁だ。
毎日殺気ぶつけられるとか冗談じゃない。
俺は思いっきり溜息を吐くと、嫌々ながら――

「……わーった。受けてやるよ」

「……恩に着る」

あれ？　なんか感謝されたんだけど？
俺が疑問を浮かべていると炎剋は今一度妖力を噴出させる。
相手が待ってる所を見ると、こちらの準備が整うのを待ってるのだろう。
中々に紳士的だな、剣と盾を持たせたら結構似合ったり？

まぁ、相手を待たせるのも悪い。
俺も相手を見てそれとなく真似てみる。
イメージするのは体内の管を通じて循環する血液。
それがじわじわと外に出てくる、そんなイメージ。
想像すると少し気持ち悪い。

しかしそれは成功し、周りから溢れる力が感じ取れた。
……まぁ、あの鬼程じゃないけどさ。
そして自覚した所で俺は相手を見据える。

「ま、こんなもんか。じゃ、行こうか」

全力で逃げながら罠に掛けて不意を突いて倒す！
そんな情けない宣言を心の中でして。

相手は少し呆気に取られた様な顔をしていたが、すぐに飛び掛ってきた。

俺が跳躍すると同時に地面が爆ぜ、轟音を響かせる。
そこを見ると炎剋が拳を振り下ろしていた。

（これマジであいつがやったのか？）

地面にできたのは強い衝撃によって出来たクレーター。
しかし中心地は大きく抉れ、高温によって少し溶けていた。
だが観察出来たのはたったの僅か。
すぐに此方に急接近し、拳を振るう。
俺がそれを後ろに跳んでかわすと、続け様に踵落としが放たれた。

俺は舌打ちしながらも横に走って回避。
それを追う様に振り向き、手刀で大地を切り裂く。
切り裂かれた大地も同じ様に爆ぜ、破片を撒き散らした。
自分に当たらぬ様になんとか避け切ると、俺は彼に尋ねた。

「お前さん、おかしな術を使うのだな？」

「ほぉ、気付いたか……」

そりゃあんなに何度も使っていれば分かるでしょうよ。

と、心の中で突っ込んでおく。
炎剋は嬉々とした表情で話し始める。

「俺様は少し特殊でな、『爆炎を操る程度の能力』ってのを持っている」

「爆炎……だと？」

そんな超危険な物を操るんですか！
俺は彼の言葉を聞いてすぐにその危険性に気付いた。
流石に野生の勘は鋭いな。

”爆炎を操る”という事は、それ即ち”全ての爆発現象を操る”事に等しい。
それこそ粉塵爆発や火薬による爆発等種類は様々だろう。
それ所かもしかしたら『超新星爆発』なんてのも起こせるかもしれない。
それを考えるとこの能力はこの上なく危険なのかもしれん。

唯一の救いは相手の頭が残念な事。
見た所こいつは脳筋。
細かい事を考えるのは苦手と見た！
先程から見てるが、彼の能力行使は打撃に小規模な爆炎を乗せているだけ。

多分恐れてる様な事は起きない……はず。

「ククッ、もう能力の本質まで見抜いたか……期待以上だ」

近付きながら指をパキポキと鳴らしながら近寄る鬼神。
ホンット喧嘩好きですね。
すると一瞬、彼の姿がブレる。

――――ッ！！？

俺は本能的に危険を感じ取り、素早く飛び退く。
先程いた場所から激しい爆音。
そこには歩いていたはずの炎剋が拳を叩き付けた姿勢で立っていた。

「な、何を……」

「なに、只単に爆炎の勢いに乗っただけさ。本質を見抜ける程なら、本気を
出しても大丈夫だと思ったんでね」

えっと、それはもしかしてジェットエンジン的な？
あー……俺が思ってたより一段上くらい頭が使えるみたいだ。

「つっても、最近気付いた使い方だがな」

うん、なんとなく分かった。
もしかすると相当退屈してたんだろうな。
最近になってようやく能力研究でも始めたんだろう。

俺もさっき思いついた方法を使ってみる。
妖力を全身の筋肉に纏い、駆け巡る様なイメージで作用させる。
所謂身体強化って奴だ。
これならあの移動速度にも対処できるはずだ。

準備が終わると同時に、また炎剋が一瞬の爆発音と共に急接近してきた。
イメージするならＡＣ４っていうレトロゲームにあったクイックブーストか？
俺は素早く相手の蹴りをかわし、少し大きく距離を取る。
だが相手はまたもＱＢモドキを使って距離を詰める。

（ッ！　これじゃ埒が明かん！！）

多分このままじゃジリ貧。
その内俺は体力を使い切ってしまう……と思う。
しかし俺が彼を仕留めるには圧倒的に決定力に欠ける。
猫の体じゃ多分難しいだろう。

俺が対策を練りながら回避していると、いい具合に落ち掛けてる大岩があった。
恐らく炎剋が崖を殴った拍子にああなったんだろう。
……使える。

俺はニヤリと笑い、咄嗟に作った妖力弾を炎剋に撃つ。
炎剋は一瞬驚いた顔をして、それをかわした。
妖力弾は岩を唯一支えている小さな岩に中り、それを削る。
その直後、炎剋が殴り掛かってきたので回避してカウンターに両足蹴りを加えた。

「ぐっ！」

炎剋は小さく声を漏らし、大きく仰け反った。
そしてそれと同時に支え岩にまた妖力弾を撃った。
これで落ちるはずだ。

「おーまけっ！」

俺は足元に三回に分けて妖力弾を撃った。
一回目は回避され、二発目は地面に当たって地面を抉り、三発目はその影響で
体勢を崩した炎剋の足に中って彼をうつ伏せに転倒させた。

「クッ！　まだ」

「終わりだよ」

俺の宣言と共に落ちる大岩。
炎剋もやっとそれに気付いた。
どうやら先程まで戦いに熱中していて気付いてなかった様だ。

「へっ？　なっ、ちょ、ま――――ッ！！！！」

彼の声を遮る様に、落下した大岩の轟音が鳴り響いた。
俺は砂煙に思わず目を瞑る。
背が低いと影響がモロに……！

晴れた砂煙。
その中心では目を回している鬼神。
あれで気絶とか……人間なら余裕で死ねますけど。

まぁでも、あれだ。

「俺って才能あるのかな？」

今更自分で使った技の数々に驚いていたのであった。

@炎剋Ｓｉｄｅ

「待てぃ！　逃げるな！！」

「待てと言われて待つ奴がいるかッ！」

俺は奴――【猫】だったか？――を全速力で追いかける。
あいつは確実に俺より強い。
現に俺の攻撃は全てギリギリでかわされている。
それに俺の前に立って怯えなかった奴はあの【猫】が初めてだ。
俺は相手の言葉に走りながら答える。

「じゃぁ逃げろッ！！」

「バカだこいつぅぅ！！」

バカってなんだ？
意味は分からないが、とりあえず相手は待ってくれそうにもない。
この状況がいつまで続くか……

これは持久力が物を言うだろう。
相手の体力が尽きれば勝負、俺の体力が尽きれば相手に逃げられる。

（逃がさん……）

俺は邪魔な木を叩き折りながら突き進む。
終わりの無い追いかけっこ。
それが延々と続くかもしれない。
そう思った矢先、前方の岩肌が目に入った。

（……しめた！）

目前に広がっているのは切り立つ高い崖。
所謂行き止まりだ。
俺は崖に到着寸前に拳を思いっ切り引く。
奴にに力を見せ付けてやる！

するとそれに気付いてか、猫は崖を蹴って俺の背後に回った。
拳はそのまま崖に叩き付けた。
更に直撃と同時に『能力』を行使する。
当たった場所は俺の能力で眩しい炎を吹き上げて砕き、散らせた。

「くそっ！　爆発しおった！」

猫は悪態吐きながらも飛散した瓦礫をまるで舞う様に避ける。
先の攻撃をかわすなんてその辺の妖怪じゃとても出来やしない。
恐らくその辺の奴らならさっきの攻撃で勝負は付いていただろう。
それ位の拳速で迫ったのだ。
それにいくら「見せ付ける」と言っても、加減をした訳ではない。
寧ろ今まで通り『一撃』で終わらせてやろうと思った。

勿論、それは奴を試す為の一撃。
そして猫は俺の拳を容易くかわしてみせた。
これ程の強さなら充分過ぎる。

（こいつなら俺の野望を……）

俺の胸は期待で高鳴った。

俺がより強い存在を求めるのにも理由があった。
実はこの頃妖怪間で小規模な衝突が起きている。
理由は単純、全ての妖怪を支配する為の闘争だ。
妖怪は基本我が強い。当然ながら俺も例外では無い。
しかし我が強過ぎる妖怪は自分が一番だと簡単に思い込んでしまう。

そんな奴が上に立ったらどうなる？
勿論他は立場上何も言えない為、そいつが好き勝手に生きるのを止められない。
我が強い妖怪は何れ全てを手中に収めるべく、行動を始めるだろう。
そうなれば他の妖怪が犠牲になるのは明白だ。

そこで俺は考えた。
『本当に強い者が上に立って正しく導けば良いのでは？』
そう思い立った俺はすぐに行動を始めた。
幸い、俺には他が中々持ち得ない”能力”を持っていた。

『爆炎を操る程度の能力』

これが俺の能力。
他が持ち得ない唯一の力だ。
この能力は『爆炎』という炎を操れる。
それはとても強力で、何も知らない時に使ったら山が簡単に崩れた。
俺はそれを使って”強者狩（つわものがり）”をやっていた。
意味は単純、「強い」と言い回ってる連中を片っ端から叩き潰す。
そうすれば他も認め、頭として向かえてくれるだろうと思っていた。

だがそれでも他の妖怪は付いてこなかった。
それは何故か。
理由は極単純で、俺にも理解できるものだった。

恐怖。

俺が考え無しに狩りまくっていたのが裏目に出た。
俺は”畏れ”ばかりを集め、一番重要な”信頼”を得ていなかったのだ。
故に俺は独りになった。
俺は何十年と代わり映えしない退屈な日々を送って生きていた。
能力研究とかもしてみたが、途中から面倒になってやめた。

毎日が詰まらない。
そんな日々に苛立ち、俺は思わず人里に向かっていた。
勿論、この苛立ちを人間達に向かって発散する為。
人間は弱いが、数が集まると程好く強くなる。
だからこうした八つ当たりにはもってこいの相手なのだ。

そして人間の集落に辿り着き、暴れていた時にこの猫と出会った。

この野望を達成するには、やはり強い者を従え、敗者を近くに置く事で
俺の立場を良い方向に持っていくしかない。
猫は嫌そうな目でこちらを見据えて言った。

「諦める気、無い？」

猫の言葉に首を縦に振る。
当然ながら諦める気など更々無い。
相手はその返事に深い溜息を吐いた。

「……わーった。受けてやるよ」

渋々といった所だが、了承の言葉を貰えた。
まさか受けてくれるとは思わなかった。
内心、また逃げられるのでは？　と疑っていたのだ。
俺は少し罪悪感を感じ、思わず口にする。

「……恩に着る」

俺が言った言葉に目を丸くする猫。
そりゃ当然だ。
自分を付け狙ってる奴が礼を言うなんて普通考えられないだろう。
だが知らぬといえど俺の野望に助力して貰っているのだ。
ならば礼くらい言わねば鬼の名が廃るというもの。

俺は礼を言ってすぐに妖力を発散する。
今の俺の妖怪としての格を見せ付ける必要があるからだ。
そしてこれは俺が全力で戦るという証でもある。

猫はそれを見て少し悩む様な表情をした後、同じ様に妖力を発散させる。
妖力の量は大した事がなかった……いや、意図的にそうしたのだろう。
俺の妖力発散はあくまで自己流の決闘での礼儀だ。
折角の決闘なのに全力で挑まねば相手に失礼だと俺は考えている。
しかし相手は意図的に力を制限している。
此方が低く見られているのか、或いは別の理由があるのか……

しかし何だ。
相手の妖力は少し変わっている。
貶してる訳ではない。
唯その妖力が珍しいのだ。
大抵の妖力はその妖怪の本質から色が付く。
そもそも力のある妖怪以外は色など持ち得ないのだが……
元々妖怪は人間や他の妖怪の恐怖や悲哀等の負の感情にて力を保っている。
なので大体の妖力は濁った色や、くすんだ色が多い。
だがコイツの妖力は無色透明、色が無いのだ。
そうなるとこの猫という妖怪は人に負の感情を向けられる事も無く生きてきた事になる。
人間の恐怖を糧としない新たな妖怪。
そう思うと尚更、自分の中にある鬼の血が昂ってくるのが感じ取れた。

「ま、こんなもんか。じゃ、行こうか」

彼は準備完了した事を告げる。
俺は思わずその軽さに呆気に取られるが、直ぐに笑みを浮かべる。
手始めに飛び掛って拳を猫に落とす。
しかし猫は既にそこにおらず、拳は何も無い地面を弾き飛ばしていた。
何か驚いた様な顔をしていたが、そんなの今は無視だ。
俺は地面を駆けて接近し、拳を振り下ろす。
猫はそれを後ろに跳んで回避した為、続け様に追撃で踵落としを加えた。
そのまま猫は横に走り抜けようとしたが、俺は脚の位置を変え、それを軸足に回転する様に
手刀で地面を切り裂く。
その後に能力を発動して石片をばら撒くが、それも含めて全て避けられてしまった。

猫は地面に着地すると、表情を変えずに俺に疑問を投げ掛けてきた。

「お前さん、おかしな術を使うのだな?」

「ほぉ、気付いたか……」

俺は思わず感嘆の声を上げる。
殆どの妖怪は疑問も上げずに、必死に戦うだけだったので、こうも冷静に状況を把握して戦うという相手は初めてだった。
俺に匹敵……いや、それ以上の好敵手の存在。
それだけでも嬉しいくらいだ
だが奴は俺の予想を遥かに上回った。

「俺様は少し特殊でな、『爆炎を操る程度の能力』ってのを持っている」

「爆炎……だと？」

猫は俺の力を聞いて警戒の色を強めた。
どうやらこの言葉だけで能力の意味まで理解したらしい。

……どこまで俺を喜ばせれば気が済むのだこの妖怪は。

たったあれだけの戦いだったが、この妖は先程ので俺の戦い方まで見切ったみたいだった。
まさかこれ程とはな……！

「ククッ、もう能力の本質まで見抜いたか……期待以上だ」

俺は骨を鳴らすと、俺は能力を行使する。
とんでもない負荷が掛かるが、これ以外に有効な手立ては無い。
俺は瞬時に普段の何倍もの速度で突進する。

『爆炎加速』

俺が編み出した高速移動術。
その速度は音よりも速く、獣の目にも映す事は敵わない。
恐らくこの速度で俺を捉える敵など存在しないだろう。
俺はそう自負しながら目の前の敵に拳を振り下ろした。

だが――

「な、何を……」

「なに、只単に爆炎の勢いに乗っただけさ。本質を見抜ける程なら、本気を

出しても大丈夫だと思ったんでね」

猫は初見で見切り、避けて見せた。
誰もが捉えられない速度だと思ってたんだがなぁ……
一応余裕を持った態度で説明してやったが、正直一杯一杯だ。
俺は今、とんでもなく焦っている。

そんな焦った俺に追い討ちを掛けるかの様に、猫は新たな力を見せた。
全身に無垢なる妖力が駆け巡っているのが分かる。
といっても分かる程度だ。
何をしたのかは分からない。

俺は分からない事への不安を振り払う為に、『爆炎加速』を使って肉薄する。
そこで俺はまた驚かされる事となる。
先程とはまるで動きが違うのだ。
相手の動作が変わったのではない。
明らかに体自体の能力が向上しているのだ。

これが相手の能力？
いや、違う。

なら相手は何をしたのだ？

だが今の俺には分からない。

俺は半ば自棄になって拳を振るうが、それは全く当たる事が無くひらりひらりと舞う様にかわされる。
俺は混乱する。
何故当たらないのかと。

すると突然相手が何かを飛ばしてきた。
石ではない。
それは妖力を固めた物。
俺は突然の新技に驚きながらも避けて咄嗟に殴り掛かるが、かわされてお返しに蹴りを入れられた。

「ぐっ！」

その蹴りはあの小さな体からは想像も付かない力で、これに重さが加われば
間違いなく気絶していた。
なんとか持ち堪えるが、そこに追撃で先程の妖力の塊が飛ばされる。
一回目は避けられたが、二回目で地面に当たり、その影響で体勢を崩し
そこに追撃の三発目が足に直撃した。
その威力は思いの外強く、耐え切れずに地面に顔を打ち付けた。

「クッ！　まだ」

「終わりだよ」

俺は立ち上がろうと地面に掌を叩きつけるが、突如告げられた通告にその動きを止めた。
相手は目を細めて満面の笑みを作る。
俺はその笑顔に嫌な予感を感じ、咄嗟に上を見た。
そして知った。

――もうすぐ上まで落ちてきている大岩の事を。

「へっ？　なっ、ちょ、ま――――ッ！！！！」

俺は慌ててそこから出ようと地面を這いずったが、間に合わない。
そのまま岩石に体を潰され、俺の意識は闇に落ちていった――

其の二　「鬼神ＶＳ猫」（後書き）

私メリィさん、今すっごく眠いの。

はい、メリィです。
何故か時間関係なく眠くなる罠。
疲れてるのかな……

鬼さんと対決。
戦闘シーンって難しいですね、私は苦手です。
なんとか克服したいですね。
それと独自の設定や解釈が出てますが、大丈夫ですか？
とメリィさんは訊いてみます。
前回書き忘れたので……；；
あと偉そうにべらべら知識的なのを解説してますが、間違って解釈してる
可能性も無きにしも非ず。
いつかボロが出そうで怖い……もう出てるかもしれませんが。

彼の能力は必死扱いて考えましたが、結局捻りとか無かった。
ちなみにこの時代の妖怪は肉体強化の術とかまだ知らない事にしてます。
それと彼の元いた年代ではＡＣ４がレトロゲームと化しています。
百年前なら仕方ないねっ！
レトロというよりもう殆ど骨董品レベルになってますが……

さて、無理矢理終わらせた感が拭い切れませんが
今回はここまで。
ではでは。

其の三　「山の方々」（前書き）

予想以上の客足に毎日テンションが有頂天
期待に応えられる様に、とりあえず明日はダラけよう（オイ

其の三　「山の方々」

「さて、こんなもんだろ」

俺はこの十年で見つけた薬草数種を磨り潰した物を水に投入する。
するとその水は粘り気のある液体となり、掻き混ぜるとより一層粘り気が強くなった。
これは俺が十年掛けて作った傷薬だ。
見た事の無い薬草が多かったので前世の記憶が役に立たず、自力で探して調合。
後は怪我をした生物に試して調整を行った物だ。
多分一番頑張ったんじゃないかな、薬作り。
お陰で薬草に留まらず、この辺に生殖している植物は効能含めて大体は把握してしまった。
俺って地味に頑張り屋だったんだな、と実感したね。

俺は帯状の植物に薬を塗りつけ、その部位が患部に当たる様に巻き付けた。
すると少し痛んだのか、呻き声を上げた。

「うしっ、これで傷は元通りになるかな！」

俺は目の前の怪我人、炎剋の様子を見て頷く。

何で敵の治療をしてるのかって？

だってほら、あの状況で放って置くのもなんか可哀想じゃない？
鬼が大岩に潰されて目を回してるってかなりシュールな光景だし。
それに日本に住んでいた身としてはあのまま放って置くのは良心が痛む。

要するに――

（俺が甘いだけ、と……）

自省しながら溜息。
まぁ……うん、正常な神経の持ち主なら放っておけないよね。
俺は自分を慰めながらも、先程の事を思い返す。

先程の俺の戦いで使った技……

身体能力強化に妖力弾。
どれも俺は初めて知った様な技ばかりだ。
別に生きていく為なら逃げ足が速けりゃそれで充分。
無理に強くなる必要は無い。
それに元から身体能力が高かったので鍛える必要は無いと考えていたのだ。

なのに俺は初めてにも関わらず成功させた。
妖力弾に至っては作戦に組み込める程自然に撃つ事が出来た。
一度も使ってないのに、だ。

「これはどうして、かねぇ」

俺は近場の岩に乗る。
大きさ的には人なら丁度良く座れる程度か？
俺は座るのに適した位置を探してそこに腰を落ち着けた。

（俺の気はさっきの鬼とも違ったな……神通力なのか？）

なんとなく頭に思い浮かべるが、どうもしっくり来ない。
神通力。

それは神様の権限たる信仰の力だが、今の時代に信仰があるのか？
それに俺の力はなんとなくだが、神通力とは違う気がする。
俺は無言でその力を表質化させてみる。
すると体の節々から無色透明の何かが溢れ出してきた。

（やっぱあいつの力とも違うな……）

俺は少し離れた所で寝ている鬼を思い浮かべる。
炎剋の妖力は炎の様な紅色だが、若干くすんで見えた。
それに感じられた力も大きく、しかして恐怖を感じる様な力。
相手との格が違うからかもしれないが、少なくとも俺はそう感じた。

（この力は……何なんだろうな……？）

炎剋とは対照的に、俺の力は妙な安心感を感じる。
心が落ち着くというのか？
神通力とは違うと言ったが、俺はまだ神通力を目にした事が無い。
無論どんな感じなのかも知らない。
故にまだ妖力と考えるのは早計というものだ。
だからこれから先はこの力を……

そこまで考えると、突然砂利の摩れる様な音がした。
俺は少しだけ驚いて咄嗟に物音がした方向を見た。

「あ、その、だな……」

そこには目を開けて此方を見る炎剋が、しどろもどろになっていた。
……なんで？

@炎剋Ｓｉｄｅ

（ん？　ここは……）

俺は薄っすらと目を開く。
入り込んできた日の光に思わず目を閉じかけるが、耐えて徐々に目に慣らしていった。

（俺は……負けたのか……）

俺は自分の状況を把握して現状を悟る。
最後に俺は大岩に潰されたはずだが、何も無い所を見るとアイツが助けてくれたのだろう。
俺はどうやら大きな植物の葉の上に寝かされているらしい。
それに所々湿った物を巻きつけられている様だ。
なんだこれ……？

（そういやアイツは何処だ……？）

俺は制限された視界の中で先程まで敵だった相手を探す。
首を少しだけ動かして左右を確認する。

すると左の方向に奴の妖力を感じ、その方向に首を動かした。
しかしそこにいたのは猫ではなかった。

（……誰だ？）

そこにあったのは、岩場に座り込んで考え事をしている少女だった。
髪色は青味の掛かった白銀で、白磁とも言える白い肌。
その金色の瞳は何処か物鬱げで、何処か儚いげな印象を受けた。
服もまた雲の様に白く、一風変わったその服装は神秘的な雰囲気を持つ彼女には
似合って見えた。

俺はいつの間にか見惚れていた。
どれだけの時間見ていたのかは分からない。
いや、時間にして恐らく数秒だろう。
瞬きするとそこに少女はおらず、俺を倒した白銀の獣がちょんと座っているだけだった。
俺は自分の目を静かに擦る。
しかしそこにいるのはやっぱりあの猫という獣。

（幻……だったのか？）

先程見たのは幻だったんじゃないだろうか？
もしかしたら落石を喰らった影響で錯覚でも見たのかもしれん。
俺はそう納得させてもう一度寝入ろうとした時だった。

ジャリ。

（おっ）

目を擦った手を戻す際に、うっかりと音を立ててしまった。
その音で猫が此方に振り向いた。
何故か気まずい空気が流れ、思わず影響されて焦ってしまう。

「あ、その、だな……」

くっ、焦るな！
いつも通りにしてりゃ良いんだ。
焦る気持ちを精一杯落ち着かせていると、猫の方が口を開いた。

「傷は痛まないか？」

鈴の鳴るような声で此方を気に掛ける猫。
声は女の子だが、節々から感じられる男っぽさから考えると恐らく男なんだろう。
体が小さい所を見るとどうやら子供の様だしな。
もしかしたら俺達の様に成長が止まっているのかもしれんが……

俺はそこまで考えて思考を中断する。
何故なら猫が心配そうに此方を見つめていたからだ。
……そりゃ応えずに黙ってたら何かあったのかと思うよなぁ。

「あー、大丈夫だ、なんともねぇよ」

「そうかい。そいつは良かった」

猫は目を細めて笑顔を作る。
目を細めているだけなのだが、ちゃんと笑って見えるから不思議だ。
彼は表情を戻すと、雰囲気を変えて問い掛けてきた。

「なぁ」

「なんだ？」

「お前さんはまだ俺を追うかい？」

猫の言葉を聞いて、俺は本来の目的を思い出す。
そういやそういう目的があったな、と。
しかし俺は敗者だ。
これ以上の勝負は最早意味が無い。

「追わねぇよ。これ以上は俺の沽券に関わるしな」

「そりゃ重畳、寝込みを襲われたら堪らないからね」

猫はクスクスと笑いながら尻尾を揺らす。
ま、確かにそこまで追われたら心底鬱陶しいだろうしな。
俺はやらねぇけど。
猫はそのまま尻尾を揺らして岩から飛び降りた。

「ふーん、ならなんで俺を執拗に追い回したのさ。去るもの追わずって言うだろ？」

猫の質問に言葉を詰まらせる。
俺の目指す物を教えたらコイツが真似するかもしれん。
さて、言うべきか……

（……いや、大丈夫だ。コイツなら恐らくは……）

俺はそう判断して話す事にした。
根拠なんざ無い。
敢えて言うならあの純粋無垢な妖力を信じてだ。

「……言っても良いが、下心があると考えるな？」

「大丈夫、嘘は見抜ける」

俺は「ほぉ……」と関心の声を口から漏らす。
奴の目は嘘を言っている様には思えない。
……なら大丈夫か。

俺は己の目指す物を話した。

包み隠さず、全てをそのままの形で伝えた。
今の情勢、俺のやってきた事、そして猫に勝負を挑んだ理由……

それらを訊いた猫は、少しばかり思案顔になる。
そして口を開いたかと思うと、とんでもない事を口に出した。

「ならお前がやりゃ良いじゃん」

「は？」

俺は耳を疑った。
この話を聞いていてなんでそんな答えが出てくるんだ？
当然、俺は反論する。

「お前、話聞いてたか？　連中は俺を怖がってそれどころじゃ……」

「少なくともお前さんは上に見られてるんだろ？　なら上に立ってみれば
良いじゃないか。信頼なんてのは崩れ易いが、後で積み重ねる事は出来るんだ
……出来ない話じゃ無いと思うけどね」

……確かに俺より上の存在はいない。
いや、強いて言えば彼がそうだ。
俺に打ち勝った唯一の存在。
他にもいるかもしれないが、今はコイツしか思い浮かばない。

でも、だ。
それならコイツにやらせた方が良いんじゃないか？
猫なら俺より強いから道の脅威にも対抗できるし、頭も……悔しいが俺より回る。
敵を助ける様な甘ちゃんだが、人格面では問題無いだろう。
俺はそう思って彼に話した。

「いや、お前がやった方が良いだろう……あらゆる面で俺を上回っているみたいだからな」

それを訊いて彼は――

「いや……俺にゃ向かないから無理。つか苦手だから」

「は……？」

なんて返してきた。
そしてそれを隠すかの様に言葉を続けた。

「あー、コホン……大切なのは心意気でな。それをやろうとする気力があるからこそ、
それが原動力となって成功への道を歩むのだ。俺はそんな事にゃ興味無いからさ」

「そう……なのか……？」

「ん、その通り！」

それもそうだ。
やりたくない事をやっても上手く行く筈が無い。
そもそも俺がやり出した事だ。
他人に押し付けるなんざおこがましいにも程がある。

「そう……だな……分かった、俺が必ず皆を纏めてみせよう」

「そうこなくちゃね」

俺は決意を新たに立ち上がった。
コイツがこうまで言うんだ、やらなきゃ鬼の名が廃る。
俺は猫の方へ顔を向けると、目を真っ直ぐ捉えて言った。

「さて、まずはお前に俺の同族に合わせてやる……付いて来い」

最初の一歩は……同族(おに)からだ！

@炎剋Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

さて、目の前一帯には岩山があります。
そこには隣の鬼神さんと同じ、角の生えた方々が睨み付ける様に立ってます。

まァ、流れを端的に言いますと、

炎剋「俺に付いて来い」
←
岩山到着したお！
←
この山の王に俺はなる！
←
鬼「何舐めた事抜かしとんじゃワレ？」↑今ここ

といった感じだ。
俺が事前に話した方が良かったかなと思ったがもう遅い。
もう既に戦闘態勢を整えている。

「あのさ皆さん、ちっとは話を聞きましょうよ。もしかしたら――

「うるせぇ！　喧嘩を売られたんなら買うのが常識だろうがっ！
てめぇも一緒に叩きのめしてやる！」

――さいですか」

健闘空しく説得に失敗する。
クソッ！　何処のヤの付く人達だよ！
一人くらいまともなのがいると信じた俺が馬鹿だった……
すると炎剋が掌を鬼さん達に向けて制止する。

「……待て、猫と戦いたいならばこの中から一番強い奴が俺と戦え」

「何抜かしてやがる！　弱い奴はさっさと退場させて一対一、鬼同士で戦うのが普通だろ！」

正にその通りである。
こんなか弱い小動物に強さを求めるのがおかしい。
という事で俺は帰ろう。
そう思って踵を返そうとしたら、炎剋が鬼達を威圧して言い放った。

「言っておくが、俺様に勝てなければコイツと戦う資格は無い」

「おや？　あの凶鬼が今更動物愛にでも目覚めたのかい？」

女の鬼が威圧に耐えながら言い返す。
汗が大量に噴出してるのが見えるので、恐らく痩せ我慢の強がりだろう。
……無理しなきゃ良いのに。
そして炎剋は開いていた掌を握り潰し、余り言い触らして欲しくない事実を言った。

「違う、単純にコイツが俺様より強いからだ。現に俺は先程戦ってコイツに負けた、
それも力の殆どを抑えたこの状態でな……」

「なにっ！？」

『っ！！？』

女の鬼は此方を見て目を見開く。
他の鬼達も同じ様な反応だった。
無理も無い。
凶鬼と恐れられる程の鬼を、小さな獣が力を抑えた状態で倒したとか言い出したのだ。
しかも本人が自ら言い出す始末。
信憑性が高いとかそんな問題じゃない。

……でも俺としては全力だったんだけどね。

すると女の鬼は直ぐに目を鋭くさせて俺を睨んだ。
わぁこわい。

「ふぅん……じゃあ証拠を見せなよ」

「証拠……だと？」

「そいつが強いって証拠さ。強い妖怪ってんなら、妖力量も半端なもんじゃない筈さ」

え？　ちょっと何そのフラグ。
俺が弱いと分かってフルボッコになる状況じゃないですか。
というか強さの基準って妖力なのかぁ……

「俺の証言が信用ならない、と？」

「そうさ。口先だけならどうとでも言えるし、運で勝った可能性だってあるんだ。
だったら本人に証明して貰った方が良いと思うけどね」

「……一理あるな」

一理あるんですか。
むむむ、拙いな。
なまじ女の鬼は頭が回るみたいだ。
鬼なら～とか思ってたけど、こりゃ甘かったかな？

「うむ、なら見せて貰おう、俺を倒した相手の真の力を」

くぅぅぅぅぅっ！

孤立無援とは正にこの事か。
こんなに早く詰むとは思わなかったなぁ。
あーもう、コイツに会ってから碌な事無いぜ。

「どうしたんだい？　もしかしてそんな力無いとか言うんじゃないだろうね」

「そんな事あるか。コイツは少しの妖力を出すのも躊躇ってたんだぞ？　多量となれば
それこそ悩むに決まってる」

彼の言葉が俺の超えるべきハードルをどんどこ上げていく。
チクショー！　こうなりゃヤケクソだコノヤロー！

俺は目を瞑って半ば自棄になりながらイメージする。
思い浮かべるは奥底から湧き上がる無限の力。
……本当は無いだろうけど、ここはあると信じて！

そして少しすると、いやに体が軽くなったかの様に感じる。
俺は不自然に感じてそっと瞼を開く。
最初に目に映ったのは、信じられない物を見た様な顔をしている女の鬼。
そして次には「やはりな」と言いたげな顔をした炎剋。
最後に驚愕の表情と、恐ろしい物を見たかの様な表情を浮かべる鬼達だった。

@Ｓｉｄｅ女鬼

どうせ名を上げたい雑魚の出任せだろう。
最初はそう考えていた。

けどあたし達はそれを後悔する羽目になる。

この動物は目を瞑ったかと思うと、先程の気配が嘘かの様に変わったんだ。
そして目を見開くと同時に現れたのは、目の前の暴君とは比べ物にならない妖力。
しかし濁りも無い無色の変わった妖力。
その圧倒的な力に思わず後退りしてしまった。

（な、なんだい、あの化け物はっ！？）

それは正しく化け物だった。
だがしかし、それと同時に別の驚きも混じった。
最初は目の錯覚かと思ったが、他の者にも見えているのか視線はそっちに向かっている。
その視線に映った物、それは――

銀色の髪を持つ少女だった。

その下にその小動物が未だ見える。
それに少女はどうにも透けて見えるのだ。
これは一体どういう事なんだい？

あたしの疑問が解消される前に、突如先程まで出ていた妖力が消えた。
それと同時に少女も霧散する様に姿を消した。
少し残念な気もする、結構綺麗な娘だったからねぇ。
そうかんがえていると、突然声を掛けられた。

「それで……合格か？」

「えっ？　あ、あぁまぁ……」

先程の小動物があたしを見上げていた。
いんや、先のをこいつと断定して少女にしておこう。

……しかし頭が付いていって無かったのか、妙な返しになっちまったよ。
でもこいつは何処か戸惑った様な、悲しげな表情をした様に見える。
普通なら喜ぶもんだと思ったが……

（……もしかしてこの反応が見たくなかった？）

あたしを含めて、周りの鬼の奴を見る目は異質な物でも見ている様な目だった。
あの反応からしてそれを見たくなかった？
力ある者は畏怖の感情もあってか、近寄り難い。
現に炎剋だって周りの鬼を従わせる為に力を振るい、それによって彼の周りから仲間が消えていった。

あの獣は……いや、彼女はそんな目で見られるのが嫌だったのか？

もしかしたら彼女は昔は途轍もなく強力で名のある妖怪で、その力の所為で周りには友人がいなかったのではないだろうか？
或いは友人はいたが、その力が原因で自分の周りからいなくなったのではないだろうか？
だからこそ力を抑えていた。
周りから仲間がいなくならない様に、皆から嫌われない様に。
それならばあれだけの力を抑えていたのも頷ける。

（……もしや無理強いしたって事かい？　これ）

何故か急に、自分が悪者になった様な気分になる。
いや、あの場でのあたしの判断は正しい。
けどなんというか……

（この罪悪感はなんなんだ！）

まるで年端も行かない子鬼を虐めた様な妙に居た堪れないこの気持ち。
子犬から食べてる餌を取り上げたかの様なんとも言えないこの気持ち。
そんな感覚があたしを襲った。

そんな感情に苛まれながらも、あたしは止まった会話を再開する事にした。
確かに納得は出来たが、従うかどうかはまた別の話だ。
あたしは先程の罪悪感を振り切り、目の前の凶鬼を睨み付ける。
……正直勝てる気はしないが、ここで逃げるのは鬼の恥。
逃げたとしてもそれは死と同義だ。

「さて、分かってると思うけど受け入れるかどうかは別の話さね。
この中で一番強い奴が
戦って、炎剋に勝つ……その後に休憩挟んでそこの獣と対決、それ

で良いね？」

「構わない……さぁ、どいつが俺様の相手だ？」

炎剋が堂々とした態度で言い放つ。
普通の鬼が言えば唯の妄言にしかならないが、それを言っているのは他ならぬ炎剋。
身を持ってその実力を知っている彼等は立ち向かおうなんて愚かな真似はしないだろう。
全く、鬼の名も落ちたもんだね……

（でも誰かが行かないとね……）

実際、あたしの実力はここで一番ではない。
だが誰も名乗り出ない以上、ここは私が出向くしかない。
あたしは意を決して名乗りを上げた。

「全く……情けない男共さね。あたしが相手になるよ、炎剋……この梨帝黒百合（りていくろゆり）がねッ！！」

勝てなくとも、善戦してみせる！
縮こまってる男に代わってね！

……

……

……

……

「ま、負けた……」

あたしは地面に横たわりながら空を見上げる。
力の差は歴然だった。
勝負を始めた瞬間、いつの間にかあたしは宙を浮いていた。

そして次に気付いた時には、岩山に叩き付けられていた。
一方的なんてもんじゃない。
あたしは何かするまでもなく勝負は終わっていたんだ。
今、あたしの体は動かない。
まるでこの岩山の様に不動で、此方の意思に反してピクリとも動こうとしなかった。
炎剋が見下ろしているのが分かる。

「……」

「……なんだい？　無様だと笑いにでも来たかい？」

何も出来なかった無力感。
自分と彼との圧倒的な力の差に、あたしは思わず卑屈になってしまう。
そんな気は無いはずなのに。
そんな事は言わないはずだと分かっていても言ってしまう。
そんな弱い自分が悔しくて、思わず唇を噛み締める。

「いや、勝てぬと分かって尚挑んだその勇気に……そして筋を通そうとしたその
心意気に敬意を持つ。鬼としては当然であり、その様な者を笑う気など微塵も無い」

彼の言葉にあたしは目を見開く。
その言葉はあたしの耳に入り、心の中に深く染み渡った。
そして次はさっきの獣が視界に入ってきた。

「その真っ直ぐな心……大事にしなよ？　そんだけ真っ直ぐならどんな困難があろうと打ち貫く事が出来るだろうさ。でも鍛錬は怠るな。俺から見ても、あんたの戦いは素人同然だ。日々の積み重ねと経験、そしてほんの少しの運があれば、あんたなら直ぐに炎刻に追い付けるかもしれんぞ？」

「あー、でも無謀と勇気を履き違えない様に気を付けなさいな」

そう付け加えて彼女は言った。
相手に諭す程の知識と経験……
様々な事を知り、経験してきたからこそ彼女は強いのかもしれない。
唯の付け焼刃ではなんともならない。
今まで、あたしは自らの体の強さに頼っていたのだと今更気付いた。
……そりゃあたしが弱いはずだよね。

「本来なら初めにするべきだったが、今名乗ろう。我が名は鬼神・炎剋。炎剋で良い」

あたしもそれに倣い、名乗り返した。

「あたしは梨帝黒百合……黒百合で良いよ」

「そうか……では黒百合、これから宜しく頼む」

あたしは思わず可笑しくなって笑みを浮かべてしまう。
つい最近まで恐れて敬遠していた相手と名乗り合っているんだ。
本当に面白い物だよ。

「む、笑う様な事をしたか？　黒百合」

「いや、あんたの事を深く誤解してたなって思っただけさね」

そこであたしはふと気付く。
視界から銀の獣の姿が消えているのだ。
何処に行ったと探してみれば、炎剋の足元にいた。

あたしはその姿が少し可愛らしく見え、くすりと笑いそうになる。
それを何とか堪え、あたしは彼女に声を掛けた。

「出来れば、あんたの名前も教えてくれないかい？　未だに獣じゃ不便だろう？」

「俺は全く構わないんだが……そうだなぁ……」

彼は一呼吸置いて

「イルミナ……俺の名前はイルミナだ」

そう名乗った。
この一件以来、二人を山の頭として迎える事となった。
そしてそれ以降、この二人と行動をする事が多くなったのは既に周知の話である。

其の三　「山の方々」（後書き）

私メリィさん、今久し振りに陰陽鉄みてるの（現在進行形）

面白いですよね？　陰陽鉄。
皆さんどうも、メリィです。
暑い日が続いてますね、夏だから当然と言えば当然なんですが……
起きた時には喉がカラカラで死にそうになります；；

さて今回は山に飛び入り参加。
新キャラ咬ませようと書いたはいいが、なんともびみょんな展開に
＾＾；
相変わらずのネーミングセンスの低さに思わず驚きが鬼なった。
という状態が続く……

主人公の名前は頭の片隅に置いてあったのを拾ってきました。
適当とか言ってはいけない…（

次回の投稿はちょっとわずかに遅れる可能性があるので
耳を長くして待つべき
ではでは。

其の四　「猫と変な妖」（前書き）

さて、前より遅くなりましたが、ちゃかちゃか上げますよー。
ではどうぞ。

其の四　「猫と変な妖」

晴れ渡る空。
見上げた時に目に入った日差しで目を細めるが、やはり清々しいまでに青い。
そこで俺は目の前に胡坐を掻いて座っている友人に問い掛けた

「さて炎剋や」

「何だ猫」

「訊きたい事があるんだが……」

「……言ってみろ」

友人――鬼神・炎剋は神妙な顔で頷く。
俺はそんな友人に感謝しつつ、今俺が抱えている悩みを打ち明けた。

「……何で俺抱かれてるん？」

「知るか」

はい、そこで卑しい想像をした人！
貴方は立派な紳士の仲間入りです。良かったね！

さて。
皆さんこんにちは。
俺だ、オールド……じゃなくてイルミナだ。
実は前回ようやく名前が決まった。
メタ？　ちっげぇよブァカ！　俺はずっと名前について考えていたんだよ！
何しろ名前が無いのは致命的だったからな……主に印象的に。
なので何処かで囁かれていた気がする秘密結社の名前を拝借したのだ。
拝借つっても魂が死ぬまで返さないが。

俺はほんの数ヶ月前に山に迎え入れられた。
時間の流れが速い？　気の所為だ。

その山の中でも俺と炎剋、そして炎剋の計らいで黒百合がトップとして迎えられた。
当然だね。
女性に辛い役割押し付けて男は見守ってただけなのに、文句なんて言える訳無いよね！
ま、文句なんて言った所で即行で叩き潰すけど……炎剋が。
勿論トップは炎剋で、それに続く様に俺、黒百合といった感じだ。
正直立場なんて興味無いが、彼なりに考えた結果だそうなので問題は無い。

それと黒百合はアレ以降修行を始めたみたいだ。
先の戦いと俺の助言で己の未熟さを悟ったらしく、頭として恥ずかしくない様に己を鍛えるとか。
うんうん、それは感心だね。
どうにも鬼達は自分の身体スペックが高いのを良い事に、鍛錬を怠っていたらしい。
それ故に炎剋と比べると平均して弱っちいそうだ。
そりゃ苦労もせずに強くなる奴なんていないもん。
その判断は正しい。

ちなみに俺もこっそりとやっている。
主に妖力コントロールの効率化と、妖力弾の高速展開・発射、及び身体能力強化の高速化だ。
後は偶に炎剋と模擬戦もやったりしてる。
本気の殴り合いではないが……やったら今度こそミンチだろうしね。
ちなみに成果は出てる。
妖力弾を作る時の消費妖力も過去に同じ物を作った時より幾分か少なくなったし、

術式の簡略化で弾幕の展開も身体強化も随分速くなった。

とまぁ、現状報告はこの位にして、状況説明に入ろう。
現在俺は訳の分からん黒髪着物美人に、文字通り抱かれている。
羨ましいと思う事無かれ、俺は今猫なので欲情したくても出来ない。
それに体の影響なのか何故か興奮しないのだ。
猫ェ……

「おい、いい加減離してくれないかい？」

「嫌どす～、こんな可愛い生き物見た事無いえ～」

「……」

確かに猫の可愛さには同意するが、いい加減離して欲しい。
かれこれ三時間はこの状態なのだ。
羞恥心はとっくに通り越して呆れへと姿を変えているんだ。

あっ炎剋！　今人事だと思って笑いやがったな！

俺が睨み付けると、彼はニヤリと笑う。
くっ、後で泣かす！

とりあえず。
俺が抱かれてる間暇なので、この状況に陥った経緯を話そう。
つー事でＶＴＲ（？）どうぞー

……

今日の朝っぱら。
正確な時間なんてこの時代に分かるわけ無い。
俺のおぼろげな知識では日時計なんて、朝、昼、夜というくらいしか分からん。
と、話を戻そうか。
俺は何時も通りに自分の食事を取りに出掛けていた。
俺は人肉は食わんし、酒だってそんなに強いって訳じゃない。
今の体だったら少しは大丈夫か……？

まぁそんな事で、俺は食事になり得る木の実か、お魚でも取りに行こうと考えたのだ。
俺は目当ての木の実を見付けると、その木の実を繋げている枝に向かって妖力弾を放つ。
これも案外妖力の制御に持ってこいで、籠めた妖力が弱いと木の実は下に落ちず、
下手に威力が高いと木の実が悲惨な事になる。
ぶっちゃけコツを掴めば簡単だが、それまでには多大な時間を消費した。
俺ってぶきっちょだったからなぁ。

俺は木の実を齧りながら、これからを考える。
今は大分安定している。
炎剋と友人関係になってから俺を狙う妖怪は激減。
更に自分の力が妖力だと判明（炎剋談）
自分の言葉が万人に通じると分かったし、会話相手も出来た。

後は平穏無事に生きて、寿命を全うするのが理想だ。
だがしかし……

（これまでを考えるとどうにもきな臭いというか……）

どうにも最近は変化が起こり過ぎてる。

俺が猫になったのもそうだが――

――時代の生活様式が一世紀待たずに一変する。

――何故か鬼神に喧嘩を売られる。

――立て続けに鬼のゴタゴタに巻き込まれる。

今の所、立て続けに厄介事が起きてる気がする。
本当に何かの陰謀が働いてるんじゃないかと疑うくらいに。
とりあえずこの感覚から行けば、また近い内に厄介事が起きるに違いない。
勘に過ぎないが、野生の勘は無駄に冴えるのだ。
案外馬鹿に出来ない。

木の実はいつの間にか茎だけになっていた。
ありゃ、もうなくなったか。
俺はもう一つの木の実に狙いを付けていると、近くから何者かの気配を感じる。

咄嗟に振り向くと、そこには我が盟友、炎剋が歩んできていた。

「よぉイルミナ、今暇か？」

「ん？　暇といえば暇だが、食事中だ」

彼は顎に手を当てて何か考える様な仕草をする。
そして「よし」と言うと此方に案を提示してきた。

「後で肉を奢ってやるからちょっと来てくれないか？　勿論人肉じゃない方だ」

「……何か企んでる？」

こいつが何か代替案を出してくる時、大抵何かある。
前だって鬼を倒して名を上げるとか抜かしてた妖怪を、俺に任せてきやがった。
確かに食べ切れなかった物は干し肉にしてくれるし、大抵何か代価があるから良いんだけどさ。

「実は妙な妖怪がいてな」

「またどっかのお馬鹿か？」

「いや、今度は違うのだが……なぁ？」

「何だよその反応」

馬鹿な妖怪じゃなければ何の妖怪だ？
それ以外なんて無いと思ったのだが……

「炎剋の力量じゃどうにもならない？」

「いや、力がではなくて……あぁぁぁっ！　いいから早く来い！！」

「おいっ！　俺はまだ了承してねぇぞ！？　ご飯がまだなんだってばあぁぁぁぁぁっ！！！」

俺は成す術も無く、炎刻に足を掴まれて拉致されてしまった。
いや、鬼相手に力で敵いっこないって。
冗談じゃないからやってみろっての。

俺が連れて来られた場所は少し森の深い所。
木々の生い茂りが激しく、大型の動物なら近寄るのに苦労する場所だ。
その中を進んでいくと、炎刻が突如立ち止まる。
俺は炎刻の見ている方向を必死で見ると、そこには黒髪ロングの着

物美人がいた。
藍色の着物を着こなし、髪はストレートで前髪は切り揃えてある。
目の色も着物と同じ藍色。
そんな女性が横たわっていた。

俺は炎刻に手を離して貰うと、俺はその女性に近寄った。

「おい、大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ」

近寄ってみると、この女性の息遣いが聞こえた。
どうやら眠っているらしい。

「寝てるねぇ……」

「寝てるのか？」

俺がそう伝えて振り返った……

その時！

「おいっ！　後ろっ！！」

「ん？　うぇ？　うにゃっ！？」

突然何者かに抱き上げられる。
っ！　もしや寝た振りかっ！？
という事はこれはまた炎剋の立場を狙う者の罠……！！
俺は自分が油断していた事に後悔する。
敵意を感じられなかったとはいえ、これは俺のミスだ。
人質として捕まえられたのだと認識すると、俺は炎剋に自分ごとやれと――

「なんやこれー！　めっちゃかわええー！！」

言う前に心の中で盛大にずっこけた。
いや、ちょっ……えぇー……

……

という訳でこうなった。

……ってか未だに離してないのかよ。

いい加減にしてくれよー。

俺だって腹減ってるんだよー？

「……そろそろ離して貰えないか？　一応そいつは友人なんだが……」

「ほぇ？　友人なん？」

炎剋が解放する様にせがむ。

ナイスだ炎剋！　殴るのは泣くまでで許してやるぞ！

しかしこの娘はより強く抱き締め

「ほんなら共有して愛でなあかんな」

「……おい、頼むから離せっ……ぐるじい……っ」

ちょ、マジで苦しい。
胸が強く当たってますけど、嬉しい以上に苦しくて死にそう！
やべ……気が遠く……

「おい、絞め過ぎだ！」

「……あ」

今更気付いたみたいな声。
芝居している様な嘘っぽさは感じないが、そろそろヤバイ……！
俺の意識はここで途切れた。

……

……

……

……

「うぅっ……」

俺は呻き声と共に目を覚ます。
やっぱりというか……気を失ってたみたいだな。
俺は今でこそ慣れた様に、小さな体を起こした。

静かに出口の方を見ると、外はすっかり暗くなっていた。
うぅむ……夜まで寝てしまったか。

俺はふと、自分の隣を見てみる。
そこには壁に凭れ掛かって寝ている黒髪美人。
そう、朝に俺を絞め落としたあの女性だった。

「……看病してくれたのかな？」

彼女の手元には濡れた布切れと、水の入った大きめの土桶。
それは彼女が付き添っていてくれた証だった。
炎剋と黒百合の姿が見えないが、恐らく彼女が眠る前まではいたのだろう。
誰かが食事をしていた跡がある。
だとしたら二人は何処に行ったのやら……

俺は立ち上がって思い切り伸びをする。
これは猫になってからの癖で、これをやると体が妙にすっきりするのだ。
人間の伸びと然程変わりは無いが、それでも爽快感は人間のそれとは結構違う。
俺は元の姿勢に戻って外に出ようと歩こうとした。
そこで俺の耳が誰かの声を拾う。

「う、ん……？　あ、目ぇ覚めたん？」

振り向くと、先程まで寝ていた女性が目を擦りながら此方を見ていた。
まだ目が覚めていないのか、眠そうだ。

「あぁ、ついさっきな」

「そうなんや～、でもさっきはほんまにびっくりしたえ～？」

女性は眠たそうにしながらも、からからと楽しそうに笑った。
なんだかほんわかした人だなぁ……
俺は素直にそう思った。

でもこういう人物は案外侮れない。
その裏では冷静に物事を見通し、幾重にも算段を重ねている可能性があったりするのだ。
油断は出来ない。
俺は相手に感付かせない様に警戒しながらも話を聞いた。

「突然気絶したから死んでしもたかと思てな、ホンマに慌てたえ～」

「ははっ、そいつは済まんね。何分この身の上だから全く抵抗出来

なかったのだよ」

「うん、ホンマにごめんな？」

「気にする事は無い、今後気を付けてくれればね」

彼女の謝罪に笑顔で返す俺。
どうにもなんというのだろうか……癒し系？
彼女からはそんな感じのオーラが発せられている様にも思える。
これが計算通りだとすれば主演女優賞を獲れるかもしれんな。
……まぁ、もしかしたら天然かもしれんが。

俺がその可能性を思慮に入れて考えていると、彼女から話を振られる。

「なぁ、君の名前教えてくれへん？　知らんとどう呼んだらええのか分からんえ」

「え？　教えて貰わなかったの？」

「うん」

これは予想ＧＵＹです。

まさかあの炎剋が名前を教えていないとは意外だった。
あいつならうっかり漏らすくらいするかと思った
なんだかんだでアイツは馬鹿正直だからなぁ……

「ま、名乗るんなら先に自分が名乗るってのが礼儀だと思うけどね」

とりあえずお決まり的なセリフを吐いてみる。
すると彼女は迷いもせずに名を名乗った。

「せやな～、ウチの名前は夢落（むらく）。むーちゃんって呼んでな～」

女性は笑顔を浮かべて手を差し出す。
あれか？　握手しろと？
多分俺が一方的に握られる状態になると思うのだが……
ま、いいか。

「俺の名前はイルミナ。……好きに呼んでくれ」

「ならイルちゃんやな、よろしくな～」

い、イルちゃん！？

あの、俺こう見えても♂（おとこ）なんですけど～……

俺が彼女の誤解を解こうと口を開こうとした時、タイミングを見計らったかの様に
炎剋達が帰ってきた。
おのれ～。

「おっ、ようやく起きたか」

「ん、まぁな」

彼の言葉にそれとなく返す俺。
その肩には熊によく似たでっかい動物を背負っていた。
顔が恐ろしく変形してるので、恐らく一発殴って再起不能にしたのだろう。
原型が残ってるので手加減はしたと思うが……

そこで俺はもう一人いない事に気付く。
黒百合は何処へ行ったのだろうか？

「炎剋、そういえば黒百合は何処に行った？」

「あぁ、あいつならもう少ししたら来ると思う」

もう少し。

となると何か止むを得ない事情でもあったのか……

俺がそう考えていると、炎剋に声を掛けられる。

「イルミナ」

「ん？　なんだ炎剋」

「枝は集めておいたから、出来れば火を付けて欲しいのだが……」

炎剋は言い難そうに言葉を搾り出す。

実は炎剋。

普通に火を付ける事が出来ないのだ。

彼の能力は系統的には火を操る能力だが、あくまでそれは系統の話。

爆炎は通常”火”と呼ばれるものと違って物を吹き飛ばしてしまう力がある。
所謂”爆風”という奴だ。
その影響で普通に火を付ける事も儘ならず、能力を使っても枝ごと地面まで吹き飛ばしてしまうのだ。

しかし俺は妖力を火に変換して使う事も出来る。
何故なら一月努力して使い方をほぼ完璧に習得したからだ。
他の属性も勿論出来る。
妖力を火に変換するには、まず五行思想に関して知る必要があるが……

五行思想とは、とある陰陽家が理論付けたとされる古代中国発の自然哲学思想である。
万物は木・火・土・金・水の5種類からなるとされており、季節の変化もそれで成り立っている
という考えられているらしい。

その循環を例に表すならこうだ。

水は木を養い、木は燃えて火を生み、火は灰を生んで土へと還し、
土は金属を蓄えて外部へ提供し、金は大気から水滴を凝結させる。
五つの元素は互いに影響し、そのエネルギーは循環する。
それぞれを生かし合う力、これが五行相生。

そしてそれだけではなく、これら元素は互いに影響し合う。
土は水を濁して塞き止め、水は火を消し、火は金属を溶かし、
金は斧となって木を切り倒し、木は根を張り土の養分を吸い取る。
互いを打ち消し合う力、それが五行相剋だ。

ちなみに五行相生の繋がりを現すなら円で、五行相剋は五芒星を模った繋がりとなる。

この二つは表裏一体であり、互いに相容れない力だ。
これらを完全に掌握するには、やはり並大抵の修練では身に付かない。
勿論、理解するにも相応の時間がいる。
しかし……

（俺は”二週間”なんだよな～……）

実に巫山戯てる、そう思うだろ？
知識も無い素人なら、何十年掛かってようやく物に出来るような技術をたったの二週間だ。
こんなもん厳しい修行を受けて習得した人達から見れば全てを投げ出したくなるだろう。
これは才能で片付けられるレベルなのか？
仮にこの体が”天才”だとしてもこんなにも早く習得出来る物なの

か？
俺としては何か別の力が働いている様にしか思えないのだが……

「おーい、火を付けてくれ～」

「ん？　あぁ、悪い」

おっと、少し考え込んでいたみたいだ。
俺は彼の要望通り、妖術を用いて集めた枝に火を放つ。
放たれた火は瞬く間に燃え広がり、天高くへとその身を伸ばす。
綺麗に燃える炎を見て、夢落は「おー」と感嘆の声を上げる。

炎剋は拾ってきた枝に大きく切り取った肉を突き刺し、四つ程炎に近い所へ突き刺した。
炎の熱はじわじわと肉へと伝わっていき、その色を変えていく。
やがて焦げ目が付き始め、あちこちから油と思われる液体がポタポタと滴り落ちていた。
……だがしかし、何故木は焼けないのだ？
そんな疑問を頭に浮かべてる最中に、炎剋がその内の一本に手を付けると、
タイミング良く最後の一人が帰還する。

「ん、もう始めてるのかい」

「こりゃ丁度良い時に来たな」

「せやなー」

最後の一人――黒百合が開口一番にそう言った。
片手には大きな水瓶、もう片方にはフルーツが一杯に載った手篭を抱えていた。
水瓶からはほんのりとアルコールらしき匂いがする。
……なるほど、この為に遅れていたのか。

「お前……またそれ盗ってきたのか？」

「そりゃそうさ！　頼んでもくれないからね」

うん、まぁそうだけどさ。
自分で作ろうとか考えないのかね？　お酒。
あ、でも時代的にはまだ作れないか。
まだそういう発見もされてないはずだからな。

そうだと考えると、やはり”あの集落”から盗ってきたのだろう。
何故かあそこだけ発展が早いからな。
もうお酒があっても可笑しくはない。
しかしもう何度も取りに行ってるがいい加減気付かれないのだろう

か……ちょっと心配である。

ちなみに発展が早い云々はつい最近知った。
俺が観察していた集落はどうにも発達発展の速度が異常だ。
他の集落ではまだ裸で獲物を追い回してる上に猿顔なのだが、そこは既に立派なホモ・サピエンスに該当する容姿と頭脳を持っている（しかも女は美人ばかり）
今はまだ集落の様だが、町と呼べる規模になるのも時間の問題だと思われる。

黒百合は柄杓を使って酒を皆の杯に注いでいく。
ちなみに俺は水だ。
酒はあんまり好きじゃないんだＺＥ☆

他の皆は杯を片手に、俺は持ち上げられないから地面に。
それぞれが掲げる。

「んじゃ、夢落の仲間入りを祝して……乾杯」

「「かんぱ～い」」

「かんぱ……お？」

俺は途中まで言い掛けて口を止める。
え？　なんか山に歓迎するみたいな口振りなのだが？
疑問に思って思わず口にした。

「いつの間に仲間に？」

「ん？　あぁ、実はお前が寝込んだ後に黒百合が来てな、あいつが会話してる内に何故か意気投合して仲間になってた。ちなみに俺様の決定権は無い」

立場弱っ！
おいおい、もうちょっと粘れや鬼神。
一応最強の鬼なんだろ？

俺がそう籠めてメンチビーム送ってると、炎剋が溜息を吐いて

「……察してくれ」

と哀愁漂う顔で外の月を眺めた。

……そーだな、女って怖いよな。

「今日は付き合うぜ。俺は酒飲めねぇが、話なら聞いてやる」

「悪いな……」

という事で俺は炎刻が疲れ（主に精神的な）で寝てしまうまで、彼の愚痴に
付き合う事にしたのだった。

「――そしたらあいつ突然殴り掛ってきてな、中る訳にもいかないから受け流したら

勢い余って背後にあった木に顔から衝突したんだよ。なのにどうしたと思うよ？　あいつは『避けるなー！』とか叫んでまた殴り掛かってきたんだぞ？
　あいつ最近は修行の成果で強くなってるから耐えられる威力じゃないんだぜ？
それを一体どうやって防御無しで耐えろと？　そもそも俺様に一体どうしろと？
そもそもあいつはーー」

あー、うん。
まさかここまで酷いとは思わなかったわ。
あいつ一ヶ月の間に炎剋をここまで追い詰めるって、一体何してんだ？
というか炎剋って本格的に酔っ払うとこうなるんだな。
なんつーんだろ……愚痴上戸？
そもそも鬼って酒強いんじゃなかったか？
つっても量的に樽三つはいったけどな。

俺は延々と吐き出される愚痴をある程度聞き流して相槌を打つ。
勿論聞いてるよ？
要点だけ抜き出せば大体の話は分かるしな。
まぁ八割くらい黒百合に関しての苦情みたいなのだったが。
つーか一日目の記憶でここまで愚痴れるってすげぇ。
というか覚えてたのがすげぇ。

そんな失礼な事を考えながら、俺は女組の方を見る。
一体どんな話をしてんのかなぁ、と。

「あの子にはやっぱ小さめの布帯を可愛く結び付けた方が良いね。
あそこまで愛らしい
生物って中々いるもんじゃない」

「そやね～、でも簪を細い紐で結び付けてもええと思うけどな～」

「それもアリだねぇ。あっ、でも鈴を一つ巻き付けるなんてのも良いんじゃないかい？」

「それもアリやなぁ～。なんか征服感みたいなのを味わえる気が……」

無しです。
というかやめろ。
特に一番最後！　絶対危ない方向に向かってるから！
そもそも俺は女の子じゃ……

……ハッ！　猫だ……

「なぁ、ウチら気が合うと思わへん？」

「うん、あたしもそう思ってた」
「ほんなら今日からウチらは同士や！」
「おうさっ！」

ガシッと握手を交わす二人。
いや、変な所で意見を合致させるな。
お前らが言ってる事って男に女装させようとする変態の所業だからな？
『女装趣味がある』なんて誤解されたらどうするつもりだ。

「おいィ！　聞いてるのかイルミナァ！？」
「……聞いてるよ」

あっちを凝視していた所で炎剋が絡み付く。
何時もの尊大な（他称的に）態度は欠片も無い唯の酔っ払ったオッサンである。
こんな簡単に人の性格を変えられるとか、お酒って凄いな。

「そこで、だ。俺は思った訳よ。『ここは恩人の為に一肌脱ごう』

って」

「ふぅん……」

一体何の話してるんだろ？
途中聞いてなかったからなぁ。

「……けど、結局は迷惑掛けちまった。本当なら無闇に力を見せ付けるなんて
やりたかないだろうに、そいつを強制させる羽目になっちまった……」

炎刻は自粛する様に笑う。

「それに俺が『必ず纏める』なんて言っておきながら、結局は頼りっ放しだ……」

彼は酒を飲み干すと、新たな酒を杯に注ぎ足す。
けどこのセリフ……もしかしてあの時のセリフか？
だとしたらこれは俺に向けて言ってるって事か。

こいつこんな事考えていたのか。
唯の直情型バカ（失礼）だと思ってたが、こりゃ評価を上方修正するべきだな。
ならば……ふむ。

「俺ってやっぱ向いてねぇの――」

「それは無いね」

――……何故だ？」

俺は彼の言葉を真っ向から断ち切った。
ここからは俺のターンだ。

「まず本当に向いてないなら、己の失敗なんざ省みないし、向いてないなんて言葉は吐かねぇ」

「……」

「そもそもお前が皆を纏めようと思った動機はなんだ？」

「……皆が間違った方向へ進まない為だ」

「なら言う事は無い。自らの信念を曲げず、折らず、何時までも持ち続ければ文句は無い。
……それに何の為の”友”だ？　唯傍にいてドンチャン騒ぐだけが友ではあるまい」

彼は無言で俺を見る。
彼の過去からすれば仕方ないかもしれない。
ずっと一人で生きて、誰に頼る事も無かったのだ。
頼る事が出来ないのは当然と言える。
それなら俺は、友人の為に助け舟を出そう。

「その信念が曲がりそうになったり、折れそうになったらまずは自分の力で解決しろ。
それでも駄目なら俺達に相談すりゃいい。陳腐な言葉だが……俺達は”友”なのだろう？」

「そう……だな」

炎剋はさっき注ぎ足したばかりの酒を一気に飲み干す。
彼の表情には、もう迷いは無い。

「ククッ……また世話になったな、イルミナ」

「気にするな。困った時はお互い様だ」

彼は口を吊り上げて静かに笑う。
うん、やっぱコイツはこうでなくてはな。

「さて、飲み直すか！」

「まだ飲むんかいっ！！」

炎剋の発言に思いっ切りつっこむ俺。
お前の胃はどうなってんだ！？

俺は結局、酔っ払った三人を相手に、一人お水をちみちみと舐める羽目になったのだった。

ちなみに三人は二日酔いでダウン。
お陰で本来なら炎剋と黒百合がやる予定の仕事を二日も一人で請け負う事になった。
畜生……

でもそれが影響して他の妖怪からの人望が厚くなったってのは別の話だ。

其の四　「猫と変な妖」（後書き）

私メリィさん、今絵を描いてるの。

しかし未熟故にクオリティが……
どっちかでも上手くなりたいものです。
……できれば両方（切実）

さて、宣言通りの本日４話目の投稿となります。
今回でまたも新キャラ登場。
一体どれだけのキャラが出るのか……その数に制限は無い（オイ
ちなみにむーちゃん。
京都弁っぽく喋らせてみましたが大丈夫だったでしょうか？
何処か可笑しな点があれば、指摘して頂ければ幸いです。

それと陰陽術の解釈、説明等はｗｉｋｉから持ってきて
それっぽくして解説。
まぁ実際こんな風に派手な術って無いかもしれんけど、
私はあると信じたい（（

そしていい話チックにするのって難しい。
頭が足りないからです↑結論
さて、解説が可笑しな事になってないのを祈りつつ
また次回ッ！！ノシ

其の五　「天狗隠し」前（前書き）

……残酷描写注意付けた方が良いかな？

其の五　「天狗隠し」前

突然ですが、俺達は今少し山から離れた所にいます。
何故かと言うと――

「今日は”妖術”をお前等に伝授しようと思う」

「どうした？　大体何だよ妖術って」

そう、今日はこのトップ3に妖術を教えようと思います。
どうして今更そんな事をって？
だって妖怪なのに妖術が使えないってなんかあんまりじゃないか。
考えが偏ってるとか思ってはいけない。
でも俺の中のイメージだと妖怪は妖術を使って人を惑わし、
己の力で獲物を刈り取る感じなんだ。

それにもう一つ。
仮にもトップなのだから、他より優れた力を持つ事も重要である。
組織を纏める上で重要なのはカリスマ等々だが、力も時には必要なのだ。
力があればそれ自体が全体の士気の向上に繋がるし、抑止力にもなる。

なので今の所俺にしか使えない妖術を教えてみる事にした。
いや、この世界じゃ俺が初だから俺が編み出した事になるのか？
だが俺に教師経験は無いし、講義をした事も無い。
はっきり言って自信は無い。
それに相手は鬼である。
俺が予想するに恐らく普通に教えるのは至難の技だろう。
奴らに勉強が出来るとは思えない。
こいつらはある程度出来るだろうと思うが、それでも知能は低いと考えられる。
……ま、むーちゃんは大丈夫だろうけど。
俺は質問してきた炎剋に答えを返す。

「妖術ってのは俺が使ってる技みたいな奴だ。これは限定的な個人能力じゃなくて
自身の妖力を使う技だから誰にでも習得可能だ」

「お前の技って誰にでも出来る技だったのか」

「そーだよ」

炎刻は意外そうな顔で頷く。
本当に固有スキルだと思ってたのか……

「皆実は予想出来てるんじゃないか？　自身の能力を使う時は妖力を消費するんだろ？

だからある程度攻撃に応用出来るんじゃないかって」

「……」

黒百合は無言で腕を組んで俯く。
やはり感付いていた様だ。
流石は黒百合といった所か。

俺が感心して頷いていると、今度はむーちゃんが手を上げた。

「はい、せんせー質問」

「何かな？　夢落君」

せんせーって言ってきたからなんとなくノリで返す。
夢落は笑顔で衝撃の事実を告白する。

「でもこの二人勉強出来へんえー？　石を使って問題出したら1＋1＝岩って答えよった」

「えっ、マジで？　……プッ」

「おいてめー後で面貸せ」

多分石ころは数を示す為の道具だろう。

それを真面目に石をたしたらどうなるかという質問と勘違いした訳だ。
それでも石を足したら岩になるって……
アカン、めっさ笑えてきた。

「まぁ何だ、ククッ……それに関してはちゃんと対策してある、クフフ」

「あんまり笑わないで貰えるかい？　自分でも頭悪いって自覚してるからさ」

「ふむ、それはすまんな」

「それより対策と言ったな？　どういった対策を立てているのだ？」

炎剋は眉間に皺を寄せて問う。
黒百合には悪いが、勉学で助けられる自信は無い。
生徒だけでなく、教師である自分でさえ力不足なのだ。
これじゃ鶏とダチョウが崖からバンジーするのと大して変わらん。

だがそれ以外ならある。
どちらかと言うと此方の方がこういった体育会系というのか？
そういった性質の持ち主にはあっている。
俺は咳払いをして調子を戻して言った。

「体で覚えるのさ」

「「「は？（へ？）」」」

三人とも間の抜けた声を出して此方を凝視する。
いや、確かに大した策じゃないけどさ。
炎剋は訝しげな表情で此方を見ている。
うん、その気持ちは分かるよ。

「頭を使わない奴ってのは基本的に体で覚えてるのさ。体を動かしてその動作の
一つ一つを染み込ませる。鬼みたいなタイプにはこれが一番良いんだ」

「うむ、確かに頭で覚えるより簡単そうだ」

どうやら納得してくれた様です。
まぁ、多分頭使ってないと思うけど……
そこでむーちゃんが質問してきた。
今度は何だろうか？

「えっと、それってウチもやるん？」

「あー、むーちゃんが嫌ならむーちゃんだけ勉強にしても良い」

「んー、ならそうしますー」

そう夢落は答えた、笑顔が眩しいです。
とりあえず組み分け的には黒百合と炎剋が妖術訓練。
夢落が妖術講座という事になった。
見事に肉体派と頭脳派に別れましたね。
予想通り、と。

俺はゴホンと咳払いをすると、全員に注目するよう呼び掛ける。
うん、なんか良いね咳払い。
先生っぽい。

「それじゃ、これから妖術講座を始める」

さて、俺は何処まで力になれるかな？

「燃えよ！」

彼女の言葉と共に燃え上がる枯れ木。
その光景に黒百合は満足気に笑みを浮かべた。
そしてその傍らには炎を纏う鬼神の姿。
その炎は不思議な事に彼自身は焼かれず、周りの草木が燃やされていた。

「ほぅ……これは凄いな」

それを実感して感嘆の声を上げる炎剋。
自分自身も半信半疑だった所為か、その驚きと感動は一入である。
そして彼等にその術を教えた本人……俺はというと――

「何でこうも簡単に習得できるんだよ……」

無駄に落ち込んでいた。
そりゃ二人が出来た事は嬉しいよ？
正直不安だったから、教師としては教えた甲斐があったというもの。
……けど妖術を編み出した者としては複雑だ。
試行錯誤しながらなんとか習得した代物を、こうもあっさり使われると流石にくるものがある。

それ以前にお前が編み出したものじゃないって？
確かに記録、記憶には残っているけど、実践したという人が今も残

ってるって訳じゃない。
自分の中にあった陰陽術、法術、魔術等の知識と妖怪の伝説伝承。
つまり自分の持ち得る限りの学を基に再現したのだ。
それは殆ど一から作り上げるのと違いは無い。
ヒントになりそうな情報が、有るか無いか程度の違いくらいだ。
これが落ち込んでる理由である。

ちなみに此方が一週間で全部マスターしたのは目を瞑る。

「凄いなー二人とも。もうそんなに出来るんやね」

掌の上に小さい電気の玉を浮かべ、二人に参章の言葉を贈る夢落。
いや、凄いのは貴女です。
何でもう他の属性まで操れるんですか、そこまで教えてませんよ？
しかも妖力を安定させ、形を自在に作るのはかなりの高等技法ですからね？
あ、小さい鳥になった。

というか何この天才。
こいつら直ぐに飲み込みやがったよ。
二人に至っては本当に体で覚えやがったよ。

一応どう授業したのか、説明させて貰おう。

先ず俺が妖術を実践。
妖術を何度か行使してみせて、流れと方向性を知って貰うのが目的だ。
この方法なら頭脳派、肉体派の両者とも問題無く伝わる。

そして次に鬼二人には一度妖術を見よう見まねで使ってもらう。
そこで問題点を指摘して後は放置。
一度使ってもらえば何処が足りないのか分かるし、その後に指摘しとけば勝手にやってくれる。
勿論質問は随時受け付ける。

夢落の方は簡単に原理と法則を説明し、事細かに教えながら実践。
彼女ならある程度知識を持たせ、少しずつ教えていけばちゃんと実るからだ。
……つっても三時間程度の簡略授業で全部理解しやがったが。
鬼二人も説明終わった頃にはある程度出来る様になってたし。
最低でも一月は掛かるかなと思ったのだが、杞憂だったみたいだ。
三人とも予想を遥かに上回った変態的な天才でしたよ。
それとも生粋の妖怪と人から成った者の違いなのか？

なんにせよもっと掛かると思ってたものは、たったの数時間で終わった。
チートでしょうこれは。

さてさて。
どうしようか、こんなに早く終わるとは思わなかった。
まだ半日は残っているんだが？
早々にやる事が無くなってしまった。
妖術に関してもう教える事は無い。
かといって格闘技や戦術を教えるにしても、その為の体が無い。
それならばどうするか……

あ、そういえばご飯食べてない。

「さて、練習はそろそろ終わりにして飯にしよう」

「む、そうか。そういえば昼は何も食べていなかったな」

彼は思い出したかの様に声を上げる。
他の皆も忘れていたらしく、殆ど同じ様な反応だ。

「それならそろそろ昼にするかい？　少しだけ遅くなると思うけど」

「そうどすなー。妖術の練習も兼ねて狩りでもしまひょかー？」

妖術の練習ねー。
うん、そりゃ良い案だな。
ナイスむーちゃん！

「よし、三人とも妖術はある程度使える様になってきたから、実際に使える様に
動物を標的にやってみて。でも食べられないと意味が無いからちゃんと加減してね」

「それに意味は？」

「食料確保の意味合いもあるけど、力の制御を鍛える意味合いもある」

「そやなー。確かに力が使えても、扱えんなら意味無いもんなー」

「なるほど、それなら納得だ」

むーちゃんも含めて同意してくれた模様。
まぁ、力のコントロールって大事だからね。
どれくらい大事かっていうと焼き魚定職に付いてくる漬物くらい大事。
え？　喩えが理解不能？
その辺は察してくれ……漬物美味しいよね。

俺がそう自己解決していると、黒百合が皆に呼び掛けた。

「それじゃイルミナが果物、他私含めた三人が肉担当と行こうじゃないか」

うむ、妥当な分担だ。
俺は既に妖術に関しては慣れきってるから過剰な練習は必要ないし、全員が肉係だと栄養バランス悪いしね。
……ぶっちゃけ狩りとかメンドイだけですが。

そして俺達は役割を決めると、己が任務を果たすべく一時解散した。
さて、先ずは何から集めるかね……
俺は何気なく空を見上げる。

「……雲行きが怪しいな」

朝方とは違った曇り空。
さっきまで青空だと思ったら何時の間にこんな天気に……

（……嫌な予感がするな）

全力で気の所為だと思いたい。
……まぁある程度の事は想定しておくか。

とりあえず俺は会場を洞窟内に変えるのをどうやって伝えようか考えるのだった。

@夢落Ｓｉｄｅ

「んー……中々おらへんなー」

あ、皆さんこんにちは。
ウチ夢落言います。
これでも一応山の四天王やっとります。
まだ三人しかおらへんけど。
今ウチの提案で採用された食料調達に出向いとるんやけど……

何でか知らんけど獲物になる動物が全くおらへん。
虫くらいなら飛んどるけど、流石に食う気にならへんえ。
大きい獲物仕留めたるって意気込んで来たはええけど、肝心の獲物がおらへんなら意味無いえ。

「はよ見つけんとおゆはんに遅れてしまう」

あの二人なら勝手に始める。
数ヶ月しか付き合ってないウチでも分かる。
しかもイルちゃんの制止無視してでも。
なんやかんや言うけど、イルちゃんウチらに優しいからなー。
押し切られるのが目に見える。

……けどホンマにおらんなー。

ちっさいの二、三匹いても可笑しないんやけど。

「……不気味やなー」

こうも静かやとなんや良くない事起きる気するわ。
曇ってきたし。
……それにしてもなんや視線を感じるなー。
この近くには虫しかおらへんはずなんやけど、どーにも違和感を感じる。

そう考えて注意深く辺りを観察する。
イルちゃんが言うには、こーする事で先制攻撃や罠を回避できる確率が上がるらしい。
確かに不意討ちには気を付けなあかんな。
そのまま観察してると、背後からガサガサと物音がしよった。
咄嗟に振り向くも既にそこには誰もおらん。

（気の所為……？）

ウチがそう思って狩りに戻ろうとした時やった。

突如首元に強い衝撃が走る。
いきなりの不意討ちに思わず体勢を崩すウチ。
しかも力入らんくなって膝まで着いてしもうた。

（っ！？　油断した――！！）

なんとか立ち上がろうとするも、もう一度首筋に手刀を入れられて倒れてしまう。
体に力が入らん……目の前が、ぼやけて……

「イル……ちゃ……」

意識が昏倒する中、ウチは自分の信頼する友人の名を口に出す。
そして直後、その意識は闇へと溶け込んでいった。

@夢落Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「いやぁ……なんと儚くも健気な花か」

俺は空を見上げながら呟く。
木々の隙間から覗く空は曇っており、とても良い天気とは言えない。
しかしそこに根を伸ばす花は健気にも天を目指し、その花弁を美しく咲かせている。
それはさながら――

「イルミナ！　お前も戦えバカッ！！」

「おおう、酷い」

現実逃避してたら現実突き付けられた！
ちなみに俺が見つけたお花は風圧で散ってしまった、合掌。

さて。
実は現在、俺達はある妖怪に襲われている。
それも炎剋と合流した直後にいきなりだ。
しかもその妖怪も跳びっきりの有名所ときた。

天狗。

河童や鬼等の有名所と並ぶ超メジャーな妖怪。
彼等は様々な形で言い伝えられており、その在り方は実にバラバラ。
悪人を懲らしめて善人に褒美を与えたかと思ったら、神隠しや仏道

修行の邪魔をする。
神として祀られる天狗もいれば、悪として退治される天狗もいる。
善か悪か、はてまた神か妖怪なのか全く以ってはっきりしない。

元来は中国生まれの妖怪で、火球の流星痕が狗(いぬ)に似ている事から
『天の狗』、すなわち天狗と呼ばれたのだ。

さてさて。
天狗には二十三の階級がある。
まず一般的に知られる高い鼻に赤ら顔、一本歯の高下駄に山伏装束の姿は大天狗。
天狗の内の天辺と言っても過言ではないだろう。
次に嘴を持つ者で、これは烏天狗と呼ばれている。
他にも中天狗や小天狗、木の葉天狗に一番下っ端の水天狗等もいるがこれは置いておこう。

今戦っている相手は嘴が無いので大天狗かと思われるが、鼻が高くない。
どうにも下っ端っぽいんだよねぇ……

あっ。
よく考えたら鬼の頭領が弱かったんだから大天狗だって弱いかもしれん。
多分若輩者なのだろう。
まぁ動きは早いっちゃ早いのだけども。
でも妖怪の強さって妖力の大きさで決まるんでなかったかな？

まぁなんでもいい。
俺が戦っても恐らく何も出来ないだろうし、炎剋ならこの程度簡単に――

「えぇい！　いい加減離れろ！」

面倒押し付けてのほほんとしてようと思ったら怒られた。

チッ、後少しだったのに……！」

「丸聞こえだ！」

「エスパーあらわる」

どうやら聞こえていたらしい。

俺がそんな戯言をほざいてると同時に錫杖での突きが繰り出される。

炎剋はそれをかわして素早く拳を振るうが、すぐに距離を離されてしまった。

「ちっ！　無駄に疾いな！」

彼は悪態吐くと地面に降り立つ。

炎剋はまだ飛べない。

勿論俺だってまだ飛び方を知らないし、二人の乙女もまた同じだ。

その内練習しようと思ったが、まさかここで空中戦が得意な連中と合間見えるとは……

襲ってきた天狗は二人。
両方が炎剋を狙っており、肩に乗ってる俺は眼中に無い模様。

ちなみに炎剋。
一見梃子摺ってる様に見えるが、実際は相手の目的が不鮮明である為、
手を出しあぐねているだけらしい。
コイツなら瞬殺できるもんな、この程度。

ま、でも確かに二人でやった方が効率は良さそうだ。

「そら、鳥さんこちらっ」

「ッ！？」

俺も炎剋から離れ、一人相手取る事にした。
離れると同時に投げた石ころは見事に空を切ったが、タゲは取れた様だ。
相手……天狗Ａとでも名付けようか。
天狗Ａは此方に向かって真っ直ぐ突進してきた。

うん、狙い通り！

「小妖怪が……調子に乗るなッ！」

天狗Ａはそのままの速度で接近、錫杖を突き出した。
俺はそれを飛び越える様に避け、相手の懐に飛び込む。

「なんとっ！？」

突きから薙ぎ払いに変更して対処しようとするが、俺はそれも潜り抜けて肉薄する。

「猫さんキック！」

天狗Ａの腹部に思い切り蹴りを決めた。
種族の都合上両足蹴りなので、俺は敵の腹を利用した三角跳びで離れる。
天狗Ａは体をくの字に曲げて地面に叩き付けられた。

「ぐぬぅっ！」

「わーははは！　侮った罰じゃ鳥頭めっ！」

天狗Ａは苦しげな表情をしながらも、立ち上がって錫杖を構える。
そして俺がそれとなく挑発してやったら睨み付けられた。
おお、こわいこわい。

……えっ？　調子扱いてる？

何、気にする必要は無い。
天狗Ａは此方を睨み付けながら、錫杖を両手で正面に構えた。
すると周囲に風が集まり始め、天狗Ａの周りを包み始める。

「誇り高き鴉天狗を馬鹿にしおって……引導を渡してくれる！」

え？
鳥天狗ってあの鳥天狗？
大天狗の次に偉いあの鳥天狗？

って事はこいつらって幹部クラスの実力者なのか……
それにしては――

「遅いッ！！」

「ウボァー！！？」

――簡単に片付けられ過ぎじゃね？

炎剋の腹パンで２バウンドする鳥天狗Ｂ。
その様は正にゴムボールのようだ。

目の前の天狗は風を纏うと、素晴らしい速度で突進してきた。
確かに滅茶苦茶速く、並みの妖怪では反応出来ないだろう。
だが俺達をその枠に当て嵌めてはいけない。
何故なら比較的長生きしている鬼二人＋毎日の様に鬼の喧嘩に付き合わされている俺なのだ。
そんな俺から見れば、これは余りにも遅い訳で……

「受けよ！　風牙ゴペッ！？」

結構簡単に排除可能なわけである。

また腹に猫式ドロップキックを喰らって吹っ飛ぶ天狗Ａ。
大人の形を取っている天狗が、小さな猫に蹴り飛ばされる様は物凄くシュールだ。
俺はその光景を冷ややかに見詰めながら、炎剋の所へと歩み寄る。

そして更に騒ぎに気付いたのか、黒百合も集まってきた。
どうやら話を聞く限り彼女も天狗に遭遇したらしく、交戦した後らしい。
交戦と言っても１パンで終わったらしいが。

……俺は二発ですが何か？

「案外手応え無かったね」

「これもイルミナの指南の恩賜か」

「……いやいや、あんたらが強いだけでしょ」

なんか俺が教えたから強いみたいな空気になってたので否定しておく。

俺は本当に触りしか教えてないんだ。

後は勝手にコツ覚えてどんどんやってくし……

……あれ？　ていうかこんだけ強いなら――

「というかこんだけ強いなら俺が入る意味無くね？」

「……ツー（視線を逸らす）」

「お前何で視線を逸らした？　おい、紀伊店（きいてん）のか」

こいつ絶対忍者だろう……

と勝手に汚いと思ってると、天狗の一人が立ち上がった。

あの天狗は炎剋がボコってたから天狗Ｂだな。

天狗Ｂは錫杖を杖代わりになんとか立ってる状態の様だ。

ま、錫杖は元々杖ですが。

天狗Ｂは俺達を睨みながら言った。

「くっ……我らが鬼如きに負けるとは……！」

ふーん。
無駄にプライドは高いみたいだな。
奇襲掛けた癖に。
まぁ今日の俺は紳士的だ、運が良かったな。

「まぁ落ち着きなされ。……時にあんたら天狗だろう？」

「……っ！　何故我らの事を……！？」

俺の発言に炎剋達まで驚いているみたいだ。
そりゃ敵対してた相手の種族名を知ってたら驚くか。
俺は動揺する天狗に質問を重ねてみる。

「んじゃそこで質問。何であんたらがここにいる？　ここは鬼の勢力化だぜ？」

「ふん、応える義理は無い」

「んじゃ拷問に変える？　専門家程じゃないが、俺も拷問用の術は使えるんで」

「ば、馬鹿が、その程度の脅しに屈するか！」

俺はにっこりと笑って細かい石を口に突っ込む。
そしてその膨らんだ頬を――

「えいっ」

「ゴプッ!?」

思いっ切り蹴る。
殴られた天狗は口から血液を吐き出し、炎剋達はそれを見て顔を真っ青にする。
確かにえげつない方法ではあるが、これくらいしないと妖怪は口を割らないと思う。
多分これでも割らないと思うが。

「ブヘッ、ゴホッゴホッ……や、やめてくれ。言う、言います……!!」

血を吐き出しながら涙目で懇願する天狗B。
え？　もう口割っちゃうの？
確かにえげつないし外道な方法だけど、余りに早過ぎない？
さっきのプライドは一体何処へ……

そこまで考えて炎剋が

「お前って割と酷いな」

とかのたまった。
おい、俺だって好きでやった訳じゃないからな？
俺は虐めるの大好きな苛虐主義者でも、虐められるの大好きな被虐主義者でも無い。
ノーマル、そう俺はノーマルだ。

「うっさい。さて、まずは何でここにいるのか説明して貰おう」

俺は炎剋の肩に飛び乗ってそう告げた。
折角喋ってくれるのだから、訊く事は訊いておかねばなるまい。
さて、何処まで喋ってくれるかな？

「俺は独断で貴様らを下しに「あーそらないわ」……っ！？」

「先ず少数で鬼に喧嘩を売るメリットが無い。それに準備が軽過ぎるし少なくとも
鬼神を倒すのにあんた三十人分はいると思うよ」

そう。
この程度の実力なら彼が苦戦する要素なぞどこにも無いのだ。
寧ろ三十人でも足りるかどうか……

「あぁそうそう。嘘を付いても無駄だよ？　天然嘘発見器がここにいるからね」

彼は俺の隣、炎刻の顔を見る。
ちなみに彼等が何故嘘発見器なのか。
その理由は彼等が嘘を吐くのが嫌いだからといえる
何故だか鬼は嘘に敏感で、ホラを吹くと簡単にバレる。
鬼は喧嘩っ早く我慢弱い、その上卑怯な事が大嫌いときた。
試した俺が言うから間違いない。
アッパーからのエリアル十連コンボとか死ぬかと思った。

「さて、二度目は無い。何でここにいるのかな？」

「……くそっ！　俺達は天魔様に頼まれて弱いの一人捕まえてくる様に
言われたんだよ畜生！」

「……何？」

それを聞いて炎刻の目の色が変わる。
うん、大体想像が出来た。
天狗Ｂはそのままヤケクソになって大声で白状した。

「チッそこの妖獣を狙ってきたってのに何で合流しやがんだよ！」

……あー、うん。
なんとなく分かるわ。
俺ってこの中じゃめっちゃ弱そうだもんね。

体小さいし、妖力も小さいし。
だから俺は本来戦闘なんざするべきじゃないんだよ、うん。
縁側で丸まってた方が性にあってる。
故に俺を戦闘に誘うなんて間違ってる。
俺はそう言おうとしたら、また以前の事を既視させる様な事を言い放った。

「残念だったな。コイツは俺達の中で一番強い、それに頭も切れる」

「そういう事さ、喧嘩売った相手が悪かったね」

あー。
アレだ、初めて山に来た時と同じ文句だ。
しかも今回は黒百合の援護付き。
なんかどんどん俺の強さに脳内インフレが重なってないか？
これじゃ最終的にとんでもない誤認が広がりそうな予感が……

後で釘でも刺しておこう。

俺は次の質問に移る事にした。
俺が二人の目を見ると、彼等は一歩下がって待機。
その顔は如何にも「早くやれ」と言っている様だ。

……決してＳＰみたいな対応だなとか思ってない。

「んじゃ次に訊くけど、天魔って何者？」

俺が気になったのは天魔の事だ。
訊いてはみたが、大体の想像は付いてるつもりだ。
正直当たって欲しくは無いが……

天魔というのは第六天魔王波旬の事で、仏道修行を妨げている悪魔の事だ。
第六天とは仏教における天のうち、欲界の六欲天の最高位にある他化自在天をいう。
この天に生まれたものは、他人の楽しみを自由に自らのものとすることができるらしい。
仏道修行を妨げるという共通の目的があるからか、最近では天狗の上位的な立位置なのではないかとも言われている。

天魔として名を挙げられるのは煩悩の象徴のマーラーや自在天のマヘーシュバラ
といった所か？　出来る限り会いたくない。
特にマヘーシュバラはヒンドゥー教の戦闘神、シヴァと同一視される事もある
らしいので余計に会いたくない。
戦闘本業の神様と長生きした程度の猫、こんなの勝負とは言わない。
一方的な虐めである。

まぁ戦うのは炎剋だが。

「それは俺も気になった。そんな奴前まで天狗の中にいなかったからな……」

「そうなのか……」

ん？
誰か「空気嫁」って言った様な気がしたが気の所為だな。
とにかく、今の発言はそれなりに気に掛かった。
そんなのがトップに立っているってのも、中々特殊な事例だと聞いたからな。
すると天狗が閉じていた口を再び開いた。
さっきみたいにやられたらそりゃ黙るよな。
自分の身は可愛いだろうし。

「天魔様は我ら天狗の頭だ。お若いながらその圧倒的な力で今の任に就いておられるのだ」

圧倒的な力……能力かな？
俺は未だに持ってないので羨ましい。
あ、猫だから仕方ないか。

天狗Ａは突然偉そうな態度で腕を組み、鼻を鳴らす。
そして割と衝撃的な発言を口にする。

「貴様等四人（猫含む）では天魔様に傷一つ付ける事も――
ん？　待て、人数が足らん様な……」

「「「へ？」」」

俺達三人は言われて初めて気が付いた。
そういえばなんか足りない。
主に男女のバランス的に比率が可笑しい。

俺達は男二人で女二人だったはず。
ならば先程からいないのは？
未だに合流していない存在は？
俺はこの場にいる仲間を順に数えてようやく気が付いた。

「……夢落がいない」

「何……？」

「そういやさっきから姿を見てない……！」

黒百合がそこまで呟いた所で、何者かが接近してくるのに気付いた。
それは明らかに殺意をもって俺達に近付いているのが分かる。
俺はそれを察知して大体の位置に障壁を張った。

次の瞬間には黒百合に刃物を突き立てようとしている天狗の姿があった。
黒百合は咄嗟に防御の姿勢を取るが――

「なっ！？」

次の瞬間にその刺突は障壁に阻まれて弾かれた。
勿論俺が張っておいた障壁だ。
刺突を弾かれた天狗は素早く空中に飛び上がり、天狗Ｂの所に舞い降りる。
その天狗の体付きは女性のものだが、顔がベールで隠されていて分からない。

女性天狗はチラリと天狗Ａ、Ｂ両名の安全を確認すると、口早に指示を飛ばした。

「壬籠坊（みろうぼう）、さっさと伸びてる馬鹿を回収して下がれ。目的は達した。これ以上の戦闘は無意味だ」

「ま、真夜（まや）！　助かった、直ぐに撤退する」

真夜と呼ばれた天狗に感謝しながら、天狗Ｂ（壬籠坊）はＡを担いで飛び去る。
炎剋はすぐさまそれを追おうとするが、真夜が目の前に立ちはだかる。

「クッ！　退け、叩き潰すぞ？」

「ご安心を。少しの時間稼ぎが出来れば問題無いので」

彼女はそう言って小剣を構える。

黒いカッターに白いマフラー、更に白いスカート。
加えて黒いベールの中に少し不釣合いな赤い修験者の帽子。
その全体的なイメージから見れば、まるで忍者の様にも見える。
相手の容姿云々を探っていると、彼女は構えながら話を始めた。

「さて、私は言伝を伝える役目も請け負ってきましたので、早く伝えるとしましょう」

炎剋と黒百合は訝しげに様子を窺いながらも耳を傾ける。
俺も当然相手を警戒しながら話を聞いてみる事にした。

「『〝友〟を預かった、返して欲しくば我々の元に赴き降伏を宣言せよ』です」

「それを素直に聞くと思ってるのかい？」

黒百合は苛立たしげな表情で相手を睨む。
しかし相手は語調を変える事無く淡々と告げる。

「『従わなければ安全は保障しない』とも仰っていました」

「……」

炎剋は黙って聞いている。
その雰囲気はとても近寄りがたい威圧感が漂っているが……

「それでは確かに伝えました。良い返事を期待しています」

真夜はそれだけ伝えると、身を翻して空へと飛び立っていった。

残されたその空間に、重い空気を残して……

ナンテコッタイ。

其の五　「天狗隠し」前（後書き）

私メリィさん、今回深夜投稿なの。
……ねみぃです。

どうも皆さん。
メリィです。
また学校が始まってしまいました。
夏休みカムバック……

さて、気を取り直して。
今回は万を辞して天狗さん登場。
微妙に説明文多いです。
説明文にちょこっとオレ設定混ぜちゃってますのでご注意を。
今回も頑張っちゃったぞー私。
でも次回はもうちょっと短く出来たら良いな……
それと拷問（笑）シーンはタグ付けた方が良いかな？
と若干迷ってる次第であります。

さて、色々書きたい事もありますが、もう眠くて限界です；；
他は活動報告にでも書かせて頂こうかな。
大して書くこと無いかもしれんけど（（
ではではまた次回～

其の六　「天狗隠し」中（前書き）

今回も視点変更多めです。
さぁ、キリキリ行きましょうか。

其の六　「天狗隠し」中

何時もと変わらぬ美しき山の風景。
だがその山は現在、鬼達の醸し出す雰囲気により重く暗い空間へと変貌していた。
その空間の中心には派手な色の着物を着た女鬼と素肌に白い陣羽織を羽織る男鬼、
そして白銀の毛色を持つ猫がいた――つまり俺である。

さて、今の状況を説明するとしよう。
俺達は襲撃を回避した後、元々の活動区域である山周辺で唯一帰ってこないメンバー、
夢落の捜索に乗り出した。

結果。
彼女は見付からず、あの天狗の言っていた通り連れて行かれた事が分かった。
正直唯の冗談であって欲しかったが……

そこで俺達は作戦会議、及び戦力を整える為に山へ戻った。
いくら鬼が強いといっても油断は禁物。
無意味に勝利を確信するとフラグが立つって誰かが言ってた。
誰だったかな？

まぁいい。
そんな事より今だ。

策を練る為に山へ戻り、鬼にこの事実を伝えた。
すると他の鬼連中はというと……

「何？　夢落の姉さんが攫われただと!?」

「そんな奴ら許しちゃおけないわ!」

「ヤロー共ォ！　殴り込みだぁ!!」

「鬼に手を出したらどうなるか鳥類共に教えてやれぇっ！」

という感じでヒートアップ。
俺では少し手が付けられなくなってしまった。
しかも妙にテンションが高くなってる所為か、周りが雄叫びを上げて声が通らない。
お陰でこちらの指示は全く通らずじまい。
まだ指示なんて飛ばしちゃいないが。

とりあえず今はこの熱暴走起こしてる連中を緊急冷却する必要がある。
さて、どうするかな……
なんて考えてたら炎剋が動き出した。

「貴様等ッ！　静まれぇい!!」

その一括と共にでかい爆発音。

どうやら能力を使って沈静化しようとしてるらしい。
珍しく頭使ったなお前。

その轟音は流石の鬼達にも効果があったらしく、一斉に炎剋の方向。
つまりは俺達の方を向いた。

……まぁ、少々効き過ぎな気もするが。
だってみんな目ん玉ひん剥いてこっち見てんだもん。
ちょっと怖い。

そんな俺を知ってか知らずか、炎剋は声を上げて此方に視線を集める。

「知っての通り俺様の友、夢落が天狗に攫われた！　幹部と頭である俺様が付いていながらこれは情けない結果と言えよう。だが俺様もこの鬼を纏める頭だ！
このまま泣き寝入りなどできんっ！」

彼の声を鬼達は声も出さずに聞き入っていた。
それこそ先程の喧騒が嘘の様に。
その言葉を発する彼からは、いつもでは感じられないオーラの様な物が感じられた。
こ、これがカリスマなのか……！

「故に聞け！　これから奴らの縄張りに乗り込む作戦をこのイルミナが立てる。

いくら鬼と言えど策も無しに闇雲に突っ込めば無事ではいられまい。
その証拠に我らですら煙に巻かれてしまった。俺様は皆にも同じ誤りを犯して
欲しくは無い」

おい、肝心な所で人任せかい。
確かに頭脳労働は得意じゃないって知ってるけど、見栄ぐらい張ってくれよ。
さっき俺が見えたオーラが減衰したぞ？

しかし鬼達は納得したのか、一様に頷いたり肯定の言葉が飛び交ったりしていた。
その様子に炎剋は満足そうに頷く。

「よし、皆も分かってくれたな？　それではイルミナ、頼む」

「しょうがないお頭だ。そこまでお膳立てされたらやるしかないじゃないか」

俺は少し皮肉を混ぜながら肯定。
うん、逃げられない。
この状況になったら俺もう逃げられない。

「それじゃ、いっちょやってみますか」

ならば全力を尽くそう。
どうせなら精一杯やって盛大に失敗した方がまだマシだ。
友の為……と陳腐な言葉を使う気は無い。
そんな事を言うくらいなら俺は牙を抜くだろうな。

さて。
相手は卑怯な手を使った。
それに関して文句を言う気は無い。
此方がそう思うという事は、俺達がその策にまんまと嵌められたという事だからな。
でも――

（奴らはそういう手を使ってきたのだ）

それなりの目には、遭わせてやらねばならんよな……？

壬籠坊Ｓｉｄｅ

俺は壬籠坊。
誇り高き鴉天狗であり、名誉ある天魔様の腹心でもある。
その誰もが羨む立場に居座る俺は、先程とある任から帰ってきたばかりだ。
そう。

鬼の山にいる幹部を誰か一人連れ去る事。

これは天魔様が直々に立案された作戦だ。
相手方の『鬼』と呼ばれる種族は正々堂々と対峙し、嘘や卑怯な真似は一切しない。
力こそ強い物の頭が非常に弱い事が分かっており、簡単な嘘でも騙され易いと報告を受けている。

ま、所詮鬼もその程度という事だ。

我々天狗は鬼とは違い、非常に知に優れている。
他の種族とは比べ物にならん頭脳だ。
それに加えて筋力こそ鬼に劣るが、それでも並外れた筋力に最高の素早さ。
その両方を兼ね備えた、正に”最強の種族”だ。
唯真正面を取って殴り合う事しかできん鬼とは格が違うのだ。

だが悔しい事に、相手の方が経験で上回っていた。
俺は簡単に落とされ、部下に至ってはあんなちんちくりんな生き物

にやられた。
おまけに俺が受けた任は真夜が勝手に遂行しやがる始末。
お陰で俺は天魔様にお叱りまで受けてしまった。

まぁいい。
この恨みはいつしか晴らすとしよう。
その機会も近いやもしれんが……

今俺の目の前には一人の女が転がっている。
この女は鬼の住む山で幹部をやっているらしい。
しかし戦闘をしている所を目撃した事が無いのでその能力は未知数。
だが女は今気絶している上に、ここは我々天狗の縄張りだ。
勿論縄で手足を拘束してあるので、俺が襲われる心配は無い。

「ふん、こんな女が幹部とはな……」

俺は強そうには見えないその可憐な体を眺める。
肌も白いし腕も細い。
おまけにかなり動き難そうな服装だ。
とても相応しい格好には見えない。

しかし女か……
俺と同じく、天魔様の腹心をやっている真夜も女だった。
最近は女がどうにも強くなってる気がする。
……いや、男が弱くなってるのか？

「にしても結構綺麗な顔してるな……」

女性の顔を見てそう呟く。
どうせ敵側だ。
今ここで何かあった所でどうとも言えまい。

「いっその事、ここで汚してやろう……」

俺はそうした結論に達し、女の着る衣装に手を掛けようと手を動かす。

しかしそこで――

「何をしているのですか？」

邪魔が入った。
そいつの格好は何時もの黒尽くめの衣服に顔を覆う垂れ布。
俺にとって存在自体が邪魔な女。

……真夜だ。

真夜は俺を睨み付ける様に視界から外そうとしない。
しかも常時、此方に圧力を掛けている。
流石の俺も動揺を隠せなかった。

「もう一度訊きます。貴方はその着物をどうなさるつもりですか？」

「そ、それはだな……」

拙い。

恐らく先程の発言も聞かれてしまったのだろう。
本当にこれは拙い。
これを天魔様に報告されたら間違いなく俺は降格だ。
初夜は我が貰う！　とか言ってたからな……

「見苦しいわよ下種が。アンタがそんなだから部下の質も落ちるのよ」

「っ！！」

クソッ！　このアマがぁ！
調子に乗りやがって――

俺が生意気な小娘に鉄槌を下そうと動こうとしたその時だった。

――ドオォォン！！――

外でデカイ爆発音。
慌しい声があちらこちらから聞こえ始める。

「何事ッ！？」

その声に応じるかの様な時機で下っ端の天狗が部屋に駆け込んできた。
しかも気が動転しているみたいだ。

「ま、まま真夜様！　て、敵が……鬼が攻めてきましたぁ！」

「――まさかもう襲撃してきたのですかっ！？」

俺が知る限り常に冷静な真夜が驚きに声を上げていた。
それも当然。
なんせ誘拐からまだ三刻も経っていないのだ。
そんな短期間の間に此方の本拠地を割り出した。
そうなれば驚く外無いだろう。
俺だってこの女に追い詰められてなかったら慌てふためいていた。

「急いで体勢を立て直してください！　陣形を組んで冷静に対処するように伝えなさい！！」

「はいっ！」

そう命令すると下っ端は素早く現場へと向かった。
真夜は舌打ちをして此方を睨む。

「アンタの処分は後で決めるわ……逃げないでよ？　臆病者には無理だろうけど」

「なっ！？」

それだけ告げると真夜は足早にここから立ち去った。
言われた瞬間は衝撃で呆然としていたが、我に返るとその事への苛立ちや
怒りが湧き上がり

「クソッタレッ！！」

俺は近くにあった木桶を蹴り飛ばす。
何だと言うのだ！
俺より力の無い女の癖にっ！

大体何故あんな奴が天魔様の腹心なんかやってんだ！
もっと相応しい奴だって中にはいたってのに。

能力も力も劣る落ちこぼれが何故っ！？

俺は言葉に出さずに不満を撒き散らし、気付いた時には木桶は粉々になっていた。
どうやら知らぬ内に踏みまくっていた様だ。

「ハァハァ……クソッ！」

気に食わない。
あの女が俺と同じ立場というのが気に食わない。
それだけじゃない。
あの鬼という連中もだ。
特にあのちんちくりんな下等種。
力が無い癖に、あいつらの中では俺と同じ様な立場だった。
そして――

「こいつも女だったな……」

多分能力が強いのだろう。
でなきゃ幹部なんて出来るはずが無い。
能力が強いなら文句は無い。
だがこの鬱憤はどうしても晴らしたい。

ならばこの女で発散しよう。
コイツは敵だ。
どうせあいつらは全滅するのだから、少し汚した所で問題はあるまい。

俺はそう考えてまた着物に手を伸ばした
しかしその時にまたしても邪魔が入る。

ガタンッ！

物音。
俺達の縄張り内での大きな物音がしたのだ。
しかも出入り口から。

「誰だ……誰かいるのか！？」

しかし誰も応えない。
痺れを切らして俺は出入り口に向かう。
だがそれは悪手だったのだろう。

「よう大将」

その瞬間に強い衝撃。
俺はそれを最後に気を失ってしまった。

黒百合Ｓｉｄｅ

「ふぅ……簡単に片付いたね」

あたしは目の前で気絶している天狗を見てそう呟く。
余りこういうコソコソとした事は好きじゃないんだけど、相手は天狗。
もっと姑息な手を使ってくるかもしれないからね。
それに案の定、夢落も危なかったみたいだし。
あたしは小さく息を吐きながら、待機してる仲間に指示を飛ばす。

「ほら、なにボサッとしてんだい！　早く夢落を連れて脱出しな！」

「はいっ！　姉（あね）さん！」

部下の鬼は指示通り、夢落の縄を解いて背に抱えて部屋から出て行った。
あたし達鬼は上下関係なんて滅多に作らないけど、今回ばかりは必要らしい。
皆の自尊心がぶつかって作戦遂行に支障が出たら大変だから。
……それにしても面白いくらい巧くいったね。

今回の作戦は陽動というらしい。
表で炎剋率いる一派が派手に暴れて注意を惹きつけ、あたし達の別働隊が
密かに潜入し人質の救出を行う。
イルミナ曰く「単純な作戦」らしいけど、理に適ってるらしいから問題ない。
それに相手が確実に此方を舐め切ってるらしく、この様な策を練るとは
思っていないだろうとも言っていた。
……気に食わないねぇ。

それは正にその通りで、巣にいる天狗は表に迎撃に出ていて蛻の殻。
あたし達はすんなりと侵入する事が出来た。
しかもいたのは見張りと思われる天狗一匹だけ。
救出は難なく成功していた。

（後はあっちの援護だったね……）

あたしは作戦内容を思い出しながら部屋から出て行く。
これからは内側から強襲して相手の錯乱を狙う。

味方がいるはずの所から突然敵が出てきたら驚くだろう？　とはイルミナ談。
何故かこの時イルミナから黒い気配がしたが、気の所為だろう。
まぁいいか。

「さっ！　これから鬼神様を助けに行くよ！　準備は良いね？」

『おうさ！』

勢い良く飛び出す鬼達。
恐らく数秒後には戦いに混じって暴れていることだろう。

（さて、あたしも行くとするさね）

あたしは悠々と歩いてその洞窟から出る。
急いでも良いけど、あの二人が暴れてるから余り出番は無いと思うからね。

あたしは速度を落とさずに歩いていると、呻き声を聞き取った。
この声は確か……！
あたしは直ぐに声の発生源に向かって走る。
そして茂みを抜けると、そこには横たわる一匹の鬼がいた。
そう、夢落を運んでいた鬼だ。
そこ彼処に護衛で付いていった鬼も倒れている。

あたしは護衛していた鬼に近付き、生きている事を確認してホッと

する。
出来る限り死人は無しで行った方が寝付けは良さそうだしね。
近付いたあたしに気付いたのか、鬼が一人目を覚ました。
内心慌てながらも、その鬼の近くまで行く。

「ね、姉さん……すまねぇ……」

「余り口を開くんじゃないよ。傷に響く」

痛みに耐えながら謝罪する鬼。
あたしは彼に無理はしない様に言っておいた。

……でも可笑しいね。
鬼ならとは言わないが、妖怪はある程度の無茶が利くってイルミナも言ってたはず。
実際あたし達の傷は直りが早い。
しかしこの鬼の傷口は塞がる気配すら無い。
他の鬼もそうだ。
見た所傷は浅いが、それが塞がっている様には到底見えない。

「姉さん……実はっ……謝らなきゃいけねぇ」

「何をさ！」

「姉さんを……夢落の姉さんを連れてかれちまった……！」

「何だって！？」

まさかとは思うが、気付かれたか？
だとするとあいつらが拙い！
とりあえず犯人を聞き出す必要があるか。
応急処置程度ならもう済ませたしね。

「連れてった奴はどんな奴だい！？」

「デカイ妖力を持ってた……あ、あいつらの……幹部、だと思う……」

「デカイ妖力……？」

それが本当なら苦戦は必至だ。
イルミナは……分からないが、炎剋は鬼の頭領。
失う訳にはいかない。

それに夢落を使われたらどうなるか……

（クッ！　本当に今日は厄日だね！）

あたしは心の中でそう吐き捨て、彼等の所へと向かっていった。

@イルミナＳｉｄｅ

「叩き潰せーッ！！」

「反撃させるなぁーッ！」

「早くこっちに手を貸してくれーッ！！」

「こっちは手一杯だ！　他を当たれ！！」

「ヒャッハー！　天狗は消毒だーッ！！」

はしゃぎまくる鬼達。
そりゃもう宴と喧嘩は江戸の華ってのが鬼らしいし、そのはしゃぎっぷりは尋常じゃない。
あ、また天狗が飛んだ（ボール的な意味で）。

かくゆう俺も暴れている最中だ。
鬼とやるよか楽だろうと高を括って来やがるのか、数が普通に多い。
まぁ練度が低くて相手にならんけどな。

こんな感じに。

「馬鹿な！　攻撃が当たらないっ！？」

「ギャーッ！？　コイツなんか撃ってきたぞーっ！？」

「痛いっ！　痛いってマジで！」

「つか避けれるかこんなもん！！」

「ひでぶっ！？」

ね？　簡単でしょ？

天狗は有名な妖怪だし、囲まれた時は本気でヤベェって思ったが実の所ネームバリューだけ高い見掛け倒しでした。
まぁ全体的に若いから今後に期待って奴か。
俺にこんな事言われてる様じゃまだまだだしね。

さて。
俺達の作戦は陽動だ。
出来るだけ派手に暴れて敵の注意を惹きつけるのが目的だ。
ちなみに別働隊は既に潜入済み。
もうそろそろ救出し終わっても良いくらいだろう。
成功すると良いが……

俺は残りの天狗を伸して、周囲を探る。
うん、もう他に向かってくる奴はいねぇな。

「さてさて、あっちはどうなってるかな？」

俺は炎剋の方を見てみる。
先程までいた天狗は全滅していたが、代わりに別の天狗と戦っていた。

（あの天狗……あの時夢落を攫った奴じゃねぇか？）

あの黒いベールは特徴的だったし、間違いないだろう。
しかし驚きなのはその動きだ。
一つ一つの動作に無駄が無く、それでいて自分の身軽さを活かした見事な戦い方をしている。
更に能力も併用してるのか、時々姿を消したりしてあの炎剋を翻弄している。
想像以上にやり手の様だ。

（これは……予想外のファクターだな）

彼女ほどの実力者が束になって掛かってきたら流石に危ない。
まず俺じゃ捌き切れない。
猫ですから。

二人はしばらく交戦していたが、突然両者の動きが止まった。
見た所戦意も失っていないみたいだし、何かあったのだろうか？
そう疑問を浮かべた俺だが、その答えは直ぐに耳に入る事となった。

「聞け、下等な鬼ども。我が名は天魔の波旬、貴様等を支配し頂へと昇る者だ」

うわっ！
なんか高慢ちきが出た！

なんて思ってしまった俺の精神は正常な筈だ。
ここまで相手を下手に見た態度って初めて見た気がするし。
いや、最初の炎剋もこんな感じだったか？
いやいや、ここまでは酷くなかったな、うん。

天魔は見た目的に伝承通りの大天狗の格好をしている。
鼻も高いし赤ら顔だ。
昔聞いた通りの格好だという事に感動を覚えるが、この態度は……
いや、傲慢な僧がそうなったって記述してあったし問題無いか。

「支配か……貴様程度の器で出来ると思うか？」

「ふん、我の器は貴様等程度では量る事すら敵わぬ」

凄い事言うなぁ。
まだ戦ってもいないのに。
達人は相手の動作の機微で腕を見極める事が出来るらしいけど、あの立ち回りは
素人だよなぁ。
重心の傾きといい、目の動きといい。

「やるなら相手になろう。貴様がどれだけ保つか分からんがな」

それを見切った炎剋は透かさず戦闘態勢を取る。
確かに炎剋ならば簡単に始末出来るだろう。
しかし流石に彼だけでは横に立ってる忍者まで相手には出来ないだろうから
俺自身も援護の姿勢に入る。

あくまでも援護である。
渦中に飛び込んで俺が無事でいられる可能性は限りなく低いからな。
あくまでも長生きな猫だし。

しかし波旬は挑発に乗らず、余裕たっぷりの表情で鼻を鳴らす。
その余裕は一体何処から来るのか。
何か嫌な予感がしてならないのだが……

そしてその予感は当たる事となってしまう。

「クハハ、貴様等に我が力を披露してやっても良いが、残念ながらその
必要性は皆無だ。これを見るがいい！」

波旬はその言葉と共に、目の前に和服の女性を投げ出す。
俺は……いや、この場にいる鬼達は皆目を疑っただろう。
なんせ――

投げ出されたのは紛う事無き、救出される筈だった夢落だったのだから。

「なん……だと？」

炎剋も流石に驚きを隠せなかったのだろう。
この作戦での要は”夢落の救出”だ。
相手が態々此方側の妖怪、しかも幹部クラスを攫ったという事はそれを利用した作戦を考えているという事なのだ。
そして俺が考えている最もポピュラーな利用方法が”人質”だ。
先程の言葉からして此方の支配を狙っているのは明らか。
だとすれば人質解放の交換条件として出される内容は確実に此方側の無条件降伏である。

俺はそれを予想したからこそ、人質の救出を最優先とした。

先に救出が出来れば、此方が不利な状況に陥る事だけは防ぐ事が出来る。
チームに黒百合を加えたのも作戦の成功率を引き上げる為だ。
早期の作戦決行もその一因。
相手とて此方が直ぐに攻めてくるとは思わないだろうからな。

しかし作戦は失敗した。
彼女が今ここにいるという事はそういう事だろう。
俺としては黒百合が失敗したとは思っていない。
恐らく偶然あそこに天魔が居合わせたというのが妥当な線だろう。
運が無かった、唯それだけだ。

「さて、鬼神よ。こいつを助けたければここで黙って死ぬが良い。
そうすれば
鬼も完全に戦意を喪失するだろうからな」

「クッ！」

炎剋は表情には出していないが、その内心では奴を殺したくて堪らないだろう。
なぶり殺しだなんて、鬼にとって屈辱でしかない。
それ所かその卑怯な行いに憤怒しているはずだ。

「おっと！　そういえばそこの獣も手を出すなよ？　一対一の正々堂々とした
決闘なのだからな……クハハハハッ！」

何が”正々堂々”だ。
貴様がその言葉を使うな！

畜生。
作戦の練りが甘過ぎた。
不測の事態を考慮してこその作戦だろうに！
何か……何か別の方法は無いのか？

俺が必死に代替案を捻り出している間に、一方的な暴力は振るわれる。
彼も抵抗する気は無いのか、ただただ攻撃を受け続けていた。

（クソッ、俺の所為で……俺の所為で友人が殺されていく……！）

唯黙って殴られ続ける炎剋。
殴られては倒れ、蹴られては倒れ、為すがままにやられる。

俺はそれを黙って見る事しか出来ない。
そう、見る事しか……

（そんなの……そんなの俺は嫌だ！）

俺は否定する。
断固として、そんな運命受け入れて堪るかっ！

そしてその瞬間、目の前が黄金に染まる。
自分の見る世界が一瞬で変わったかの様に視界が金に。

（い、一体何が――）

俺の意識は、そこで途切れた。

俺が最後に見たのは、驚愕する二人の姿だった。

其の六　「天狗隠し」中（後書き）

私メリィさん、今日買い物してきたの。

しかし買ったものはととモノ３。

なんでこうなった。

はいメリィです。

今回は結局纏まらず、中篇となりました。

色んな展開考えてたらいつの間にかこうなってましたよ。

個人的に今回はやっつけになった気もします。

しかたないじゃない　しかたないじゃない

手直し今日慌ててやったんだもの（泣

他にも青臭い戦術論とかツッコミ所満載なうえ急展開気味ですね。

ですがこれで準備は整いましたよっと。

次回で天狗隠しは最後となります。

いやはや、我ながら長々と書いたと思います。

それではまた～ノ

其の七　「天狗隠し」後（前書き）

久々にアクセス解析見たら
アクセス２５，０００突破、ユニーク４，０００人くらい
となっていて吹いたｗ

なんというか……皆さん有難う御座います＾＾
そいじゃ本編をお楽しみ下さい。

其の七　「天狗隠し」後

@炎剋Ｓｉｄｅ

「くたばれぇ！！」

と言いながら正面から突撃してくる天狗。
俺はそれを殴り飛ばすと、近くの木を叩き折ってそれを抱えた。

「げっ！　なんつう力だっ！」

「に、逃げろおぉぉぉっ！！」

木を振り被ると敵は慌てて逃げ出す。
しかし立派な木の幹は身長以上に大きく、逃げ切る事も敵わずに直撃する。
ざっと見ても三人は巻き込んだだろう。

俺は今、作戦中だ。

内容は単純明快で「表で盛大に暴れてくれ」というもの。
俺の役割は囮……確か獲物を釣る餌みたいな物だって言ってたな。
此方がどれだけ敵を引き付けられるかが大事だとも言ってた。

とりあえず。
夢落を黒百合達が助け出すまで、こっちで暴れて敵を表に誘き出す。
火の玉が空に上がれば作戦は終了。
後は無力化に入るだけらしい。
要するにこのまま暴れろ、という事か。

個人的にはこの作戦は賛成出来るものだと思う。
鬼達の中に溜まった天狗への怒りや鬱憤を晴らす、良い機会だと思うしな。
頭領足る者、下の者の事を考えてこそ真の頭領足りえる存在となる。
下で働く奴がいるからこそ、上が成り立つらしいからな。

……といっても基本騒ぎっ放しで仕事なんて無い様なもんだが。

俺は丸太をそのまま放り投げ、天狗どもを一気に潰す。
二匹程巻き込み、丸太は大きな音を立てて地に落ちた。

（……粗方片付いたか？）

俺の周りにいた天狗は殆ど地に伏している。
周りに気配も無いので、恐らく迎撃に出た天狗は全滅したんだろう。
呆気ない。
最強種族というのは所詮口だけか……

そう落胆していると、強い気配が此方に向かっているのを感じ取った。
先程の様な見せ掛けではなく本物、それも殺気だ。
しかしその姿は見えず、気配ばかりが此方に突進してくる。
そして一際強い殺気を感じ取り、俺が急いで振り向いたその時。
その殺気の正体は姿を現した。

「フッ！」

「なんとッ！？」

突然目の前に現れたのは短刀を突き出した女の天狗。
その顔には特徴的な黒い垂れ布が覆っていた。

（あの時の天狗かっ……！」）

俺は素早く相手の手首を取り、そのまま力を受け流して投げ飛ばした。
しかし女天狗は既に予想していたかの様にその力を利用。
空中に投げられた体を半回転させ、更に地面を蹴り、空中回転しながら着地した。
なんとも芸達者な事だ。
女天狗は手に持った小太刀を構え、此方を警戒しつつ声を発した。

「……やはり貴方、私の位置が分かるみたいですね」

どうやら先程の接触で分かったみたいだ。
これは中々期待出来るか……？

「大した事じゃない。貴様は殺気丸出し故に分かり易いからな」

「なるほど……”能力”ではなく”技術”ですか。厄介ですね……！」

彼女はそう言いながら飛び掛り、小太刀を振るう。
俺は体を後ろに逸らして反撃を加えるが、相手の後ろ回し蹴りが襲い掛かってきた為中断、
腕で受け止めて後ろに跳んだ。
しかし彼女はすぐさま距離を詰めて一閃、また一閃と小太刀を振り回す。
その軌道は洗練された見事な太刀筋で、避けるのも一苦労だ。
ただ振り回すだけとは訳が違う。

俺は相手が斜めに斬り込んだのを見計らい、敢えて相手の懐に飛び込み、
更に振り被る寸前の腕を、手首を掴んで阻止する。
相手は流石に驚いたのか、身を引こうと体を後ろへ動かす。
だが手首を掴まれている為身動ぎ程度しか出来ない様だ。

「ふんっ！」

すかさずその体に掌底を叩き込む。
女は体がくの字に折れ曲がって勢い良く吹っ飛ぶ。
恐らく威力を殺す事など出来ないだろう。
さっきまで俺が掴んでいたのだから。

「がはっ！？」

彼女は苦しそうな声と同時に木に叩き付けられる。
その衝撃で木も折れた。
幸い潰されはしなかったみたいだが……

女はふらふらと立ち上がり、此方をキッと睨み付ける。

「なんつー馬鹿力してんのよ！？」

「鬼だからな」

彼女の言葉に適当に返しとく。
本当の事だから仕方ない。
しかし女は納得できてないらしく、機嫌は直らない。
まぁ機嫌を取る気もないが。

それにしてもさっきとなんか感じが違うな。

……あっ、そうか。

「それ除いても有り得ないわよ！」

「……さっきと話し方変わってないか？」

「えっ……あっ！」

俺の指摘を聞いてか、いきなり驚愕の表情を浮かべる。
更に数秒後には何故か急に顔が真っ赤に染まった。
そして――

「わ、わ、忘れろおおぉぉーッ！！」

「のわっ！？」

突然斬りかかってきた。
俺は若干驚きながらもそれを避ける。
しかし斬撃は収まる所を知らず、次々と繰り出される。
しかも我武者羅ではなく、しっかりと冷静に狙ってくるのだから性質が悪い。

「なっ、何を忘れろと言うのだっ！？」

「があぁぁぁぁっ！！」

女にあるまじき奇声を上げながら小太刀を横に振るう。
俺は身を逸らしてそれをかわし、そのついでに蹴りを加える。
だが……

「何っ！？」

突然女の姿が消えた。
そしてその直後に背後から衝撃が伝わった。

「っ！？」

俺は直ぐに振り向くが、そこには既にいない。
そして次は肩を掴まれ、引き寄せられるのが分かった。

（拙い……！）

咄嗟に腕を掴み返し、片手で投げる。
鬼だからこそ出来る荒業。
こんな時に技術に拘る必要は無いだろう。
首を掻っ切られる直前だったのだから。

しかしそれでも投げた時、上を通り過ぎる僅かの間に右肩を斬られ

た様だ。
それも割と深い。
だがこれくらいなら戦闘に支障は無い。

女天狗は素早く此方に接近。
斬撃と蹴りの連携で此方を攻め立てる。
俺も負けじと合間を縫って反撃。
だが尽くかわされ、お返しと言わんばかりに次の攻撃が迫る。
姿を消す能力も併用してくる所為で相手の猛攻が若干防ぎ切れていない。
傷は増える一方だ。

（だが……面白いっ！！）

俺の中で何かが燃え上がるのが分かる。
これがイルミナの言っていた闘争本能という奴だろうか？
鬼は総じて戦う事が大好きだと言っていたが……なるほど。

（確かに楽しいかもしれん……なっ！！）

目の前に出現した女天狗に突きを繰り出して攻撃を中断させる。
更に追撃で突き二連、蹴り、そして上段からの踵落としと次々と攻撃した。
相手は少し顔を歪めながらも俺の攻撃をかわし切ってみせた。
こんな強敵……イルミナ以来だっ！

相手は能力を行使、右手側から小太刀で襲い掛かるが体を大袈裟に逸らして回避。
そのまま敵側の腕を振り回して牽制する。
だが相手は身を屈めて一歩前に踏み出した。
それと同時に――

サクッ

俺の横腹に刃を突き立てた。
しかし俺は相手の小太刀を握って動きを封じた。

「ッ！？　しまった！！」

「むんっ！！」

女の横っ腹に一発、蹴りを入れてやった。
敵はなんとか獲物を握っていない左手で蹴りを防ぐが、威力は殺し切れずに宙を舞う。
そしてそのまま地面に落ちた。

「あぐっ！」

相手は地面に衝突した衝撃で声を上げる。
それと同時に垂れ布が帽子と共に外れ、素顔が露になった。
しばらく痛みに悶えていたが、僅かな時間でよろよろと立ち上がり

始めた。
大した根性だ。
だが流石に痩せ我慢も出来ないみたいだな。
蹴りを受けた左腕は骨折して青くなっており、内臓が傷付いたのか口からは吐血。
相手の表情は非常に苦しげだ。
明らかに戦闘出来る状態ではない。
しかし――

「だというのにまだ戦るのか？」

戦う意思は潰えていない。
二度目だが、本当に大したものだ。
恐らく俺の問い掛けは無意味な物だろう。
だが敢えて訊いた。

「その体でまだ戦うのか？」

「当然よ……もう、雀の涙……程しかっ……ちか、らは残って……ないけど、
ゲホッゲホッ！　誇り、までは……失いたくない……もの……！」

女は小太刀を構え直し、此方に対峙する。
その構えはふらふらで頼りないが、しっかりとした意思は感じ取れた。

「誇りを守って死ぬのか？　それは愚かな事だぞ？」

「天狗として……じゃない……！　わ、私の……誇りよ！」

その黒い眼には明確に敵……俺の姿が映し出されている。
向けられるのは強い殺気という剣。

「……名は？」

「な、何……？」

「名を言え。俺は強い相手の名は覚える事にしている」

俺は普段、物忘れが激しい。
と言っても重要な事以外は頭に入らないだけだ。
だが仲間と、俺の認めた強き存在。
その誇り高き名だけは必ず覚える事にしている。
それは俺が戦友（とも）と認め、また戦り合う時まで覚えていたいが故だ。
だからこそ俺は名を訊く。
友として認めたが為、また戦いたいが為に。

彼女はそれを感じ取ったのか定かではないが、
ニッと笑みを浮かべ、其の名を名乗った。

「いい、わよ……！　聞き、なさい！　我が名は……射命丸真夜！　誇り高き……鴉天狗の娘よ……！！」

「名乗り直そう……我が名は鬼神、炎剋！　鬼を束ねる頭領なり！！」

それを合図に俺と相手は動き出した。
真夜は飛び込むと同時に刺突。
俺はそれを逸らしながら右拳を相手に叩きつける。
しかしそれは当たらず、代わりに俺の横っ面に回し蹴りが入った。

「ぐぬぅ！！」

俺は揺れる視界に耐えながらも足払いで反撃。
すぐに反撃が来ると考えていなかったのか、まんまと足を取られる真夜。
素早く追撃に入るが、彼女は突如姿を消す。
どうやら能力を使って避難した様だ。
とことん彼女にとって相性の良い能力らしい。

相手の能力は厄介だ。
消えたら視界で追う事はまず不可能。
気配を探る事が出来ても攻撃が通らない。
一種の無敵時間なのだ。
だが敵側からも発動中は攻撃できない様だ。
出来たら俺はとっくに殺られているだろうしな。

真夜は右斜め後方から襲撃。
俺は体を左に半回転させながら裏拳を打ち込む。
だが紙一重でかわされ、ついでとも言わんばかりに横一閃。
その一撃は頬を掠めて傷痕を残していく。

接戦。
そう言っても過言ではない暴力の応酬。
互いの攻撃は常にギリギリを掠め、言い様も無い緊張感が襲う。
だが、それすらも今の俺には興奮に変わる。
相手がどうかは分からないが、少なくとも俺はそう感じている。

もっと戦いたい！

殺し合いたい！

そんな感情が湧き上がるのだ。
恐らく抑えようとすれば簡単に抑えられる。
だが今はこの感覚に酔っていたい。
そんな気分だ。

真夜は一旦距離を取り、体勢を整える。
見る限り大分息が上がっているみたいだ。
……ま、俺も結構苦しいものだが。

俺は呼吸を整えながら相手を睨む。
どうやらあいつも落ち着いたらしい。
相手と視線が再び交差した時、俺と真夜はまた駆け出した。

しかしその瞬間。

「止まれ、下賤なる者よ！！」

邪魔が入った。
真夜も俺と同様に動きが止まっていた。
この愉しみに水を差すか……！

こいつは決闘中の暗黙の了解って奴を知らんのか？
怖いだけかもしれんが、他の天狗ですら手を出していないというのに。

その邪魔者は俺を見て鼻で笑う。
少し苛付いたので、俺も鼻で笑い返してやった。
すると憎たらしそうな顔で睨み出した。
俺も人の事は言えないが、幾らなんでも簡単に乗り過ぎだろ……

「ちっ、まぁいい。聞け、下等な鬼ども。我が名は天魔の波旬、貴様等を支配し頂へと昇る者だ」

支配だと？
馬鹿げた目標を掲げる奴は沢山いたが、ここまで来て公言する奴は初めて見る。
それに動きはまるで素人。
戦った事すら無いんじゃないかこいつ。

それに仮に支配出来てもこいつに付いて行こうと思う奴がいるか怪しい。
何時か絶対に反逆者が出るだろう。

「支配か……貴様程度の器で出来ると思うか？」

「ふん、我の器は貴様等程度では量る事すら敵わぬ」

ほぅ……大口叩くじゃないか。
実力の差が見極められないのか？
しかも今現在は天狗側に不利な状況だ。
部下はほぼ戦意喪失で戦えず、幹部も傷だらけ。
それに比べて俺達にはまだ俺以外の同族、そしてイルミナまでいる。
なのに何故今頃頭領が顔を出した？

俺はその余裕にはコイツの能力に関係があると見た。
どんな能力かは知らんが、この状況でこれ程の自信。
途轍もなく強大なのだろう。
妖力もそれなりに大きい様だしな。

だがコイツは真夜との真剣勝負を邪魔した。
その罪は非常に大きい。
なので当たり気味に殺気をぶつけて威圧してみる。

「やるなら相手になろう。貴様がどれだけ保つか分からんがな」

すると相手はビクッと反応する。
多分今の俺が怖いのだろう。
まともにこれだけの殺気を受けて涼しい顔していたのはイルミナくらいだからな。
しかしこれで怖がってるのを見ると、やはり戦闘経験は殆ど無いみたいだ。

だが波旬は持ち直したのか、直ぐに余裕の笑みを浮かべた。
それも先とは正反対の顔だ。
この気持ち悪いくらいの変化は何だ？
何か別に隠し玉でもあるのか？

俺はそこまで考えて最悪の事態を頭に思い浮かべる。

「クハハ、貴様等に我が力を披露してやっても良いが、残念ながらその
必要性は皆無だ。これを見るがいい！」

すると奴は自らの目の前に見覚えのある人物を投げ出した。
花の描かれた和装、そして長い黒髪。

「なん……だと？」

俺はそれを見て思わず言葉を漏らす。
なるほど……それならば相手の余裕も納得がいく。
気に食わんがな。

俺の反応を見た波旬は更に笑みを深める。
夢落を出したという事は言外に「これ以上抵抗するな」という事だろう。
だがまさか黒百合がこんなのに敗れるとは……

いや、もしかしたら護衛に仲間の鬼を付けて、先に本陣に返したのだろう。
彼女のことだ。
戦闘に向かないうえ、人質だった夢落を態々戦場に送る事はすまい。
だとすればコイツが偶然そこに居合わせた、としか考えられない。
こいつの頭がそこまで回るとは思えないしな。

だがしかし……

（やはりコイツは下種だったか）

奴の実力、態度、立ち振る舞いを見てなんとなく感付いてはいた。
そして先の発言と行動でそれは確定した。
俺は思わず歯を食いしばる。

「さて、鬼神よ。こいつを助けたければここで黙って死ぬが良い。
そうすれば
鬼も完全に戦意を喪失するだろうからな」

「クッ！」

その言葉の後、強烈な衝撃が伝わった。
恐らく殴られたのだろう。
何も出来ない俺にとってそれはどうでもいいが……

チッ！　卑怯者め。
この俺様がこの程度の雑魚にやられる事になるとはな。
だが手を出した瞬間、真夜の小太刀が夢落の首を落とす事になるだろう。
しかし真夜の表情は暗い。
勝負に水を差されたうえにこの仕打ち。
戦士にとっては耐え難い屈辱だろう。

「おっと！　そういえばそこの獣も手を出すなよ？　一対一の正々堂々とした
決闘なのだからな……クハハハハッ！」

天魔は一方的な暴力の最中に口を入れる。
恐らくイルミナが手を出そうとしたのだろう。
見れば悔しそうな表情で妖力の塊を霧散させている。

こうなれば支援も絶望的か……

イルミナはよくやってくれた。
あの作戦も上手くあいての意表を突けたし、まず俺達では思い付かなかっただろう。
天狗ですら混乱したのだ。
かなり上手くいったと言える。

だが運が悪かった。
最後の最後でツキに見放されたらしい。

天魔が錫杖を構える。
恐らくアレで頭部を一突きするのだろう。
俺は大人しく目を瞑った。

（……こうなるんだったら、もっと酒を飲んどくべきだったか）

そう遺言を残すと、少し遅れて天魔が錫杖を突き出した――

数秒待つ。
だが未だに痛みは襲ってこない。
意識もまだ残っている。

瞼の外がいやに明るい。
一体何事か……

俺はそう思ってゆっくりと瞼を持ち上げる。

（……これは！）

俺が真っ先に見たのは金色の光。

優しく、温かいその光は俺を包んでおり、妙な安心感を与えてくれる。

そして次に見たのは――

天に舞う、白き衣を纏った少女。

肩から流れる長い髪は雪の様な白銀で染まっており、その顔立ちは少しの幼さが残る物の
俺でも美しいと感じるくらいだ。
その髪の上には被り物の様なもの。
そして白い法衣の様な衣服は彼女にぴたりと合っており、すらりと伸びる白い足は
まるで白磁のようだ。

彼女からは金色の光が漏れ出しており、その形はまるで金色の翼である。
空から注ぐその光は神々しく、彼女をより一層神秘的に飾り立てる。

そして俺は彼女の事を知っている。
彼女は二度、その姿を晒した事がある。
それは俺が妖怪の山に連れて行く前、そして山に入った後の一騒動。

そう彼女は――

「イル……ミナ……？」

あの小さな獣。
イルミナその人なのだ。

俺は知らぬ間に見惚れていた。
俺には上手く形容出来ない。
だが敢えて言わせて貰うならば神秘的だったと言えよう。

ここにいる者は皆、彼女に釘付けとなっていた。
女も男も、虫も動物もだ。

誰もが見惚れ、動こうとしない。
だがその中で動く者がいた。

「美しい……あれこそ我が妻に相応しいといえよう……」

先程まで下種な行いをしていた天魔。
彼はその美しさに惹かれ、自らの欲望を満たす為に近付こうとしていた。
だが俺は突如、自分の中の本能が警鐘を鳴らすのに気付いた。

（何だ……この違和感は……）

温かな気配に混じる冷たい悪寒。
それはまるで絶望を象徴するかの様な絶対零度。
そんな気配を感じつつあった。

彼女には手を出してはいけない。

そう結論付けた時、変化が起こった。

「……」

無言で掌を天魔に向ける。
その瞬間に先まで感じていた悪寒が顕著になり、俺を震え上がらせ

た。
そしてその瞬間――

「ぎゃあああぁぁっ！？」

衝撃。

突然衝撃波が天魔を襲い、彼を地へと叩き落す。
まるで金色の風だが、そこに秘められた力は相手を傷付けるには充分過ぎた。

大地へと落とされ、体をズタズタにされた天魔は痛みを堪えて立ち上がった。
想像以上に傷が深いのか、動きが鈍い。
しかしその目には憎悪がありありと映し出されており、彼の性格をそのまま象徴していた。

「くっ！　折角妾にしてやろうと思ったものを……！　仕方ない、傷物になるが
多少なりとも痛い目を見て貰おう！！」

彼は翼を広げて錫杖を構える。
その先端には妖力が集まり、妖しい赤紫へと色を変えていた。

「我の能力、遮断する程度の能力……篤と味わえっ！！」

天魔は突きの構えでイルミナ目掛けて飛び出す。
あの技は俺が喰らったらまず危険だろう。
それくらいの物だと本能で分かる。

だが……

それ以上に彼女の方が危険だと、俺は感じていた。

彼女は静かに口を開く。
その眼は冷たく、汚い物を見ている様な目をしていた。

「死の運命を迎えし者よ、己に刻まれし罪の刻印の下に断罪する」

その金色の瞳に感情は無く、ただただ言葉を紡ぐ。
天魔が速度を上げて突撃してくるが、それにすら気に掛けていない。
いや、彼は既に終わっていたのかもしれない。

「紫炎の一突きいいぃぃっ！！」

「罪深き天の狗よ、汝の犯したその重き罪を背負い、悔い嘆きながら――」

彼女の眼前に錫杖の先が突き出される。
だがそれよりも彼への異変の方が早かった。

「――滅せよ」

その瞬間に天魔の動きが完全に止まった。
否、止められた。
よくよく見てみると、彼の手足に光で出来た枷の様な物が付いていた。
そして彼の背後には光り輝く十字架。
枷に付いた鎖はその十字架から伸びていた。
天魔は必死な顔でもがこうとしているみたいだが、ピクリとも動かない。

やがて枷が一段と明るく光り輝き、鎖を巻き取る様な音と共に十字架へと引き摺られる。
そして彼は十字架へと磔られた。
十字架自体に力が篭っているらしく、天魔はその力に焼かれていた。
悲鳴を上げる天魔。
翼は爛れ、焼け落ちていく……

そんな中、彼の周りには同じく光で作られた剣が取り囲んでいた。
大体十三本くらいだろうか？
それらの切っ先は全て天魔に向けられていた。

そしてイルミナが腕を振ると一瞬だけ発光し――

「Ｅｘｅｃｕｔｉｏｎ（エクスキューション）（処刑）」

その一言と共に一斉に突き刺さった。
天魔は口から大量の血を吐き出す。
真夜を見れば、その余りの光景に目を背けて蒼褪めていた。
確かに、俺から見ても刺激的な光景ではあるな。

だがそれでは終わらない。
全ての剣が刺さり、そのままにしておいても死に絶えるであろう傷を負った天魔。
だが剣の光が膨張、熱を帯び始める。
痛覚がまだ生きているのか、再び苦しみ出す天魔。

そして一際輝いたかと思うと……

ドガアアァァアンッ！！

耳を掻き回される様な激しい爆発音。
その爆発は周囲の木々を焼き払い、余波で草木を吹き飛ばす。

「ぐぅ……っ！」

余りの眩しさに微かに瞼を閉じてしまうが、俺は爆発の余波に耐え

ながら
しっかりとそれを見届ける。
視界に浮かぶ巨大な光球、それは小さな太陽の様にも見えた。

数分ほど続くと、そこには何も無い青空。
そして無傷のイルミナが残っていた。
当然ながら天魔の姿は無い。
恐らく跡形も無く消え去ったのだろう。
周りの木々は薙ぎ倒されており、チラホラと仲間の鬼や天狗が見える。
しかし気絶している者が多いらしく、起き上がる気配は無い。
だが真夜と夢落も無事の様だ。

中央は大きく地面が抉れ、木は殆ど炭と化した。
更には余波で殆どが焼け落ち、見晴らしが良くなってしまっている。
これを唯の一個人がやったというのか……？

「なんという力だ……！」

俺は素直に戦慄する。
勝負を挑んだあの時、彼女が手加減してくれなければ死んでいただろう。
もし彼女があの時本気を出していたらと思うとぞっとする。

そんな事を考えているうちに、イルミナが此方を見ているのに気付いた。

あの目線からなら確実に俺を見ているだろう。
もしかして次の標的は……

恐ろしい方向に思考が偏ってしまったが、仲間をそんな風に見るのは失礼だと振り払う。
第一彼女は俺を助けてくれたんじゃないか？
ならばこんな考えは彼女を信用していないのと同じだ。

そう結論付けると同時にイルミナがホッとした様な表情を浮かべた。
かと思うと突然彼女から流れていた光が途切れ、彼女自身も落下を始めた。
俺は慌てて走り出し、落ちてきた彼女を抱き止めた。
その体重は見た目相応に軽く、まるで羽毛でも抱えている様だった。
俺は小さな体を抱えながら少女の寝顔を見る。

まるで何処かのお姫様の様な可愛らしい寝顔。
この少女に何故こんな力が眠っているのだろうか……

「イルミナ……お前は一体……」

日が沈む。
俺は彼方へと消え行く太陽を眺め、そう呟いた。

其の七　「天狗隠し」後（後書き）

私メリィさん、今週からテスト期間なの。

面倒臭いですねぇ……

小説でも進めようかしら。

皆さん御機嫌よう、早くもやる気の無いメリィです。

神霊廟、3面以降進みません。

最近東方やってなかったからかなぁ……

腕の低下を自覚しました。

さて、今回で天狗隠し編は最後となります。

という事で来ました！（→）　猫さん真の姿（←）

とまぁこれは後回しにして。

この回は炎剋さん視点で進んでます。

あの時彼が何をやってたか、というのです。

まぁ喧嘩してましたが（（

彼はここで真夜さんと戦ってたので、その詳しい描写を書いてみました。

そして戦闘狂である事を自覚。

うん、今更だね。

そして真夜さんはまさかの文ちゃんの先祖でした！

二面性もこの頃から！

容姿の描写は……まぁ次回に回すかな。

当初は出す予定が無かったキャラだったのですが、雑魚Ａとかだけでは

物足りない↓ならどうする？↓よし、原作キャラの先祖書こう。
となって生誕、至極どうでも良いですね、失礼。

さてさて。
漸く猫さんがチート化しました。
やっぱチートなら気持ち良いくらいに強くしたいよね！
ちなみに能力も強くします。
やるなら徹底的に、それが人形クオリティ（キリッ

ちなみに容姿はちょいと分かり難いと思ったら、
服装と色がちょっと違うメルブラの白レンを想像して頂けたら良いと思います。

今回はここまでに……と言いたい所ですが、後一つ。
このお話で実はストックが切れました。
なので次回からは更新スピードが落ちると思いますので、
予めご了承下さい。

それでは長々とすみません。
ではまた次回お会いしましょう～ノ

其の八　「突然の展開と困惑」（前書き）

随分お待たせしました。
それではごゆっくりしていってね！

其の八　「突然の展開と困惑」

「目覚めなさい、我が子よ」

俺は突如聞こえてきた女性の声で目を覚ました。

……ん？
何だこりゃ？
一体どうなってんだ？

目を覚ませば別空間。
さっきまでいた森ではなく、真っ白な空間。
そして目の前には黄金の光を放つ女性。
年齢は……大体２０前半ってとこか。

何が起こって、ここが何処なのか知らんが……
目覚めなさいって言われたんなら目覚めてしんぜよう。

「やっと……貴女は本来の姿を得ました」

本来の姿？
猫の姿が俺の体じゃないのか？

「あれは貴女の体が準備出来るまでも仮の器……そして貴女の体は既に

現の世界に顕在しています」

なるほど。

つまり目が覚めたら新しい体になってますよって事か。

ん～……でも猫ボデーも案外気に入ってるんだよなぁ～。

怠ける口実にもなるし。

「……戻ろうと思えばいつでもあの姿へと変化する事は出来ますよ」

ならいっか。

「それともう一つ、貴女に伝えておく事があります」

伝えておく事？

「そう、貴女の潜在能力……貴女の底に眠る力です」

なにその王道。

親友のピンチにパワーアップって……

ま、いいや。

んで……その能力って何なのさ？

というかそもそもあんたは誰なんだよ。

「では伝えます。イルミナ、貴女の能力は――」

無視ですか、そうですか。

○●○●○●○●

「う、んん……」

俺はそれを聞いて目を覚ました。
一体何だったんだ？
とても夢とは思えないんだが……

俺は呻き声を上げながらも、冷たい床の感触で意識が覚醒した事を自覚する。
瞼を開くと、そこにはなんか重っ苦しい雰囲気を纏った何時もの面子が

俺を覗き込んでいた。

まだクラクラする頭に気を遣いながらゆっくりと起き上がると、
突然誰かが抱き付いてきた。
俺は唐突の出来事に驚きながらも、誰が抱き付いてきたのか確認する。
それはなんと……

「む、むーちゃん……？」

夢落だった。
彼女は俺をただただ黙って俺を抱き締める。
その顔は俺からでは見る事が出来ず、オロオロする程度しか出来ない。

「どっ、どうしたんだ？　突然……」

「良かった……ホンマに良かった……！」

俺はそこまで言って言葉を飲み込んだ。
時々聞こえてくる嗚咽から、泣いているのだというのが嫌でも分かる。

（はぁ……泣かせちまったか……）

罪な男。
なんて巫山戯やしない。
親父からは女を泣かす様な男になるなって昔から言われていたからな。
んまぁ、もうその親父には会えないが。

さて。
そういえば俺はさっきから違和感無くやり取りしてるけど、ちょっと待て。
果たして俺に抱き締めるほどの図体があっただろうか？
俺は何処まで行っても普通……よりちょっと小さい猫で、異様な大きさの
グレイトな猫ではない。
なのでこういう場面なら”抱きつく”ではなく”抱え込む”形になるはずだ。
だが抱え込まれる際の浮遊感は全く無く、寧ろ抱きつかれている体があるのが実感できる。

そこで俺は念の為、自分の”前足”を確認する。
猫であるならそこには白いふさふさな前足がある筈だからな。
しかし――

（そこにあったのは白くて綺麗な五本指でした、と）

毛の無い綺麗な白い手。
その形は明らかに俺が２０年生きてきて見慣れた人間の手だ。
あ、勿論猫になる前の話な。

今も合わせると３０年くらいだから。

とりあえず今分かった事は……

人化しているって事か。

俺は夢落を落ち着かせる為に背中をポンポンと優しく叩くと、

彼女に声を掛ける。

「心配掛けたな……俺は帰ってきたぜ」

「うぅ……ぐすっ、むーちゃぁん……っ」

とりあえず、暫くは彼女に胸を貸すとしよう。

俺は彼女が落ち着くまで、じっと慰める事にした。

少女沈静中……

「もう大丈夫か？」

「うん、ごめんなー」

まだ目を真っ赤に腫らしているが、漸く落ち着いたらしい夢落。
俺が倒れたのが余程堪えたみたいだ。
自分が攫われなければこうならなかった、みたいな感じだな。
まぁ気にしていない。
強いて言うなら彼女に人間不信（妖怪不信？）の症状が現れなければ良いが……

彼女が謝罪の言葉を口にすると、頃合いを見計らって炎剋が声を掛けてきた。

「イルミナ、世話を掛けたな……」

「気にすんな、俺が勝手に倒れただけだよ」

俺はとりあえず自分に事実を突きつける。
いや、ホントに何もやってない。

だって俺って役に立って無くね？
結局幹部の相手をしてたのは炎剋だし、黒百合は救出だし。
もしかして俺って雑魚天狗数体倒しただけで殆ど何もやってない？
作戦だって人間とか、天狗なら簡単に思い付きそうな作戦だし……

だが炎剋はここで予想外の発言をしてくれた。

「いや、お前に助けられた。それにあれだけの力を行使したんだ。倒れるのも無理はない」

「……へ？」

俺が炎剋を助けた？
寧ろ俺が助けられた様な気がするんだが……
こいつが天魔倒さなきゃ皆死んでたろうし。

「いや、何もやってないから。どちらかと言うと助けられた方だから」

「謙遜するな。貴様は天魔を仕留めてみせたのだからな」

はぁっ！？
俺が天魔を仕留めた？
何を言っとるのかね旦那さん。
俺は何もやっとらせんですよ？

こ、これは……説明してもらう必要がありそうだ。
と考えて俺は黒百合に訊いてみた。
彼女なら根はしっかりしてるからちゃんと説明してくれるはず！

「という事で、彼が教えてくれないので黒百合さんお願いします！」

「という事で、が何がかは知らないけど、知ってる範囲でなら教えてあげるよ」

流石黒百合！
頼りになるお姉さんだ。

「んで、何が起こったんだ？」

「そうだねぇ……先ずはあたしがアンタ達の所へ急いでいた時だね――」

俺は彼女の話を静かに聞く。
黒百合の話によるとこうだ。

夢落が天魔によって再び攫われた事を知った黒百合は、急いで俺達のいる戦場へと走った。
しかし途中でいきなり向かう先が金色の光で包まれ、戦場の空気が変わった。
何事かと思い駆けてみれば、光を纏う人形の何かが宙に浮いていたという。
その様子はまるで伝承に聞く天使が舞い降りたかの様で、大層神秘的だったそうだ。
何その神話的状態。

んんっ！　話が逸れたな。

黒百合は早くに我を取り戻し、周囲を確認。

一人の鴉天狗が夢落に小太刀を突き付けているのを見つける。
彼女は真っ先に彼女に近付き、声を掛けてら首をホールド。
それから解放の為に交渉に入ったそうな。
しかしその瞬間に膨大な力を彼女は感じ取った。
ホールド中の天狗も感じたらしく、二人は夢落を連れて急ぎ足でそこから離れたらしい。
そして案の定、天魔はボロクソにされた挙句強烈な爆発で消滅。
その余波で森の周囲は消し飛び、他の天狗や鬼、自分達さえも余波に巻き込まれたそうだ。
え？　人類最後の日ですかそれは？
まぁ突っ込みはともかくとして、巻き込まれた二人は木を盾に使った事により
なんとか助かった。
けど余波によるダメージと、今までの戦いで使った妖力消費の問題で動けなくなって結局救助待ちになったみたいだが……

とまぁそんな所か。
その後炎剋が抱えてる人型が俺だと聞いて大層驚いたそうだ。
ま、そら驚くわな。
俺も驚いた。

「そうか……そんな事がねぇ……」

「さしものあたしも、これだけは予想できなかったね」

「黒百合ってそんな勘良かったか？」

「細かい事は気にしなさんな」

彼女はからからと笑い声を上げる。
戦争みたいな戦いの後なのに元気な事で……

黒百合は座る姿勢を変え、胡坐を掻く。
こらこら、女の子がそんな姿勢取っちゃ駄目でしょう。
何故か大した興奮も無いけど。
……過去の交友関係の所為かね。

「イルちゃん、そういや今更なんやけど……」

「ん？　どうしたんだ？　いきなり改まって」

俺は突然発言した夢落が突然口篭ったのが気になって尋ねる。
だが彼女が口に出したのは、俺の根本から覆す様な衝撃的な言葉でした。

「イルちゃんって女やったん？　てっきり男かと思ったえー」

「……えっ」

○●○●○●○●○

「嘘……だろ……？」

俺は水面に映る自分の姿を見て絶句する。
水面に映るのは一人の少女。
ルビーの様な紅い瞳、白磁の如き白い肌、そして美しいとも可愛らしいとも
取れる精巧な顔立ち。
長い白銀の髪は光が当たると美しく輝き、その魅力を一層引き立てる。

背は低め、体型はスレンダーな典型的少女体型。
服装は頭に白のフリル付きヘアバンド、身に纏ってるのは白いコートか？
その上には肩掛け、中は……黒のフリルブラウスだな。
下はどうやらスカートらしい、妙にスースーする。
色は上と同じ黒の様だ。

ここまで聞いても特に挿し当たった問題は無い。
だがしかし、一つ問題がある。
それは――

この顔が水面に映った俺の顔だという事。

何が問題かって？

そりゃお前、”俺”が女の子ってのが問題だろう。
俺は元を辿れば男だ。
それが女になったってだけで、どれだけ過ごし方が変わると思う？
答えは根本から、だ。
そもそも性別が違う故に生理、思考、当然ながら行動も違ってくる。

整理に関しては言わずもがな、男には無い月の物ってのがある。
当然俺はその時の対応を知らないのでどうしようもない。
しかもトイレに関しても気を付けなければならない。
今までの通りにやってたら確実に大変な事になる。

思考に関しても具体的な例を挙げるなら、
まず男を好きになれない。
だって元が男だぜ？　そんなホモ紛いな事が出来るとお思いですか？

そして行動、これは精神がそのままだから男と全く変わりがない。
これは一般的な女性しか知らない者には大変な違和感を与えるだろう。
幸いこの種族、妖怪（？）には変わり者が多いので大して窮屈な思いはしないはず。
現代の人間だったら恐ろしい事この上ないが……

「どうしてこうなった……」

現在の姿勢を文字で現すならｏｒｚ。
ホントもうどうしようかねコレ？
こんなラノベみたいな展開予想もしてなかったぜ。
猫になった時点で変身イベントは終わったかと思いきやまさかの三段変身。
但し第一形態（男）には戻れない。

猫になった時も随分驚いたものだが、今回もまた驚かせられた。
というか猫の体に慣れて数年って所でまた人間、しかも女になるってなんてイジメ？
また慣れる作業から入らなきゃならんのか？
また普段とは違う所に戸惑わなきゃならんのか？

俺は小さく溜息を吐きながら、再びカクンと項垂れる。
これからの労力を考えるとしんど過ぎて首吊りそうだ。
慣れればなんて事なくなるだろうが、慣れるまでがなぁ……

「どうすりゃ良いんだよ……俺は」

だって今更女の子関連の事訊くなんて無理だろ。
恥ずかしい、めっちゃ恥ずかしい。
というかトイレとかどうしよう……

それに彼らにはどう説明すれば良いんだ？
まさか「実は自分が女だったなんて知りませんでした☆テペペロ」とか言う訳にも行くまいよ。

あーマジでどうしよう。
勇気を出して言ってみる？
いやいやいや無理無理無理、後の反応が怖い。
致命的なセンスで笑いを取ろうとして観客全員が白けるくらい怖い。
いや、俺お笑い芸人じゃないけどね？
でもこれって結構怖くね？
ってそーじゃなくてー！

思考の渦に飲まれ、妙なスパイラルに陥っていく俺。
しかしそこで救世主が現れる。
それは――

「普通にしていれば良かろう？」

意外な事に炎剋だった。

@炎剋Ｓｉｄｅ

早計だった。
何故あの様な世迷言を口走ったのだ俺は！

俺は今、仲間である一人の少女を探していた。
その名はイルミナ。
俺達の恩人であり、大切な仲間だ。
何故こうなっているのか、それは少しだけ時を遡る事となる。

～～数刻前～～

黒百合の説明が丁度終わり、雑談へと映った頃だった。

「イルちゃん、そういや今更なんやけど……イルちゃんって女やったん？
てっきり男かと思ったえー」

「えっ」

復活した夢落の言葉に目を丸くするイルミナ。
彼女は気絶していたが為にあの光景を見ていない。
故にその時はイルミナが女だという事実を知らなかったのだ。
まぁ彼女を連れてきたら、一目でイルミナであると気付いたのだが

……

だがイルミナは男だと思われていた事など知らないので、これは結構傷付くだろう。
早急に補填してやる必要があるな。
俺はそう考えて口に出す事にした。

「夢落、そう言ってやるな。前とて女としての面影があったろう？
それに
あの時の光景は正に天使の様だった、魅力としては充分だ」

グサッ、グサグサッ！

何かが突き刺さる様な音が聞こえたが、恐らく空耳だろう。
項垂れているのは多分嬉しいからだ。
ほら、そういう顔を見られたくない奴もいるからな。
多分それだ。

すると珍しく夢落が呆れ顔で溜息を吐いた。

「ほのちん、あの時が何か知らんけどそれ全然慰めになっとらへんえ？」

む、そうか？
我ながら完璧な慰めだったと思ったのだが……

「ま、まぁなんだ、とりあえずこの先は安泰だろうな。なんせイルミナ
がいるのだ、そう易々と狙われる事も無くなるだろう」

俺は話題転換の為、あの時に確認した彼女の力を話題に出した。
だが今思えばそれが失敗だったのだろう。

「悪い……少し一人にさせてくれ」

「あ？　あぁ、だが余り遠くには行くなよ？」

「……あっ！　イルちゃん、待って！」

イルミナはそう言い残すと、森の中へと消えていった。
夢落が引き止めようとするも、彼女は構わず進んでいってしまった。
俺は若干疑問を感じながら、多分大丈夫だろうと考えた。
しかし夢落はそうは思ってなかったらしい。

「ほのちん！　今のは酷いえ！？」

「な、何がだ？　何か拙い事でも言ったか？」

普段大声を出さない夢落が俺に怒鳴り、思わず後退ってしまう。

「イルちゃん、何で姿隠しとったか分からんの？」

「……何？」

俺は彼女の言葉で漸く自らの過ちに気付く事が出来た。

アイツはそういえば極端に自分の力を使うのを躊躇った。
俺との最初の接触の時もそうだし、黒百合達に力を見せる様に促された時も
大分渋っていた。
それに加えて人の姿ではなく、敢えてあの獣の姿を取っていた。
となれば彼女が躊躇ったのはそれが嫌だったからに他ならない。

そして、彼女の力が露見した時。
その時にイルミナが最も恐れる事態とは？
無論、俺達の力ではない。

答えは簡単だ。
信じていた友から恐れられ、敬遠される事。
そして友から道具として扱われる事である。

強い力を持つ者は畏怖と尊敬の眼差しで見られる事がある。
そして逆にその者を利用し、自らが優位に立つ為の切り札として
関係を持とうとする輩も出てくる。

信じていた者にそんな扱いを受ければ誰だって嫌だろう。
俺だってそんなの真っ平御免だ。
それを俺って奴は……！

「悪い、直ぐに連れ戻してくる」

「……傷つけちゃあかんよ？」

「分かっている……！」

そうして俺は走り出した。
姿を晦ました唯一無二の友を追いかける為に……

～～戻って現在～～

という訳だ。
全く、俺はここの頭だというのに……そしてそれ以前に彼女の友だというのに
なんという失態だ！

俺は自分に罵声を浴びせながらも、森の中を走り抜けて彼女を探す。
彼女の居そうな場所は粗方探したが、中々見つけられない。
後他にイルミナが居そうな場所は……！

そう考え出そうとした時だった。

「う――だろ――？」

俺の耳に聞き覚えのある声が入ってきた。
これは明らかに彼女の声だ。
しかしその声は何処か震えている様に感じた。

俺は声のした方へそっと近付き、草陰から覗き込む。
そこには綺麗な湖が広がっており、その傍らに彼女はいた。
イルミナは湖を覗き込むように佇んでおり、その光景は一種の芸術性もあると言えよう。
しかしその顔は深い哀しみに満ちていた。

「どうして、こうなった……」

彼女は独り呟く。
俺はその言葉にはどんな意味が込められているのだろうか？
……いや、分かりきっている。

何故姿が露見してしまったのか。

何故こんな事態に陥ったのか。

何故、友にこの様な扱いを受けたのか……

イルミナは今、非常に辛い思いをしているはずだ。
信用していた友に武器と同じ様と言われた様なものなのだ。
俺ならば即行殴り倒している。

だが彼女は優しい。
優しいが故に、この様に苦悩してしまう。

そして彼女にこの様な思いをさせてしまったのは……他ならぬ俺だ。
イルミナは俺を友だと言ってくれた。
初見で襲い掛かったにも関わらず、だ。

俺はその時、彼女の優しさと心の強さを思い知った。
だが肝心な部分は見えていなかった。
心の何処かでイルミナの事を偶像として祭り上げていたのかもしれない。
彼女の心にある脆い部分、それに気付けなかった。

彼女はいくら強くとも、いくら規格外の力を持っていようと、
その心はちゃんと存在するのだ。
褒められれば照れるし、罵声を浴びせれば哀しむし、嫌な事をされれば当然怒る。
分かっていた。
分かっていたはずなのに、気付けなかった。

「どうすりゃ良いんだよ……俺は」

はっきりと聞こえたその言葉は、彼女が初めて見せた迷い。

そして弱い部分だった。

彼女は恐らく、昔は仲間もいたのだろう。
だが力を持った途端に他からは避けられた。
権力が欲しくてにじり寄ってくる厭らしい連中も近付いてきた。
だからこそその姿を隠した。
見付からぬ様に、自分だと分からない様に……

そうでなければあの姿に良い点などない。
今まで使ってきた体とは当然違うだろうし、その小柄さ故に力も無い。
自らの力を封じなければならない状況で、それはどれだけ大変な事だっただろうか。

だが彼女は耐え伸びた。
ずっと独りで耐えてきたのだ。
そこに俺達が現れた、そして再び友という存在を持つ事となった。
俺が友となった経緯は後者の厭らしい連中に似通っているが、途中でそんな事
どうでも良くなったからか、友として付き合ってくれる様になった。

俺も孤独だった。
イルミナが現れなければ今でも孤独だったであろう。
だからこそ、今度は俺から彼女に手を差し伸べよう。

「普通にしていれば良かろう？」

「……えっ？」

彼女は驚いた様に此方に振り向いた。
俺がここに来るとは思わなかったのだろう。
だがそれに構わず、俺は言葉を続けた。

「どんな力があろうと、どんな見た目をしていようと、それはお前なんだ。
ならば胸を張ってどっしり構えていれば良い」

俺の言葉にイルミナは少し顔を上げたが、また俯いてしまう。

「けど……今までとは何もかもが違い過ぎる（主に性別が）。それに俺はそこまで
大きな存在じゃない（身長的な意味で）」

彼女の声は少し暗く、その状況を悲観している様に見える。
だが俺は知っている。
そう言って今まで俺達の事を何度救ってくれたのか。
どれだけ優しい妖怪なのかを。

「違わんさ。お前は姿が変わって……いや、戻ってが正しいか。
それで自分の意思を捨てたのか？」

「……いや、捨てちゃいないさ（あれ？　なんか変じゃね？）」

「ならお前はお前、姿が変わった所でイルミナという一個人である事に変わりは無い。
そうじゃないのか？　我が友よ」

「……そう、だよな（ま、いっか。多分気の所為だろう）」

彼女の顔に再び気力が戻ってくる。
どうやら気を取り直してくれたらしい。
俺はそれを確認すると膝を折り、額を地に付けて謝罪の意を示す。

「それと、すまなかった。考え無しに言葉を吐いた俺が悪かった…
…許してくれ」

イルミナはキョトンとした表情になり硬直する。
少し見えたが、可愛らしいと思ったのは秘密だ。
彼女は膝を着き、ぺたりと座り込む。

「顔を上げてくれ、炎剋」

俺はイルミナの言う通りに顔を上げた。
すると彼女は――

「あんたの言うとおりだよ……ありがとう、炎剋」

花が咲いたかの様な笑顔でそう言った。
それはそれは可愛らしい笑顔だったと言っておこう。

――俺が赤面してしまう程に。

○●○●○●○●

「という訳ですまねぇな。迷惑掛けた」

「ええよ～。イルちゃんが帰ってきただけでも万々歳や」

「そうそう、元はと言えばあたし達の総大将がやらかした事だし」

わいやわいやと賑やかな洞窟内。
少し女の比率が高い。というか俺以外女しかいねぇ。
何だろうか、俺の住処なのに何故か肩身が狭く感じられるのは気の所為か？

俺は杯を傾けて口一杯に酒を流し込む。

（ふぅ……やはり動いた後は酒が美味いな）

月が杯に乗る様に持ち上げる。
このお酒はまた黒百合が持ってきてるらしいが、一体どうやって持ってきているのだ？
そんな疑問を持ちながら、また酒に口を付ける。
うむ、やはり良い味だ。

あの後だが、彼女は山に戻ってきてくれた。
俺の拙い説得がどれほどの効果を成したかは知らないが、親友の帰りを、
仲間の帰りを皆、心から喜んだ。
そして黒百合と夢落はいの一番に俺達を迎え、夢落に至ってはイルミナへ真っ先に
飛び付いたりした。
イルミナが必死に助けを求めていたが、偶には好きにさせてやっても良いだろうと
判断して放置した。
……決して助けるのが面倒だった訳ではない。

しかし……ここ最近で様々な事があった。
天狗達との騒動にイルミナの真の姿が露見した事。
特に後者はある程度疑問に感じていたとはいえ、それ以上の力を持っていた事には
本当に驚いた。

苦戦は必至であろうと予想していた天魔を瞬時に葬ったのだから。
まぁどちらも解決済みの騒動ではある。

天狗達とはあの戦いの後に和解、彼等は此方の山に移り住んだ。
何故かと言えば、イルミナの攻撃で彼等の住処が失われた事に他ならない。
あちらに責があるとはいえ、住む場所が無ければ人間達に襲撃された時に
その無防備な姿を晒す事となってしまう。
寝込みを襲われればいくら人より強き妖怪でも簡単に退治されてしまうだろう。
イルミナ曰く「罠、不意討ち、騙まし討ちは戦の常套手段」らしいからな。

そんな訳で彼等は同じ山の仲間となった。
一応他の者と同じくらいの権利を有してはいるが、一部を除いて殆どの奴は
腰が異様に低く、まるで小間使いの様な状態になっている。
天魔がいないとこんなものなのだろうか？　わからん。
とりあえず早急に天狗内で頭に立つ者を決めねばならないだろう。
いくらなんでも不憫だ。

イルミナの方は今後も友人として付き合っていくという事で帰結。
彼女の懐の広さには感服である。
これがイルミナの人気が高い理由なのかもしれんな……
他の鬼は俺を慕ってはいるが、それ以上に彼女に信を置いている。
しかしその理由もこれなら納得できるというもの。

（あいつには負けてばっかだな……）

初めの戦いで負け、論戦で負け、人望でも負ける。
彼女はそんな事は無いと言うが、謙遜である事は容易に分かる。
だが……

（だからと言って、負けてばかりというのは性に合わん！）

何時かは必ず追い付いてみせる。
そして彼女に一言「強くなった」と言わせてみせよう。
それが俺の目標。
俺を救ったイルミナへの最大の恩返しになるであろう。

俺は新たに酒を注ぎ足し、また月に向かって杯を持ち上げ、
一人静かにそっと呟く。

「乾杯……ってな」

そうして俺は決意を改め、それを酒と共に一気に流し込んだのだった。

其の八　「突然の展開と困惑」（後書き）

私メリィさん、今貴方の後ろｎ

猫「フシャー！（笑）」

ひゃあぁ！？ごめんなさいっ！！

え、えー……ゴホン。
という事で猫さんに怒られながら登場。
どうもご無沙汰しております、メリィです。
文化祭は随分前に終わってたのですが、小説の方に手間取ってしまいました；；
なんというか……所謂スランプって奴ですかね？
思い通りに展開が描けない状態になってました。
なので今回はちょいとできる時と出来ない時がごっちゃになって微妙な出来になってるかもしれませぬ。
と先に言い訳しておく、我は天才か（（

本当は今回で能力出すつもりだったんだけどなぁ……
どこで何を間違ったのやら。
とりあえず次回は番外編か、通常通り話数に沿って話しを作る予定。

……さて、毎度ながら長くなってしまいますね。
それでは今回はこの辺にしておきましょう。
それではそれではノシ

其の九　「天狗と猫」（前書き）

今年は欲しいゲームが沢山で目移りがヤバイ。
しかしお人形さんはなんとか耐え、期末考査に向けて頑張るのであった……

……特に意味の無い心境報告です。
それでは本編どうぞ。

其の九　「天狗と猫」

@真夜Ｓｉｄｅ

「はぁ……」

私は森の中を歩きながら、溜息を零す。
最近はツイてない。
どうにも私から運という運が逃げ出してしまったかの様な感覚だ。

射命丸真夜。
それが私の名前。
これでも天狗の中では強い部類で、鴉天狗としては大変珍しくも天魔に
側近として選ばれた実力者。
通常は強力な能力覚醒者に与えられる地位だが、私は能力を使いこなし、
実力だけで側近まで上り詰めた例外だ。
それ故に他の天狗からは尊敬の眼差しを集め、能力が強いのにその座に付けない
大天狗達からは嫉妬の感情を受けた。

と言ってもそれは既に過去の物。
側近になってから天魔の黒い噂を知り、実際に目撃してから忠誠心

は瞬く間に無くなった。
私は側近となった事を後悔し、負の感情を受け続けて段々参ってきていた。
そんな時に鬼の一件だ。
相容れぬ互いの種族がいがみ合い、遂に戦争へと発展した。
その戦争によって天魔は消滅。
天狗達は鬼の山に吸収される形となり、その戦争は幕を閉じた。

そこからだ。

鬼はとても気の良い連中だ。
約束は必ず違えず意地でも守り通し、仲間となった者にはトコトン良くしてくれる。
だが問題は彼等の飲み物だった。
お酒……と言ったっけ？
あの飲み物を飲むと体がポカポカし出して正常に物事が考えられなくなり、
尚且つ普段は晒さない様な醜態まで晒してしまう。
あの恐怖の飲み物を鬼は宴の席で執拗に勧めてくるのだ。しかも樽で。

それだけじゃない。
山の総大将だ。
だがあの鬼神の事ではない。

イルミナ……確かそう呼ばれていた。
実質山を取り締まっているのは彼女だろう。
天魔を反撃の機会すら与えずに滅す程の力を有し、尚且つ心優しい理想の総大将。
我々天狗を欺く程の智将であり、同時に数多を滅ぼす戦神でもある。

彼女の魅力に惹きつけられ、既に忠誠を誓った天狗も多い。
かく言う私も彼女の事は嫌いでは無い。
寧ろ好きな部類と言える。

だが、その……なんだ。
私としては魅力的過ぎるが故に近寄り難いのだ。
彼女と合うとどうしても気持ちが昂ってしまい、それこそお酒の時と変わらぬ醜態
を晒してしまう事さえある。
番(つがい)になりたいとかそういう願望がある訳ではない。
どちらかと言うと憧れが一番近いのかもしれない。
中には前者の理由を持つ者達もいるみたいだが……

とりあえずそれは置いておいて。
既に二つの勢力が合流して二月程になる。
しかし私は未だ彼女とまともに話した事は無い。
本物の大将は傍にいるとあれ程緊張するものなのね……
鬼神も対峙した時は本気で命を取られると思ったわよ。
天魔がどれ程大将らしくなかったのか身を持って知らされたね。

（さて、どうしたものかな……私もそろそろ危ないのよね～）

何が危ないか。
その一因は山に入ったというのに総大将であるイルミナを避けている事にある。
私は接触する度に不自然な挙動で逃げ出し、更に不本意ながら積極的に彼女を
避けているのだ。

……早い話、謀反に出るのではないかという噂が出始めている。
最初は恐らく私の行動を不審に思った天狗か鬼かの何者かからポロリと出た一言が原因だろう。
だが集団行動の中で情報というのは風よりも速く伝わるものだ。
正直迂闊だったとしか言えない。

（はぁ～。とりあえずどうにかして接触、会話でもしないと……あ、でも
どんな話題で話しかければ良いんだろ）

私がうんうん唸りながら打開策を練っていると、
ふと耳に誰かの歌声が入ってきた。

その歌は音の調子が軽く、歌声も聞き惚れる上に曲調も明るいのだが
何処か歌詞が寂しい感じがした。
それこそ届かない何かに手を伸ばそうとしてるかの様な……

私は歌声に惹かれてふらふらと近寄っていく。
すると目の前に小さな湖が現れ、驚いて素早く動きを止めた。
そして――

（……今日もついてないのね）

その先には私が今最も会いたくない人物。

あの銀髪の少女がいた。

@イルミナSide

やぁ皆。
人間になった猫、イルミナだよ。
いや、猫になった人間か？
どっちでもいいか。

俺は今ちょっとした練習みたいな事をしている。
その内容は『能力』の練習だ。

人伝に聞いた話だと、能力というのはちょっとした異能の力で持ってる妖怪はそれだけで一つのアドバンテージとなるそうだ。
正直意味分からん。
俺の予想だと能力ってのはその者を示す本質なんじゃないかと思っている。
生物ってのは人間含めて、全てが全て似通ってるって事は無い。
生物学者や何処ぞの羊さんと違って心理学をやってない俺には良く分からんが、
殆どの奴らが似た性格をしてるって事は無いだろう？

多少似通っていてもやはり何処か違う、それは生物としての個性であるから。

後、覚醒時期も個体によってまちまちだそうだ。
生まれてすぐってのもいれば、死んでも目覚めないなんて奴もいる。
俺の場合は生まれて（転生して）３０年、人間年齢に換算すれば５歳くらいか？
天狗達が１００歳で漸く一人前になるって言ってたから多分そうだろう。
まぁ人間にしても早い方だ。

ちなみに発覚したのはついさっきだ。
俺が何気なく自分の記憶を掘り返して使えそうなネタが無いか探して……
え？　何やってんだよって？
まぁいいじゃねぇか、それより続きだ。
そんな時に気付いたのだよ。何にって、そりゃお前アレだ――

――記憶が全て戻ったんだよ。

正直驚いたね。
前まで分からなかった自分の名前とか親の名前、今まで忘れていた約束も
含めて全て”思い出した”のだから。
それも突拍子無く突然に、だ。
出来れば俺の前世（？）の名前とか教えてやりたいが、それはまたの機会としよう。

そこで俺はもう一つ思い出したのだ。
それは俺がまだ床に伏せてた時に見たあの夢。

如何にも女神ですって感じの女性が俺に延々とゲームのモブみたいに話しかけてくるアレ。
あの時に聞いたのだが、俺には能力があるそうだ。

そして俺が「出でよ！　俺の秘めたる大いなる力よっ！」とか言いつつそれを
探してみたら……

あったんだよ、それも結構あっさり見つかった。

確か能力名は『原初を操る程度の能力』

さっきも言ったが、俺は能力を己の本質を現す鏡だと思っている。
とするとこれは俺の本質である事は間違いないのだが……

”原初”って何の事？
ぶっちゃけ意味が分からん。
無論言葉の意味だけは知ってる。

原初というのは物事の起源、即ち全ての始まりの事。
哲学用語では万物の根源、または根源的原理を指す宇宙の神的・神話的な起源である。

関連するものなら、原初神のカオスだろう。
世界の始まりにあって存在した原初の神。
カオスは全ての始まりという訳ではなく、あくまで場としての役割しかない。
しかしその『場』が存在するお陰で、後の大地（ガイア）や暗冥（タルタロス）の地下の奥底、
そして美しき原愛（エロース）が存在できるのだ。

ちなみにカオスの実の子とされるのは幽冥のエレボス、夜の女神ニュクスだ。
そしてその二人から上天の光明ことアイテールと昼の女神ヘーメラーが生まれるのである。
……地味に近親相愛であるが、昔の神々では良くあった事なので気にしない。

さて、ここまで説明がてら振り返ってみたが、皆には分かっただろうか？
俺には全然だ。
原初……全ての始まりを操るってどういう事なんだろうか？
そして記憶が全て戻ったのと関係あるのか？
俺は関係ない気がしてならない。
能力の真意が分かれば納得できる気もするんだがなぁ……

仕方ない。
何か歌って気分転換でもしてみよう。
記憶が戻ったお陰で過去放映されたアニメから同人ゲームが元になったヴォーカルアレンジまで思い出したからな。
え？　何で覚えてる？
ほら、気に入ったアニメのオープニングとかってなんか覚えようとか考えない？
俺の場合それが昔のアニメや同人作にまで向いていたって事だよ。

ちなみに現代（俺が居た時代）のアニメＯＰは殆ど覚えてない。
どのテレビ局も開発や発展云々とか、情操教育に良い物しか流さない様にしている為、
つまんねぇアニメが台頭し始めたから見ること事態をやめたのだ。

俺が見てるのは大抵昔のアニメの録画、もしくはブルーレイである。
親も重度のアニメオタクだったから丁度良かったな。
ん？　俺？
ゲーム以外のグッズは集めてないが、オタクなんじゃないか？
世間の風評などどうでも良いのだよ、そんなの気にしてたら趣味なんざ作れねぇ。

「～♪　～♪」

俺は誰もいない事を確認して歌を口ずさむ。
歌い出しは優しく、しかして明るく歌い始める。

『ｍｏｏｎ　ｌｉｇｈｔ　ｓｔｅｐ』

とあるＳＴＧでボスのテーマソングとして流れる音楽。
『妖魔夜行』をベースにしたヴォーカルアレンジ曲だ。
光に焦点を当てた曲の様で、月と闇を操る一人の少女の掛け合いみたいなイメージである
自分の闇で唯一隠せなかった月の光が、次第に見えなくなってゆく……
そんな切ない感じの曲だ。
つっても俺が感じた程度の感想だがな。

ちなみにこの曲。
とある古店で見付けたのだが、個人的にかなり気に入ってる歌だ。
そのＳＴＧに興味を持ち始めたのもその店に置いてあったからである。
本当に偶々とはいえ、掘り出し物を見付けたと喜んだものだ。

そして誰も居ない事をいい事に勝手にヒートアップしていく俺。
現代なら変人扱いだろう。
だがこの時代で、この場所ならば問題ないッッ！！

が、それは今思えばフラグだったのだろう。

ガサッ

「あっ」

「……あっ」

茂みが擦れる音と共に現れたのは何処かで見た様な少女。
明らかに「今までずっと見てました」的な位置取り。

これは……

「聴いた？」

「あ……えと……はい」

俺の問いに戸惑いながら頷く少女。

……

（き、聴かれたーーーーッッ！！！？）

外見では全く何も無い様に見えるが、内心大葛藤。
それこそ親にエロゲやってる最中の自分を見られて気拙そうに出て行った
母親を見送った後の様な状態になっている。
喩えが長い？　マジでそうなってるんだからしょうがないだろっ！？

半ば半狂乱になっている俺。
仕方ないじゃない仕方ないじゃない、だってドヤ顔で歌ってる所を目撃されたんだもの。
ぜってぇ「こいつマジキメェ」とか思ってるだろーよ。

くっ！　終わった！
俺の大切な何かが終わった！
こんな事ならもっと自重して小声にしとくんだった！
そうすれば最低限、うっかり聴かれるという事態にはならなかったのに～！

「そ、そうか……聴いちゃったか……」

俺はショックで返した言葉のトーンが一気に落ちる。

明らかに「私、ショックです」って感じの声になったが、誤魔化す事はしない。
いや、それ以前にカバーする気力とか無いからね？
なんかもう色々と奈落の底へ落ちたみたいな状態だから。

と、俺は負の感情を隠しもせず駄々流しにしながら、
先に非礼を詫びる事にした。

「ははっ、悪いな……耳に毒だったろう？」

「なっ、いえっ！　寧ろまだ聴いていたかったです！」

「そうだろうそうだろう、だから忘れて……えっ？」

なん……だと？
下手だと分かっていながら歌わせる気か？
なんという羞恥プレイ、こやつ……怪しい格好（ベールで顔見えない）の上にドSなのか。

「いやいや、無理しなくて良いのだよ？　自分でも酷いと思ってるから」

俺はドMじゃないからな、丁重にお断りさせて頂く。
するとどうしても歌わせたいのか、少女は必死に励まそうとしてくる。
上げて落とす、ですね？

なんという苛めっ子気質……！

「か、勝手に聴いた事は謝ります！　ですが、そんなに卑下なさらないで下さい！」

卑下って……
俺は事実を言っただけなんだがなぁ。
昔（現代）歌ったら友人二人に「お願いだから歌うのやめて……」とか
言われたぐらいだからな。
伊達に自他共に認める音痴ではないのだよ。

「気を遣う必要は無いよ、自分でも良く分かってるから」

もう一度断ってみる。
他人に披露できるもんじゃないし、気分で歌ってただけだしな。
しかし少女は迫真の表情で迫ってきた。
か、顔が近いっ！

「そんな事ありません！　誰が聴いても納得すると、私が保証しますっ！」

彼女はじっと目を見つつハッキリと言い切った。
少女の目は真っ直ぐで、嘘だとか、からかうのが目的ではないと何

となく感じ取れた。

「……ほ、本当にか？」

「はいっ！　ですから、その……今一度、歌っては貰えませんか……？」

彼女は潤んだ目で俺を見る。

や、やめろっ！　そんな捨てられた子犬みたいな目で見るんじゃないっ！

俺は彼女の視線に耐え切れなくなり、遂に白旗を揚げる事になった。

「あ～……分かった、分かったから少し離れろ」

「え、あっ！？　す、すいません！」

彼女は慌てて至近距離まで迫った顔を遠ざけた。

表情が分かったのは、ベールが薄いが為に至近距離でうっすら視認出来たからだ。

……そして若干顔が赤く見えるのは夕日が落ち掛けているからかな？

というかベールの上からでも分かるもんなのな。

「そんな上手いもんじゃないと思うが、そんなに言うなら歌ってやるさ」

「ややや、ほっ、本当ですかっ!?」

「そんなに喜ぶんだ……まぁいいか、ただ下手だからって笑うなよ？」

「そんな事、絶対にしませんっ！」

ほほぉ、言い切るか。
なら……

「少し信用してみるかな……――」

そう呟きながら、俺は再び声の旋律を奏でた。

……出来れば現代で言われたかったもんだぜ。
と、ちょっぴり物悲しくなったのは内緒である。

@後押しの真夜Ｓｉｄｅ

私は思わず聞き惚れていた。
最初彼女を見付けた時は思わず後退りしてしまったが、聴いている内に
その気持ちは段々と消え失せていってしまった。

「綺麗な歌声……」

彼女の声は心にまで浸透してくるくらいに透き通っており、言い過ぎと言われるかもしれないが、それこそ今まで聴いたどの音よりも美しいと感じていた。
更に歌っている彼女と相俟って幻想的に見える。

私はその歌声に引き寄せられる様に、一歩、また一歩と足を踏み出す。
多分無意識だったのだろう。

ガサッ

「あっ」

「……あっ」

迂闊にも、前に出過ぎて彼女の前に姿を曝け出してしまった。
自分の行動に後悔しながらも、何も言い出せずに硬直する私。
彼女も私がいるとは思わなかったのか、同じ様に私を見詰めたまま動かない。

「聴いた？」

「あ……えと……はい」

私は返答の準備も出来ていなかった為か、思わずそのままの反応で返してしまう。
その失敗に後で気が付き、「しまった」と後悔するが……

「そ、そうか……聴いちゃったか……」

と、見るからに消沈してしまっていた。
ややや～！　これは失敗した。
初接触がこんな最悪な形でだなんて～～～！

「ははっ、悪いな……耳に毒だったろう？」

「なっ、いえっ！　寧ろまだ聴いていたかったです！」

自傷し始めた彼女に、思わず反射的に答える私。
するとイルミナ様（以後コレ）はぞう返ってくると想像してなかったのか。

「そうだろうそうだろう、だから忘れて……えっ？」

と目を丸めて唖然としていた。
ちょっぴり可愛いと思ったのは間違いではないはず。

イルミナ様は我に返ると、指を立てて分かっているとでも言いたげに舌を二回鳴らす。

「いやいや、無理しなくて良いのだよ？　自分でも酷いと思ってるから」

彼女は昔を思い出すかの様に遠い目をして空を見上げる。
もしかして勝手に聴いたから怒ってる？
私はそう考え、慌てて謝罪した。

「か、勝手に聴いた事は謝ります！　ですが、そんなに卑下なさらないで下さい！」

私は確かに彼女の歌を聴いて感動したのだ。

出来ればそれだけでも否定しないで欲しい。
だがそれは通らなかった様で……

「気を遣う必要は無いよ、自分でも良く分かってるから」

何故彼女はこんなにも自分に否定的なんだろう……
こんなにも素敵な歌声だったというのに。

ハッ！

もしかして環境が彼女をこうさせたのでは？
今の鬼の大将達はイルミナ様を大切にしているみたいなので除外。
だとしたら彼らと出会う以前。
遥か昔からの事なのかもしれない。

恐らく彼女の才能、力に嫉妬した者達が態と貶し続けたのだろう。
でなければあそこまで否定的になる筈が無い。
イルミナ様の歌声は綺麗だし、人を惹き付ける魅力があると思う。
だがそれは他の者から見れば羨ましい限りだろう。

優秀であるというのは別段良い事ばかりではない。
私自身それは嫌というほど経験してきた。
最初は何一つ長所の無い鴉天狗だったからか、誰一人として気に掛けやしないし、
普通に接してくれる事も多かった。
だが私が実力を付けると、掌を反したかの様に態度を変えて擦り寄る、媚びる、
妬まれたし陰口だって当然の様に受けた。

私はまだ未熟な鴉天狗。
生を受けてまだ百年と経っていない。
だが彼女の妖力量から考えて、その年月は途方も無い数字になる筈だ。
そんな中、そんな長い間中傷、非難を受け続けたら普通はどうなる？
耐え切れなくなった心は簡単に壊れてしまうだろう。
だがイルミナ様は危機を感じ、そして皆を思って外へ出た。
それはとても勇気が要るだろうし、とても怖かった筈。
突然住み慣れた地から放り出される様なものだ、そんなの当然だ。

今と昔。
その違いは途轍もなく大きいだろう。
だが彼女は過去に囚われ、自分を信じられなくなっている。
私は唯の鴉天狗。
彼女の親友でもない私がする様な決意では無いだろう。
だが私は、憧れである彼女を救いたい。

「そんな事ありません！　誰が聴いても納得すると、私が保証しますっ！」

私は叫んだ。
彼女に届く様に。
彼女が理解できる様に。

すると彼女はまるで私を見極めるかの様にじっと見詰める。
恐らくこの言葉が真実かどうかを見定めているのだろう。
だがこの言葉に裏表は無い。

純粋に彼女の歌声に惚れたからこその言葉なのだ。
嘘は無いと断言出来る。

「……ほ、本当にか？」

「はいっ！　ですから、その……今一度、歌っては貰えませんか……？」

イルミナ様は私の言葉が嘘で無いと分かったからか、私に尋ねる。
それこそ『信じて良いのか？』とでも言ってる様に。

私は黙って彼女の目を見詰める。
嘘ではないと。
信じても良いのだと訴えかける為に。

するとイルミナ様は目を少し逸らすと、静かに言葉を放つ。

「あ～……分かった、分かったから少し離れろ」

「え、あっ！？　す、すいません！」

私は彼女に急接近していた事に気付いて慌てて飛び退く。
ややややっ、正に目と鼻の先というくらいに近付いちゃった……！
私とした事が迂闊だったわね。

イルミナ様は此方をじっと見て、暫くすると溜息を吐いた。

「そんな上手いもんじゃないと思うが、そんなに言うなら歌ってやるさ」

「ややや、ほっ、本当ですかっ!?」

降参とでも言いたげに両手を挙げる。
少しでも信じてくれたのが嬉しくて声が裏返るが、そんなの気にならなかった。

「そんなに喜ぶんだ……まぁいいか、ただ下手だからって笑うなよ？」

「そんな事、絶対にしませんっ！」

私は断言してみせる。
イルミナ様は私の言葉に再び目を丸くするが、直ぐにフッと笑う。
そして油断していれば聞き取れない様な声で

「少し信用してみるかな……――～♪」

と呟き、また声を鳴らし始めた。
軽やかに、けれどやっぱり悲しげに。

けど、先とは違って負の感情の乗っていない綺麗な歌声。
私はそれを、ただただ傍らで歌に耳を傾けた。

@真夜Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ……

「そういえば、名前訊いてなかったな。訊いても良いかな？」
「はいっ！　私は鴉天狗の真夜、射命丸真夜ですっ！」
「……えっ」
歌った直後、イルミナは彼女の名前を聞いて大層驚いたとか、驚い

てないとか。

其の九　「天狗と猫」（後書き）

私メリィさん、今テスト勉強してるの。

徹夜とか余裕です、なんて言えません。

皆さん御機嫌よう、メリィです。

今回は割と迷走してる感が強いです、はい。

練習に来たって割には何もしてないし……

とりあえず能力名が出ました。

まぁ猫さんがまだ理解しきって無いので能力は分からずじまいですが……

真夜ちゃんを前に出張らせた結果、なんかこうなりました。

それと最後に一言知ってる方に。

『ｍｏｏｎ　ｌｉｇｈｔ　ｓｔｅｐ』、良い曲ですよね。

それではさいならさいなら～ノ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1539v/

東方神猫伝

2011年11月24日02時54分発行